魔法少女リリカルなのはStrikerS ～天駆ける翼～

アカルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～天駆ける翼～

【Ｎコード】
Ｎ６４８１Ｕ

【作者名】
アカルト

【あらすじ】
空の王の遺伝子を持つ青年、
半年後に起きる管理局システムの崩壊、
一年半後に起きる管理世界の崩壊、
彼は機動六課で何を感じ、何を守るのか。

リリカルなのはの二次創作です。
オリ主＆オリキャラ多数出てきて、ＪＳ事件終了後にはオリジナルストーリーが入ってくるので「それでもＯＫ」な人に読んでいただ

けるとうれしいです。
基本シリアスです。

第零話　プロローグ

リリカルなのはの2次創作です。
オリキャラ&オリ主などが出てきます。
初投稿&初作品などで変な表現などがあるかもしれませんが最後まで頑張ります（「▽ｰ）

プロローグ

ドン！

耳を塞ぎたくような大きな爆発音が遠くでする…

黒髪の男が目の前にある丸い大量の男＞何か＜に向かって叫ぶ

「ブレイズキャノン！」

男が持っている杖のような物から青い光が放たれ球体になり…目の前にある大量の＞何か＜に向かって発射される
砲撃は男の目の前にある丸い何かを粉砕するが…数が多い…

「ああもう！役割が逆じゃないか！」

そう言いながらも男は目の前のものをなぎ払う

（どうだ～クロノ　楽しんでる～）

（何がだ！これは基本　君の役目だろう！）

そう言ってクロノと呼ばれた男は念話の相手に怒りをぶつける

（わるいわるい、もう少しでデータのコピー終わるから）

（まったく）

そう言いクロノは足元に青い魔方陣をつくる。

（雑魚はついでだから片付けておく…）

（わりいな）

一度だけ深いため息をつくと足元の青い魔方陣が強く輝きはじめ

「スティンガーブレイド・エキスキューションシフト？」

そう叫ぶと青い短剣が大量に出現し目の前のものに当たり爆発した…

「お疲れ～」

いつの間にか現れた小さな男が陽気な声でクロノに話しかける
男だとは分かるが身長は１６０前半だろう
「まったく本当に君は言う事を聞かないな」
「あんまりストレス溜めると…ハゲるぞ…」
「誰のせいだ」
「さあ？」
そう言って首を傾げる。
「それで、どうだった？」
真剣な表情になったクロノが少年？に聞く、さっきまでとはあきらかに表情が違う
「たいした情報は無かったな、しいて言うなら予言どうり」
「それでも大きな収穫だ、確信になったのなら半年後の予言のほうにそなえられる」
「…奴らは１年半位動かない、得た情報はこれだけ…か」
少年は安心したような声をもらす
「君は約束どうり六課のほうに行ってもらうぞ」

がっ、クロノがそう言うと少年は苦い顔をする

「デスクワークできないぞ…俺」

「妹に手をだしたら凍らせるからな」

「シスコン」

「なっ！」

クロノがこの後エターナルコファンを発動させたのはいうまでもない

主人公設定（前書き）

ダメダメだけど謎だらけの主人公です

主人公設定

名前　ケント・スカイ
魔導師ランク　－Ｓ　？
魔力量　ＡＡＡランク相当　？
魔力光　白と黒の混色（白の中に黒が混ざってる感じ）
階級　二等空尉　？
術式　ミッド主体ベルカ混合
出身　ミッドチルダ北西部？
年齢　１９歳
身長　１６４ｃｍ
体重　５１ｋｇ
希少能力１　閃光（限界の反射神経・超速移動）
希少能力２　？
好きなもの（事）　甘い物　読書　空を眺める
ｅｔｃ

嫌いな物（事）　心霊系全般　デスクワーク
etc

黒髪に青い目をした青年、顔は整っており背が高いと［かっこいい］なのだろうが残念ながら低いため［かわいい］と認識される事がしばしばある。
基本明るく誰からでも好かれる性格だが自分が本当に信頼している人間にしかほとんど信用しなかったりという部分がある。仲間や友達を失うことを非常に恐れておりときどき－Sとは思えないほどの力を見せる。過去の話しになると辛そうなそぶりを見せなにかあったのかと思われる。デバイスはシーザー

デバイス　シーザー

待機状態　逆三角の白いペンダント

刀状のインテリジェットデバイス、声は女性でよくケントをからかう、だが彼とは絶対的な信頼関係に結ばれており力を発揮する。シャーリーのメンテを拒否し本局にいる［ある人］にしかたのまない普通とは変わったデバイス

主人公設定（後書き）

？だらけですみません（ぺこり）
物語が進むにつれて更新する予定なのでよろしくお願いします。

第1話　問題児（前書き）

今回はちゃんと主人公の名前だします
すっかり忘れてました（がくっ）
けっこう謎が多い主人公ですが頑張ります！

第1話　問題児

「グオー」

「クマだよな」

＜クマですね＞

はいクマがいます…なんか2メートルくらいのヤツが身長１６４しかない俺を見上げるようにして、なんでミッドチルダに？

＜あっ、マスター、道間違えました（笑）さっきの道右ですね。ちなみにここは自然保護区だったりしちゃいます。＞

「あ～そういうわけ、だったらクマがいるのもなっとk…ってオイ！」

＜なんでしょうかマスター？＞

「さっきの曲がり角ってだいぶ前だぞ！てかあと1時間で顔合わせの時間じゃん一日目から遅刻なんてシャレになんねーぞ！」

＜マスターは苦労人ですね～＞

「おまえのせいでな！」

そのあと命からがら逃げました、死亡原因が〝クマに襲われ死亡〟で新聞載りたくないからなあ

機動六課

「…遅い」

「まあまあ、はやてちゃんおちついて」

「そうだよはやて　向こうも何か理由があるんだろうし…」

ショートカットの茶髪女性を同じく茶髪のロングヘアーの女性と金髪のロングヘアーの女性とでなだめる

「それでもや、部隊全員の顔合わせからもう3時間や、クロノくんからの推薦でーSランクがおるーゆーてひきぬいてきたゆうのに…副隊長としての自覚あるんやろーか？」

「あはははは」

さっきからはやてはグダグダだ…

まあ3時間もいすに座っていたら当然か…

「しかも連絡もせんと、なあ…せっかくフェイトちゃんの部下やのに」

そういって金髪の女性を見るその時に

{トントン}

「入ってええよ〜」

はやてがそう言ったあと一人の男が入ってきた…新品なはずの制服をボロボロにして…

「機動六課ライトニング部隊副隊長ケント・スカイと相棒シーザー遅れました…」

＜ごめんね〜＞

いまにも倒れそうな青年と楽しそうな声でしゃべるデバイスがそこにいた

第1話　　問題児（後書き）

短いです、すみません（ぺこり）
主人公の名前はケント・スカイです
いろいろ苦労人ですがよろしくお願いします

第2話　　隊長達（前書き）

小説って書いてみると大変ですね
テスト勉強ほったらかして書いてる自分がいます。

第2話　　隊長達

クマから逃げてきたケントです…はい。
さっきのクマって時速５０キロで走るんですね～
いや～驚きました（，　▽　、　）ノなんかところどころかまれたけど気にしたら負け…うんそうしよう

＞汗くさ！＜

てかデバイスに鼻ってあんのか？謎だ
なんかバカデバイスがなんか言ってるけど無視無視
それよりも目の前の扉が問題だ…
なんか黒いオーラがだだ漏れしてるんだけど…あと殺気…

「ここが部隊長室で間違いないんだよな…」
入りたくね～！グダグダオーラ大量生産中じゃん！俺のせいか、俺のせいなのか！だが

「くっ、ここで入らなければ男がすたる」

俺は死を覚悟し扉をノックした

はやてｓｉｄｅ

いろいろツッコミたい事があるけど今はがまんや、うんがまんや

「初めましてやな、私が機動六課部隊長の八神はやてや、クロノ提督推薦のケント・スカイ二等空尉であっとるやおか？」

「あっ、はい、問題ないです」

おお！挨拶は悪くない、服ボロボロやけど

「高町なのは一等空尉です！スターズの隊長で違う部隊だけどよろしくね、ケント君。」

「はっ！フェイトＴハラオウンです。同じライトニングの隊長だけど執務官の仕事で留守にする事が多くて迷惑かけちゃうかもしれないけど１年間よろしくね。」

「こちらこそよろしくお願いします、なのは隊長、フェイト隊長！」

あとから紹介した金髪少女が赤くなっとたんは後でからかうとしてとりあえず簡単な自己紹介は終わった事やし本題やな、

「じゃあなんで遅れたか聞かせてもらうか？もちろんちゃんとした理由あんねやおな～」

とびきりの笑顔で言うたった。

さあ、あんたを待っとったこの３時間の恨み、はらさせていただこか

ｓｉｄｅ　　ｏｕｔ

やっぱり聞いてくるよな。

俺は心の中で深い深いため息をし２つの選択を選ぶ事にする

その１・素直に話す

その２・仕事に関する用事を自作する

その２を考えれば被害は少なくしむ…だが！

「えっと、クマに襲われました…」

ああ…みなさんの目線が痛い、うん、だって本当なんだもん。あとで変な罪悪感残したくないもん、時速５０キロで走るクマに襲われたんだもん、ミッドチルダにも熊いるんだもん

「あ～それは災難やったな～それやったらしょうがない…てっ、そんなわけないやおボケ～副隊長が初日から遅刻とはどういう意味や！」

ああ部隊長怖いです…後ろに狸顔の修羅が見えるのは俺だけですか？あとデバイス持つのやめて（＿＿（；）

「あはははははは」

「大丈夫や、軽いお説教だけやから」

おそらく軽いの価値観はお互い違うのではないでしょうか

（残念ね、マスター）

このバカデバイスは明日解体しよう、そうしよう

結局その日ははやてさん（本人がそう言えと）に正座で2時間怒られた…マジあしイテェ

ｓｉｄｅ　フェイト

どうしたらいいんだろう…

廊下にケントが倒れてる…なんか「足が痺れる」とかいってるからはやてかな、原因は…

ほっとくわけにはいかないし…どうしよ…

「えっと、だいじょうぶ？」

かがんで声をかけてみる、

＞ごめんね～ダメマスターで～＜

デバイス？えっと確か名前はシーザーだったけ…

「何がダメマスターだダメデバイス！」

だいじょうぶそうかな？

「すみませんフェイト隊長、足が痺れてるだけなんで少ししたら治ります」

「フェイトさんでいいよ同じ分隊なんだしね」

「はい、わかりました。」

笑顔でそう返してくる…なんか…やっぱり可愛い…いちょう同い年なのに

「よいっしょ」

そう言ってケントは立ち上がる…復活早いな…

「部屋の荷物整理やら仕事やらあるので戻らしてもらいます。明日から訓練入りますんで。」

そっか、私がいないシグナムと同じ副隊長なんだよねこんなに小さいのに

「そこらへんはなのはに聞いてもらえればいいよ。指導頑張ってね。

」

「わかりました」

うん、いい返事そう言ってケントは男性遼に行ってしまう

さて、私も仕事しないｔ

「フェイトちゃんにも春がきたな～」

「はやて！そっ、そんなことないよ、ちょっと可愛いと思っただけで、」

「図星やな～でもあともう一歩で恋愛に変わるところやな～よし、私がフェイトちゃんが本格的な春に目覚めるように強力したろ～まずはなのはちゃんに報告や…なぜバリアジャケットを付けていらっしゃっるのですかフェイトさん」

「バルディッシュ…トライデント、」

「わ、悪かった、うちが悪かったから許しｔ」

「スマッシャー？」

機動六課は初日から隊舎の一部が破壊された…

第2話　　隊長達（後書き）

ケント「俺ってなんて不幸なんだ」
作者「君に幻想殺しなんて能力つけるつもりさらさらないからね」
ケント「バカなデバイスに馬鹿な作者、俺ってほんと不幸だー」
作者「馬鹿でサーセン」

第3話　　遅刻……（前書き）

しょうもない話しです…（~ ―~ ;）

第3話　　遅刻……

遠い…

一通り六課の人達に挨拶をすまして自分の寮に向かってるけど…
男子寮の端なんて聞いてねーぞ、なんだ？部隊長のいじめか？
長い廊下を歩き終えて自室のドアを開ける

「なかなか綺麗じゃん！」

ベッドは清潔感あふれ基本的な生活用具は全てそろってる、奥に行くとベランダから海を見下ろせる、ちょっとしたリゾートホテルだな、これ。
デバイスがキャーキャー言ってるがあえて無視してベッドに倒れこむ…クマに襲われ部隊長に説教され、まあさっき見た感じだとこの部隊ではなんとかやっていけそうだ。

＞明日は新人達の訓練見るんでしょう？＜

新人のＦＷ陣達は初日から訓練らしく会うことができなかった、まあ明日会うことになるからいいか…
「ああ」と軽い相づちをうっておく…
そういえば同じ分隊の部隊長のシグナムさん？に挨拶した時なんか模擬戦申し込まれたけどなんだったんだ？
そんな事を考えながらも俺は眠りについた…

「初日に遅れたうえに二日目は寝坊とはどういう神経しとんじゃあんたは？」
そういいながらも一時間正座で説教されているケントです…
「申し訳ございません」
「その気持ちがあんねやったら寝坊すんな！」
８時開始なのに１０時に起きました…バカデバイスになぜ起こさなかったかを聞いたら
＞そっちの方が面白そうじゃない＜
だとよ！
訓練…午後からちゃんと見よ…
ｓｉｄｅ　　スバル
お昼ご飯食べ終わったあと訓練場にみんなと行ったらなんか男の子がなのはさんと【お話】してた…なのはさんの額に青筋はしってるけど大丈夫かな？あっ、ティアじゃっかん引いてる…
「えっと、昨日紹介できなかったんだけどライトニング分隊副隊長のケントくん。フェイト隊長が仕事柄留守にする事が多いから補佐として来てくれました。」

えっと…なのはさん？なんか全部言っちゃいませんでした？自己紹介くらい自分で出来ます…

「えっと…ケントです、よろしくな～」

簡単な挨拶、他にもいろいろ聞きたいけどご飯の時でいいよね。
その後シーザーさん？やエリオとキャロ、ティアや私が自己紹介した後に…

「じゃあ模擬戦やろっか！みんながどれだけ出来るかどうか見学させてもらうから。」

（スバル、やるからには勝つわよ）

なんかティアが怒ってる？なんでだろ…けど、うん…やるからには勝つ！

（うん！）とだけ念話で返事し、スバルは持ち場についた

ｓｉｄｅ　　ティアナ

たしかに副隊長だから尊敬はしないといけない…でも…

「あれはなに？」

部隊結成一日目から遅刻し、さらには午前の訓練にも【寝坊】なんかふざけた理由で来なかった…
いくら隊長といっても意識が低すぎる

「自分はがどれだけ迷惑かけてるか分かってんのかしら？」

あんなふざけた奴に負けられない…

「絶対勝つ？」

そう一人でつぶやき、ＦＷ陣に指示を出していった…

第3話　　遅刻……（後書き）

次回は簡単な戦闘です。
うまく書けないかもしれませんが頑張ります！
はやて「私の扱いひどくない！」
作者「大丈夫だ、問題ない、たぶん」

第４話　　初めての模擬戦♪（前書き）

上手く書けません…
ぐだぐだですがどうぞ～

第４話　　初めての模擬戦♪

俺の意見を全くきかず、なぜか模擬戦が始まった…

「やるしかないよな～」

＞どうしたの？もしかして勝てない？＜

むっ！こいつ主人に応援の一つぐらいできんのか！

（じゃあ今から３０秒後に始めるよ～）

なのはさんの元気な声が響く…声のテンションは遠足に行く前の小学生みたいだな

そんなことを思いつつ

「じゃっ、セットアップ…」

＞みんなみたいに元気に言えないの～？セット！アップ！！的なノリで～＜

「馬鹿いえ！あんな恥ずかしいの１９にもなって大声で言えるか！そんな馬鹿今どき見ないだろ！」

（ううっ…ごめんね…馬鹿で…）

「えっ、マジですか…」

（うん…）

「…シ、シーザー！早くセットアップ！」

＞はいよ～♪＜

そう言いシーザーにジャケット装着をうながす…

ひそひそと後で〔お話し〕などと言っているがあえて無視する…

うん…そのほうが身の安全は約束される…

俺のバリアジャケットが展開される…全体としてはクロノのジャケットを白を主体に黒といった感じだ。肩のトンガリやらなどはない…あと刀状となったシーザーが腰にぶら下がってるぐらいか？ちなみに、なぜこんなのかというと…俺にはファッションセンスがないらしい、前にエイミィさんのまえでデザインしてみたら盛大に笑われた…そんなに悪かったか？あれ？

＞ダメマスター？模擬戦始まってるわよ～＜

あっ！本当だ…、じゃあいっちょやりますか！！

仕掛けてきたのはエリオだった。青い槍をこちらに向けながらすごい速さで突っ込んでくる…ピンク色の魔力をまとっているので恐らくフルバックであるキャロのブーストでスピード強化をしているんだろう…

「真っ正面からつっこんでくるか、なかなかいいけど……」

そう一言いうとケントは右腕に魔力による身体強化をしたかと思うと、エリオを片手で〔受け流した〕そのままエリオはスピードを抑えきれず

「え！うわーーーーー！」
などと、叫びビルに衝突する、だがケントにはそれを見る時間がない
エリオの真後ろ…ちょうどケントの死角になるように飛んでいた魔
力弾がエリオを受け流した瞬間に襲ってくる…しかも後ろからは…
「はあああああああ！！！」

青髪のフロントアタッカー、スバルがリボルバーのような物をグイ
ングインならしながら殴りかかってくる…おそらくさっきのエリオ
は囮で魔力弾を当てて、俺がバランスを崩したところにスバル、も
し外れても体制を立て直したエリオがいる…か…

「だが！まだまだーーー！！」

そういい俺は一瞬だけ…

レアスキルを発動させる

エリオを受け流した手で魔力弾を〔はじく〕、エリオのほうに…
それと同時進行でスバルのリボルバーを付けている右手首を下から
手刀で打ち、スバルの攻撃もはじく、スバルが片手バンザイのよう
な体制になり…、その時には魔力弾をはじき終わっているのでその
ままスバルのジャケットを掴み…

「うわーーーーー！！」

「ギャーーーーー！！！」

エリオに投げる……
ちなみに下がエリオで上がスバルだ。
なんかエリオだけ災難な感じがするが気にしないでおこう、２人にバインドをして

「前線撃墜♪」

した…まあこれで模擬戦終了だな、後方だけでは勝負になんないだろ…

＞マスター…＜

「なんだよ？」

＞ほどほどにしないと怪しまれるわよ…＜

「サーセン」

うう…今正体ばれたらクロノになんて言われるか…やり過ぎたか？
てかちゃっかりスキル使ったし…
そういえば一歩も動いてねぇ、どうしよう…
その後なのはさんからの通信で模擬戦は終了した…

ｓｉｄｅ　ティアナ

「強過ぎる…」

あの副隊長はその場から一歩も動かずに…攻撃魔法を使わず…デバイスさえ振らないまま私たちに勝ってみせた…

悔しい

今の思い…キャロのブーストは完璧だったしエリオも自分の役割を果たした…失敗したのは訓練を積んできた私とスバル…しかも私はあしでまといにもなってしまった…

だけど…

「強くなってやる」

兄さんの果たせなかった夢を、ランスターの銃弾は弱くないということを証明してやる！そのためにここへ来たのだから。

自分の思いを再確認し…ティアナはなのはの元へ戻った…

side　なのは

「はぁ～～」

「大丈夫ですか、なのはさん？」

うう、せっかくケントくんの実力見れると思ったのに…あれじゃわかんないよ…

シャーリー慰めてくれたけど、うう…今度模擬戦申し込もっかな？

ちなみにあの後ケント君は

「デスクワークがあるので～」

とか言って消えてしまった
それより、
〜ティアナの魔力弾…普通なら反応なんてできないような距離とスピードだった…どうやったんだろう？〜
そんな小さな疑問を持ちながら、なのはは教導を続けた…

第４話　　初めての模擬戦♪（後書き）

スバル「私たちの扱い雑じゃないですか？」
作者「サーセン」

第5話　ファーストアラート1

ｓｉｄｅ　？

少年が目を覚ます。手には刀…

右を見ても、左を見ても荒野でしかなく地平線があるだけの殺風景な風景…

だが人はいる…立ったままみんな眠っている、全員同じ刀、そして…

［同じ顔］

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

初めての模擬戦から一週間ぐらいがたった、ＦＷメンバーともだいぶうちとけ、六課内からも話しかけられるようになった。

よくなのはさんやシグナムさんから模擬戦のお申し込みがくるのだが丁重のお断りしている、そして今は…

「ううっ」

「大丈夫？」

ああ、なんて優しいんだフェイトさん、それなら少し仕事を…

「それは駄目、自分でやんないと」

「なんで言いたい事わかったんですか？」

デスクワーク中です。隣には同じライトニング分隊のフェイトさん、なんだが…

「ケント君って本当にデスクワーク苦手なんだね…」

苦手です…すっごい苦手、いすに座った瞬間眠くなんない？やる気もでないし量も多いし、かんべんしてください…

結局その後フェイトさんに懇願して手伝ってもらいました。とおりかかった部隊長がニヤニヤしてたが何だったんだ？

フェイトさんは午後から聖王教会に行くらしい、俺はちなみに暇…新人達の訓練でも見るか、時間を見るとだいたい訓練終わったぐら

い…無理じゃん
大きな背伸びをして立ちあがる、食堂にでも行こうと思い足を進める
「あっ！ケント君！」
前からはなのはさん、また模擬戦のお申し込みか…
「今から新人達の新デバイスとりに行くんだけどよかったら一緒に来ない？」
どうもスターズ2人のデバイスが壊れたらしい…丁度いいのでデバイスもらおうとかいう話らしい…だけど
「えっと…お断りします。」
「な！なんでですか！」
うっ…エリオ…おまえの純粋なところは好きだが…わかるだろう
「シャーリーに会いたくね～」
あいつシーザーのメンテさせてくれってうるさいんだよ！シーザーは｛あいつ｝じゃなきゃいやだっていうし！
「う～わかった」
「すみませんなのはさん、午後からは教導手伝いますんで」
「えっ！じゃあ模擬ｓ「つつしんでお断りします」う～～～」

そんな感じの話の後、なのはさんたちはシャーリーのところへ

＜マスタ～そろそろメンテしたいんだけど～＞

「おまえは俺に本局へ行けと申すか」

＜わかってんじゃん＞

うぜぇ…メンテの時にこいつの性格変えてやろうか

「また今度な」

＜このチビマスター＞

「なんだとこら」

食堂でヴァイスと一緒にラーメンをすする

「それでシグ姉さんが「気合が足りん！」って怒るんですよ」

「お前も苦労してるんだな…」

ヴァイスとは共に苦労人として馬が合う、それぞれの愚痴なんかをメールやらなんやらで言い合う

「ケントさんはいいじゃないですか～よりによってフェイトさんに…」

「フェイトさんがどうかしたのか？」
ヴァイスが俺の肩をたたく…その瞬間
ビービー！
「これって！」
「一級警戒体制…か」
出動…ラーメン食ってからでいいかな？

第6話　ファーストアラート2（前書き）

side　ー　とは第3者目線という意味です

第6話　ファーストアラート2

ただいまヴァイスが操縦してるヘリで上空にいます…

「ねぇ、ケント君？」

「はい」

「なんでラーメン食べてるの？」

「残すのはもったいないんで」

「そうじゃなくて、もっと緊張感とか…」

「現場ではちゃんとしますんで」

なんかなのはさんが頭をかかえてるが気にしない気にしない、あとスバル、その羨ましそうな視線やめろ、食べづらい。

ちなみに事件とはなんかリニアレールがガジェット？に占領されちゃった～（「▽」）しかもロストロギアのレリックもあるからなんとかしてね～（^∇^）な、感じらしい…

「ほんと緊張感あるの？」

「すみません」

説明おおざっぱすぎたか？なのはさんが睨んできた…てかなんで俺の考えてることわかるんだ？

「さて、新デバイスでいきなりになっちゃったけど、いつも通りにやれば大丈夫だから！
おっかなびっくりじゃなく、思いっきりやってみよう！
空は私とフェイト隊長、ケント副隊長で制圧するから、みんなはスターズ・ライトニングに分かれてリニアレール内のガジェットを破壊しつつレリックを安全に確保。
何か聞いておきたい事はある？」

そう言ってなのはさんは周りを見渡す……

「無いようだねじゃあ、頑張っていこうね！」

質問とかいう以前に４人ともガチガチじゃねーか？キャロなんか泣きそうだし…

「ケントくん、そろそろ降下ポイントに着くから準備してね～」

おっ！まじか！早くラーメン食わねーと！それと…

「キャロ、緊張はわかるけど気楽にいこーぜ、あんなリンチみたいな訓練毎日してんだから大丈夫だよ。実際俺なんかガジェットよりも終わった後の報告書のほうが怖いぐらいだ、まっ、早く終わらして早く報告書書いて早くねよ～ぜ」

「ケント君はもう少し緊張感を持ったほうがいいよ…あとリンチみたいな訓練って……キャロ、そんなに緊張しなくて大丈夫。離れてても、通信で繋がってるから。ピンチになったら、助け合える。キャロの魔法は、みんなを守れる優しくて強い力なんだから」

「は……はい！」

「よし！ケント副隊長…行くよ！」

そう言ってなのはさんは……制服のまま飛び降りた……って、なに危険な事やっちゃってんの？

「えっと……みんなはバリアジャケットちゃんと展開してから降りるんだよ…」

「あっ…はい…」

「じゃ…セットアップ…」

＞はいは～い＜

一瞬のうちにバリアジャケットを展開し……

「すこし暴れますか？」

俺はヘリから飛び降りた…

ちなみにすぐにフェイトさんと合流できた

「すごい数ですな～」

「うん…目視するだけでも１００機はあるね…」

これ作った奴って今月の生活費は大丈夫なんだろうか？

「じゃっ、目視出来るやつらは潰すんでさがって下さい」

「えっ？ちょっとまって！どういうこと？」

「まあ見てて下さい」

ｓｉｄｅ　　ｌ

ケントは鞘からシーザーを抜く…

「「綺麗……。」」

なのは達が驚くのも無理もない…シーザーは持つ部分と柄は真っ黒だが刀身は純白で、太陽の光に照らされてまばゆく光っている

「いくぜ…」

そういうと刀身がまばゆく光始め魔力をためはじめる…

「これって、集束砲？」

「ムーブショット・ブレイカー！！」

ケントがシーザーを横に振ると一つの驚くほど巨大な［斬撃］が発

射される…そして…

ガガガ

「ククク っ、ああいい、とても嬉しいよ！」

紫の髪をした男が目の前に映るいくつのも大画面映像を見ながら興奮気味に笑う…

そこにはリニアレール事件での機動六課のメンバーが映し出されている…だが男はある一つの画面から目を背けようとはしない

「これが出てきたということは本局は本気なようだ、そして！」

そう言い顔に手をのせる…

「この魔力光…間違いない！まさか今の時代にまで血が引き継がれていたとはねぇ」

「飛天の王よ……。」

第7話　出張任務1

新人達の訓練も本格的なデバイスを手に入れたので、次のステップに進むらしい…
この前までは　とにかくガジェットこわせ！　だったのだが、これからは各個人のポジション別で自分の能力を伸ばす訓練をするらしい。
なので副隊長の俺たちも教導にあたるはずなんだが…

「なんで俺の担当がシグナムさんの教導になってるんですか？」

「ふむ…お前がこの前使った斬撃を撃ち出す集束砲…なかなかの威力じゃないか…高町に聞いてみると私にも使えるとお前が言ったらしいので遠距離での強力な技は前々から欲しくてな、是非教えてもらおうと思い高町に頼んでみたのだ…スカイを少し貸してくれ…とな」

なのはさん…俺の意見は無視ですかい…

「はぁ～、確かに言いましたけど、集束は難しいですよ。結構時間かかると思いますけど…」

「うむ…頼む」

「じゃあ始めに…」

「いや、まて！」

「？」

「この前の映像を見ているかぎりお前刀に関して相当な実力者だと思うのだが、一度模擬ｓ「やってもいいですけど今後一切教導はしませんよ？」…ぐぅ」

この人相当なバトルマニアだな…聞けばフェイトさんもそうだっていうし…模擬戦なんて疲れる事したくないよ…

まあその後かれこれ２時間ちょっと練習しました…一回、集束した魔力が爆発してあたり一帯が吹き飛んだけど気にしない…

なんか遠くで部隊長が、

「ああ…私の部隊が…」

とか嘆く声が聞こえたけど、気にしない…

ｓｉｄｅ　　スバル

なのはさんから終了の通信がはいり私はその場に膝を落とす

「つ…疲れた～」

「だらしねーなスバル。こんくれーでへばってちゃ、フロントアタッカーは務まらねぇぞ」

「ははは……あはははは……。」

私がヴィータ副隊長でティアがなのはさん…エリオとキャロがフェイトさん…なんかスターズだけ大変じゃない！主に教導官が！

「まあ、あたしの訓練についてこれてるだけマシか…ほれ、スバル

！いくぞ！」

集合場所へ歩き出したヴィータ副隊長の後を、慌てて追いかける。

「全く、シグナムもモノ好きだよな…いきなり砲撃覚えたいだなんて…」

えっ？ほ…砲撃！

「いやいやまって下さいヴィータ副隊長！シグナム副隊長のデバイスって剣ですよね！？それなのに砲撃だなんて…」

「リニアのときケントのヤローがやったらしい…あのヤローのデバイス刀なのにな」

す…凄い……そうだ！またわたしのディバインバスター見てもらおう！

そんな事を考えながら集合場所に向かう。あたしとヴィータ副隊長が訓練をしていた場所は、集合場所から一番近かったのでそんなに時間をかけずに着いた。

「あれ？はやて？」

「八神部隊長？えっと…なんでしょうかあれ…？」

見るとシグナム副隊長とケント副隊長が正座して八神部隊長に怒られてる…多分滅多に見れる風景じゃないよね…

（えっと…ティア？なにかあったの？）

（シグナム副隊長が練習で失敗して訓練場の一部を海にしたらしいわよ……どんだけスケールでかいのよ…）

（そうなんだ…）

確かにさっきからお金がなんやら私の苦労がどうやら言ってる…エリオとキャロが来たけど二人とも呆然としてる…

「まあ後で二人には報告書書いてもらうとして…」

「なっ！嘘でしょ？部隊長！」

「やかましい！それくらい当然や！　まったく、ほんならみんな集まったみたいやし本題に入ろか！」

コホンと一回咳払いして部隊長が話し始める

「さっき聖王教会から連絡があって、第９７管理外世界でロストロギアが発見されました」

「第９７管理外世界？　はやてちゃん、それってもしかして……」

「なのはちゃん正解。私らの故郷、海鳴市やで」

「はやて、それ本当？」

「うん。それで、機動六課に出動要請がさっき届いたんや」

「そうなんだ」

「じゃあ、久しぶりの里帰り、だね」

「だね！」

「なあスバル？」

「なんでしょうか？」

「第９７管理外世界ってどこだ？」

「えっと…なのはさん達や私のお父さんの先祖の故郷です。名前は確か…地球？だったと思います。」

「へぇ～」

「細かいことは、後で皆の端末にメールしておくから、各自で確認してな」

「はやて、日時は？」

「明後日か、早ければ明日やな。そっちも分かり次第すぐに連絡するから、皆そのつもりで」

『了解！』

楽しみだなぁ。あたしのご先祖様と、なのはさん達の故郷。どんなところなんだろ

「あっと、そういえばスバル。この後陸士１０８部隊に行くんやけ

ど、お父さんとお姉ちゃんに何か伝える事あるか？」

「えと、特に無いです」

ちょくちょくメールで連絡とってるしね。

「そか、なら私はそろそろ行くわ。皆、とりあえず準備だけはしといてな～」

『はい！』

楽しみだな～

side　out

「管理外世界ねぇ～」

「どうしたの？もしかして嫌だった？」

あれから昼飯(ラーメン)食って午前練習の報告書を作成中…ちなみに隣には自分の書類を片付けているフェイトさん

「いや、そうじゃないんですけど…管理外世界って砂漠やらなんやら多いじゃないですか…」

「ふふっ、海鳴はちゃんとした町だし砂漠なんてないよ。むしろ海がとても綺麗だよ」

「それ聞いて安心しました」

まあ向こうで訓練とかないんだったら半分休暇ということでいいのかな？

「だめだよ、ちゃんとした仕事なんだから」

だからなんで俺の考えがわかるんですか？

第8話　出張任務2

屋上にあるヘリポートから出張任務に行くメンバーがヘリに乗り込む

「ところでケントくん？」

「なんでしょうかなのはさん？」

「なんでまたラーメン食べてるの？」

「小腹が空いたんで…」

またなのはさんが頭をかかえてる…俺なんか悪いことしたか？それとスバル、前みたいなその羨ましそうな視線やめろ…ほんと食べづらい

「まあそれはおいといて…はい、リインちゃんのお洋服」

「わーい！　シャマルありがとですーっ！」

リイン曹長の服ということは、あれか？リ○ちゃん人形サイズの…

…ってええ！

いやそれ……○カちゃん人形じゃないじゃん…でかすぎじゃないか？

「えっと…その服って……」

「はやてちゃんの、ちっちゃい頃のおさがりですっ！」

聞きたいのはそこじゃないんですが…

「なんか、普通の人のサイズだなって……」
だよなっ！キャロもそう思うよな！
だってそれ普通の子供用だろ？
「えっと……そういえばＦＷメンバーとケントさんには見せた事なかったですね！」
なにを？
「システムスイッチ！アウトフレーム・フルサイズッ！」
「「「「おおっ！」」」」
「はえっ！？」
そう言うとリイン曹長は光に包まれ…
「っと。一応、この位のサイズにもなれるですよ？」
「でかっ！」
「はえ～」
「いや、それでもまだちっちゃいけど……」
「はえ～」
「普通の女の子のサイズですね」

「はえ～」

「ケントさん…驚きすぎです…」

「はえ～…はえっ！」

やべ！ちょっとびっくりし過ぎた！

「向こうの世界には、リインサイズの人間も、フワフワ飛んでる人間もいねーからな」

ミッドでもフワフワ飛んでる人間そーわいませんよ…ヴィータさん…

「うーん。大体、エリオやキャロと同じくらいですかね？」

「ですね」

「リインさん、可愛いです」

「そうですか？」

「それならミッドでもその姿でいたほうが過ごしやすいんじゃないんですか？」

「この姿だと魔力の燃費が悪いんです～」

さいですか…つまり今流行りのＴＮＰ（低燃費）というわけですね…

そうこうしてるうちに着きました…管理外世界の…どこだっけ？

「地球にある海鳴市だよ、ケント」
ありがとうございます…しかしなんで俺の考えがわかるんですか？
フェイトさん？

「なんなんでしょうか？このコテージ？」
「例の現地協力者の方が貸してくれたんだよ」
現地協力者は凄い金持ちだという事がわかりました…
「ここが、なのはさん達の、故郷ですか？……」
「そうだよ。ミッドと、殆ど変わらないでしょ？」
「空は青いし、太陽も一つだし。」
「山と水と。自然のにおいもそっくりです！」
キャロがワイルドな発言をしたが気にしない…んっ？
「クロノからの通信？」
「えっ！お兄ちゃんから？！」
そういえばフェイトさんはあのシスコンの妹でしたね…でもこの通信は…

「すみません、なのはさん、すこし時間かかるかもしれないので先に調査始めてて下さい」

「えっ…うん、どうしたの？」

「そこらへんはプライベートです」

誰にも聞かれないようにしないとな…

通信がもれないように今は森の中…ついでに盗聴防止用の結界をしておく…

「悪いな…いきなり連絡して」

「どうした？なんか見つけたか？」

「今日、［奴ら］の研究所を一つ破壊できたんだが…」

「どうした？」

「一人…こっちの世界に転送されていた…」

「なっ！？」

「誰が転送されてきたか…いつ来たか…そこまではわからなかった…」

まじかよ?！レリックのことで今忙しいのに！

「どうする?スカリエッティは…」

「……予言ではスカ野郎が事件を起こすほうが早い…あくまで今回のは様子見だろう……まずはスカ野郎を捕まえてから奴らの対処にあたる…気おつけろよ…こっちの世界に転送されたからにはお前か俺に接触する可能性が高い…」

「……わかった…3提督にもそう伝えておこう……」

「心配するなクロノ…まだ時間はある、六課は俺が守るよ」

「たのむ」

「いつもありがとな…シスコン」

「なっ！なにがシスコンだ」

そういい通信を切る…

「さぁ…いつ…どんな奴がくるか…」

＞マスター……＜

シーザーが心配し声をかけるがケントは応えない

静かにケントは虚空を見上げる…その目は……

泣いていた……

第9話　出張任務3

クロノとの通信を終えてコテージに戻る

「おっ！ケント君、クロノ君からの通信なんやったん？」

ん？はやてさんか…

「六課での生活はどうだ～とか、俺の妹に手を出すな～とかでした」

「はっ！そうか、フェイトちゃんにはクロノ君という最大の敵がおったのを忘れとった！」

なんか「ぐわー」とかいってるが無視しよう

あとシャマル先生からの話では、なのはさん達スターズ分隊は徒歩で、フェイトさん達ライトニング分隊は車からサーチャーを設置して捜索してるらしい…

「ふぅ～、じゃあ俺も歩きながら仕事します」

「もういいよ～今から通信いれようとしてたところやし」

通信？

『さっき、協会本部から新情報が届きました。
ロストロギアの所有者が判明。運搬中に紛失したとのことで、事件性はないそうや。
本体の性質も、逃走のみで攻撃性は無し。ただし、大変に

高価なものなので、できれば無傷で捕らえて欲しいとのこと。
まぁ、気ぃ抜かずにしっかりやろ』

『はいっ』

「っという事はレリックではなかったと…」

「そういう事や！」

『こちらライトニング。こっちも一段落付いたから待機所に戻るよ。ロングアーチ、何か買って帰ろうか？』

フェイトさんからの全体通信…

『こちらロングアーチ。ありがたいことに、夕食は民間協力者の皆さんが用意してくれるそうや』

『うん。了解。じゃあ、スターズのみんなを車で拾って帰るね』

夕食か…それより…

「民間協力者ってだれなんですか？」

「わたしよ」

「はい？」

金髪ショートでパンツスタイルの、凄まじい美人さん。そしてなんか気が強そうな人が立っていた…
なのはさんといいフェイトさんといい…六課に来てからよく美人さ

んと会うな…

「えっと…ライトニング分隊副隊長、ケント・スカイです。今回の事件での協力、ありがとうございます。」

「そんな堅苦しい挨拶は無しなし、私はアリサ・バンニクスよ。よろしくね」

「ケントくん？」

「なんでしょうかはやてさん？」

「美人の中になんで私ははいっとらんねん！」

「そういうキャラじゃないんですか？はやてさんって？」

「どういうキャラやねん私は！これでもピチピチ１９歳の美少女や！」

「自分の事を美少女発言！？」

「あの～話についていけないんだけど…」

そんな感じで１日目の捜索は終了！

アリサさんやはやてさんと一緒に夕食の準備をした…途中で２人がゴソゴソとなにかを言っていたが気にしない、「あれがフェイトの…」とか言っていたが気にしない…

そこには今まで誰も見た事がないような戦場があった…

「スバル！肉ばっか食わない！食べ過ぎ！」

「あーー、わ、私のお肉がー！」

「あまいなスバル、周囲を警戒し、尚かつ自分の領分をしっかり守る。それがバーベキューにおける基本中の基本！…っな？ヴィータ！お前私の皿の上にある肉を！」

「あめ～のはどっちだシグナム！バーベキューの網の上だけが戦場じゃないんだぜ！」

あそこのテーブルに行ったらバーベキューにおける、歴戦の勇者でもないかぎり、肉を食べる事は
不可能だろう。
ばかみたいに食べるスバルとヴィータさん、負けず嫌いのシグナムさんが同じ席って…しかもその中で焼いているはやてさんはもっと凄い…
ちなみにこっちのテーブルは和やかだ…なのはさんやフェイトさんエリオやキャロとその他新メンバー…そして…

「ほんと久しぶりだね～ケント君」

「直接会うのは1年ぶりぐらいですね。エイミィさん」

そう…あのシスコンの妻、エイミィさん

「うんうん…でもやっぱり…」

「なんですか？」

「身長伸びてないね～」

「こっ、これから伸びるんです！」

この人はいつもこの話題を…コンプレックスなのに…

「ん？でも小さいほうがかわいいぞ」

「男はかわいくても嬉しくないんです…ん？」

なんだあれは？テーブルの端に誰も手に付けてないカラフルな物体がある…

「なのはさん？」

「どうしたの？」

「あのカラフルな物体って…」

それを聞いた瞬間なのはさん達がギョッとした表情になる…

「えっと…それはシャマル先生が作った料理なんだけど…」

「医師が作った料理ですか…なんか興味深い」

栄養バランスや体に良いものがはいっていてあの色なら納得だからな！

「だ、だめです！」

「なんでですか？リイン曹長？」

「それをたべたらｓ「どうぞケントくん！」う～、う～」

シャマル先生がリイン曹長を何故だかわからんが押さえつける

まあ断る理由も無いし…

「じゃあ…貰います」

「どうぞ、ケント君」

その物体を口に入れた瞬間見たのはバーベキューをほったらかして

必死に俺に駆け寄ってくるみんなであった…

「……ん？ここって？」

「よかった！目が覚めた！」

目の前にはフェイトさん…って！

「ななななな……なにを……」

「なにをって…膝枕だけど…」

いや、アウトアウト！エイミィさんこっち見て笑うのやめて！
そのまま起きようとするが…
「か…体が痺れて動かねー」
「なに！ついにシャマルの料理は神経系の毒物になったか！」
「シャマル先生……」
「ゆ…許して下さい！」
シャマル先生…涙目だ
「とにかく、しばらく横になっていた方がいいよ」
いやいやいや！俺も健全な男子ですから！いろいろな意味で理性吹っ飛びますから！
こら部隊長！笑をこらえない！
こらエイミィさん！写メとらない！
ちなみに２０分ぐらいは体が動かなかった……シャマル先生…
晩御飯の片付けが終わり部隊長が口を開く、ちなみに俺は俗に言う茹でダコ状態で、立ってはいるが理性を整えるのに必死だ…
「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか」

『はい！！！』

やっぱりエリオと俺以外女だということあってお風呂は好きそうだ…

あれ？そういやザフィーラは？……

「でもここお風呂無いわよ」

えっ！じゃあどうすれば…

「そうすると……」

「やっぱり」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう」

なんか怖い…ＦＷ陣なんて全然理解してないぞ、俺もだけど…

「さて。機動六課一同。着替えを準備して、銭湯準備っ！これより、市内のスーパー銭湯に向かいます」

「スーパー……」

「セントウ……？」

「はえ？」

「えっと…いらっしゃいませ～団体様でしょうか？」
「えっとぉ……大人１３人、子供４人です」
「エリオと、キャロと……」
「わたしとアルフですっ」
「あの、ヴィータ副隊長は……」
「あたしは大人だ」
「ケントくんは～？」
「エイミィさん…俺も一様大人です」

当然だが戦闘機は男湯と女湯にわかれていてエリオが安心していた…なぜ？
だがそんな疑問はキャロによって解消される…
「広いお風呂だって。楽しみだね？エリオくんっ。」
「あ、うん。そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」
「……えっ？エリオくんは？」
「えっ！？ぼ、僕は、その、一応、男の子だし……」

「うん……あ、でもほらっ。あれ見て？」

キャロが指差した先には、入浴施設の利用規定。
そして、そこに書かれている一つの文。

※女湯への男児入浴は、１１歳以下のお子様のみでお願いします

エリオは１０歳。この利用規定によれば、女湯への入浴は可能…

「せっかくだし、一緒に入ろうよ？」

「フェイトさんっ！？」

フェイトさん…１０代の思春期直前な男の子の気持ち考えましょうよ…

「でもやっぱり、スバルさんとか隊長達とか、アリサさん達もいますしっ！」

「別にあたしはかまわないけど？」

「って言うか、前から頭洗ってあげようか～とか言ってるじゃない？」

「あたしらも良いわよ？　ね？」

「うんっ。」

「いいんじゃない？仲良く入れば。」

「そうだよ。エリオと一緒にお風呂は、久しぶりだし……。入りたいなぁ」

だめだ女性陣…嫁入り前の体なんだからもう少し恥じらいをもとうぜ…

やっぱりエリオが目でＳＯＳを送ってくる…だが、

「諦めろ…エリオ…」

「！、ケ…ケントさん！」

「目の前にいる女性陣を説得させられるほど俺は気用じゃない、時には諦めも大切だ…」

絶望したような目になるエリオ……すまない

「それじゃあ行こ♪エリオ君！」

「ケントさん！…ケントさ～ん！」

無事に帰ってこれたら後でなんか奢ってやるよ

風呂に入る時はやてさんが

「ここの露天風呂は最高やで～」と言っていたので入らせて貰おう…

場所は変わって風呂の中…ああ……

「癒される」

文句なしの１００点満点！疲れがどっと引いていく

「はやてさんオススメの露天風呂行きますか…」

外の風呂なんてミッドじゃあまりないからな～楽しみだ

ｓｉｄｅ　　フェイト

久しぶりの露天風呂…気持ちいい……

はやてが行こうって言い出したのに肝心のはやてがこない…

「何かあったのかな？」

そう思って戻ろうとすると

「えっ？」

「はえ？」

ケントがいた……

ｓｉｄｅ　　ｏｕｔ

今俺とフェイトさんは背中合わせでうしろを向いてる

「えっと…なんでケントがいるのかな？」
「ここって男湯じゃないんですか？」
「私は女湯からはいって…」
あ～…そういうこと…
「はやてさんですね」
「はやてだね」
つまりうまく俺たちを［混浴］に誘い込んだと…なんのために？
「俺…上がりますね…」
そう言って立つが
「まって…」
「？」
「ちょっとお話しようよ」
「……。」
断る理由もないので座り直す…
「六課での生活は楽しい？」

「楽しみですよ…いろいろと…」

「そう…」

そう言って沈黙になる……

「ねぇ…ケント？」

「なんでしょうか？」

「好きな人っている？」

単刀直入ですね…

「なんでそんな事……」

「ほ、ほら……わたしよライトニングの体中だからさ、隊員のことを知っておいたほうがなにかと役に立つかな～と思って…」

「そんなもんですか？」

「そんなもんなの！」

……おそらくこの人は中途半端な答えではなっとしなさそうだ…

その時勝手に…無意識に口が動いた…

「人間として堕ちた俺に…人を愛する資格なんて…無い……」

慌てて口を塞ぐが、遅かった……

えっ？と言ってフェイトさんがこっちを振り向く…

「す…すみません！」

そのまま俺は逃げるように露天風呂からにげてゆく、フェイトさんが「まって！」と叫ぶが足が…止まらない…

俺は転がりこむような勢いで男湯に突っ込む…よくよく落ち着いてみると涙がでてきた…俺は…

サイテーだ…

第１０話　　出張任務４

「どうしよ……。」

口がすべってあんな事言ってしまうなんて…

しかも相手はただでさえ心配性のフェイトさんだ…ほんとどうしよ…

そんな感じで俺はロビーでコーヒー牛乳をチビチビと飲む…

＞自業自得…まったくもう！＜

「ううっ……」

＞そうこう言ってるうちに来たわよ～＜

右を向くとフェイトさんが小走りに駆け寄ってくる…

ちゃんと……謝んないとな…

ｓｉｄｅ　　はやて

なんかおかしい……

いつものフェイトちゃんやったら多分今頃私は「お話」でこの世におらんはずや…でも……

「フェイトちゃん！混浴露天風呂で二人きり！ラブラブツアーはどうやった？！」

って、聞いたら……

「あっ、うん……気持ちよかったよ……露天風呂…」

なんて返ってこうへんやろ！明らかいつものフェイトちゃんやないやんか！

温泉から出たら出たで誰か明らか探しとうし！

「どうだと思う？はやてちゃん？」

「そこまでは解らんわ、エイミィさん」

ここにはやて&エイミィさんのフェイトちゃん追跡隊結成や！

「ねぇ？ティア？八神部隊長達何してんのかな？」

「スバル！こっから離れるわよ！こういうのは関わらないほうがいいわ！」

ひそひそ言っとるけど丸わかりやで…二人とも……

side　　out

「ケント…君……？」

「……はい…」

「隣…座るね…」

そう言いフェイトさんは腰を下ろす…

「すみませんでした…」

「えっ？」

「さっき…俺が言った事…」

「そっ！そんな、謝る事じゃないよ！」

そう言って…少し無言になる……

「過去に…。何かあったの？」

「はい」

落ち着いて…素直に答えてみる……だけど……

「聞かせてもらえないかな？」

「今は…駄目です……」

そう答えるとフェイトさんは少し悲しそうな顔をする…

「今は…です…」

「え？」

「時がきたら絶対にお話します…なのでその時は……受け止めてくれますか？」

「約束…だよ……」

「はい」

フェイトさんの表情が少しだけ柔らかくなる

「じゃっ！仕事といきますか！」

「……うん！」

ｓｉｄｅ　　はやて

「なあエイミィさん？」

「どうしたの？はやてちゃん？」

「なのはちゃんはまだ恋愛までいってないとはいえユーノ君…フェイトちゃんもちゃんと恋しとう……私だけなんか遅れとうような感じするんやけど…」

「はやてちゃんにも好きな男の子ぐらい見つかるって～♪」

「早く現れてほしいわ～私の白馬の王子様……」

ｓｉｄｅ　　ｏｕｔ

その後問題のスライム？（ロストロギア）が現れたが

野生スライムが飛び出してきた！
ＦＷはどうする？

殴る　　召喚する
↓　封印する　　切り刻む

ＦＷは［封印］を使った！
効果はばつぐんだ！！
野生のスライムを倒した
ＦＷは１０５８の経験値をもらった！

…的な感じで見事封印。
次の朝には六課に帰りました～
「ところでケント君？」
「何でしょうかなのさん？」
「なんでまたヘリの中でラーメン食べてるの？」
「いつもは醤油味でしたが今回は塩ラーメンです！」

なんかまた頭抱えてる…なのはさんはヘリに乗ると頭痛が起きやすいのか？

またバ〇ァリン貸してあげよう。あとスバル…いつもいつもその目線やめろ…

第１１話　小麦粉？の密輸を阻止せよ！

「本局からの依頼…ですか？」

「そや♪」

いきなり部隊長室に呼び出されれば唐突にそんなことを言ってくる部隊長…

「え～それはロストロギア関係で？」

「いや、まったく関係ない」

「はえ？」

まてまて…ここは［古代遺物管理部］の機動六課であって、なんでロストロギアに関係のない事件なんて受けないといけないの？

「簡単に言うと上の連中のいやがらせや…「エースばっかいるんだからこっちの仕事ぐらい手伝いやがれ」みたいな感じや」

確かに機動六課は過激な戦力をもっていて、それらを一斉に引き抜かれた事に頭がが痛いのはわかるが…

「それでケント君にはその依頼任務に行ってほしいんや…」

「ちなみに内容は？」

「お塩と小麦粉の密輸阻止や♪」

「一つ聞きますけど吸い込んだら？」

「多分周りがふわ～となっていろいろなものがみえたりするから絶対に吸い込んだらあかんで」

わかりました…有難うございます……

「そんなそこら辺の悪党みたいな事件やけど敵グループが以外とやっかいでな…非魔導師には必ず質量兵器…魔導師にはＢランクやＡランクまでおるらしいんや～」

「どっかのテロリストですか？」

クロノに全部押しつけよっかな……

うん…そんな事したらまじで永久凍結させられるな…

「俺だけですか？」

「馬鹿いい！いくら副隊長でもそんなところ一人で行かせるか！ただでさえリミッターかかっとんのに」

そういやあったな、リミッター

「やから執務官であるフェイトちゃんをいれてシグナム、バックにシャマルの４人で第４５管理世界ブルズに行ってもらう」

流石に質量兵器が出てきたら新人はパスか…まあ断る理由もないし一様ＯＫした

小麦粉ねぇ……

「あれが敵さんのアジトね。」

そんな感じでやってまいりました第４５管理世界ブルズ…来たときは結構大きな町だったが、南に進むにつれ砂漠に…
なんで犯罪者ってこういう所に集まりたがるのか？
あと敵さん達はやっぱりテロリストらしく資金集めに小麦粉売ってんだとか……なので組織自体を潰してほしいだと……

「うむ……では私とテスタロッサが先行する…お前はここでシャマルが見つけた敵の親玉をたたいてくれ」

「はいはい」

まあ今回は暇だろう…2人で先行したら制圧なんて時間の問題だ…
あと予想では相手の親玉はＡランク相当だと考えている
目撃された最も高い魔力がＡなんだと

「いくよ！シグナム！！」

そう言うと……

バッコオオオオオン

「管理局の者です！武器を捨て、速やかに投降してください！」

フェイトさん……いきなり壁をぶっ飛ばすとか……

「局だと！」　「イヌが！」　「殺せ！」

「うほっ！いい女！」

最後のはほっといて投降する気は０だな……

あっ！シグナムさん今１０人ぐらいぶっ飛ばした…

「やっぱりＡランク相当の魔導師が２人？」

シャマルさんが内部を分析してる、その間に前の２人は奥に進んでいって見えなくなった

「あら？Ｂランク相当の魔導師がこっちに来てる、ケントくん、迎撃よろしく♪……えっ？！」

どうしましたかシャマルさん？

「こっちに来てる魔導師の魔力が上がった！？ランクは……Ｓ相当！！」

だる……

「距離…２００、１００、５０、くる！」

ガキィ！

俺が腰から抜いたシーザーと相手のデバイスがぶつかる、形状は…

同じ刀かよ…

「ヘッ！てめぇやるじゃねーか、俺の初撃を止めるなんてよ！」

「こっちには優秀なアシストがいてな……」

目の前の男は嬉しそうにする

「シグナム！テスタロッサちゃん！すぐにもどれる？！」

『すまん、今Aランク魔導師と戦闘中だ…リミッターさえなければすぐに向かえるんだが…っく！』

『こっちも…なかなかねばるね……うっ！』

援軍は無し…と……

「ケント君！私がバックアップするから時間を稼いで！」

「りょーかい」

「作戦会議は終わったのかよ！」

こいつやけにテンション高い…うるせー

「てかなんで俺ら？前の2人のほうが厄介だと思うんだけど？」

「あの姉ちゃん達は魔力封印されてんだろ？解除でもされたら厄介なんでな…てめぇらはように人質だよ！」

なるほど…

「まあてめえは男だからどうせ殺すんだけどな！後ろの奴含めて女どもは一生俺の奴隷でかんべんしてやらぁ」

……うざい

「無理だとおもうよ」

「ああっ！」

そう言って俺は男との間合いを一瞬でつめ…切り上げる

なかなかというか男も反応して受け止めるが俺は連続で切りつける

「なっ！」

「場所変えよ……」

「転送魔法？！」

「てめえが自分の下心語ってるときに仕込んだんだよ馬鹿！」

「なんのためにだ！後ろの女がいねーとおまえなんかに勝ち目がねーだろ！！馬鹿はてめえだ！クソガキ！」

「ケ！ケント君！！」

「ここから真南に２０キロの所にいますから～」

すみません、シャマルさん…

目の前のガキが言った通り転送された場所はアジトからほとんど離れていねぇ
ちくしょう！……せっかくまとまった金が入りそうだったのだが

「このガキがそんなに死にたきゃ今殺してやるよ！」

おれが叫ぶが目の前のガキは何もいわねぇ
死ぬのが怖くなったか？

「誰も見られてないな……」

はっ？
こいつなに言ってやがんだ？

「なんだてめえ！「だれかに見られたら力がでませ～ん」とか言いてえのかよ！」

「半分当たり……とでも言っといてやるよ」

「じゃあその力とやらを見せてみろよ！」

ｓｉｄｅ　　フェイト

どうか無事でいて……

それだけだった…

結局戦闘に決着がついたのは通信があってから3分後…シャマルがいる所に戻れたのが5分後、今、ケント君の所に行くのに今で１０分そう思いスピードを早める…あとちょっと……

「ケントく…ん？」

そこにいたのは無傷のケント君とボロボロになった犯罪者だった…

ｓｉｄｅ　　ｏｕｔ

「本当に怪我とかない？」

「……大丈夫です」

今帰りのヘリの中…その質問かれこれ４回目です…フェイトさんちゃんとシャマル先生のチェックも受けたんですし……

ちなみにあいつらはこの世界の治安維持組織に引き渡して少ししてから管理局に引き渡されるらしい

「しかしよく男の魔力源がロストロギアだと気づいたな……」

「カンですよカン」

みんなには転送の時にロストロギアを奪った事にしておいた全然気づいたなかったんですけどね～

「帰ったら報告書だね」

「……はえ！？」

第12話　ホテル・アグスタ1

［凡人］

自分を例えるならその言葉が一番だろう

今の六課の戦力は明らかに異常だ…

隊長陣は全てSランク並の魔力量

スバルの特化した攻撃力に突破力

エリオの性質変化、それにあの年てBランク

キャロのレアスキル…竜召喚

他の隊員も、みんな未来のエリート達

私には……何もない

毎日の訓練も、そんなに強くなってる実感が無い。

自分は兄さんに追いつかないといけないのに……

自分の周りには…天才と歴戦の勇者しかいない……

やっぱり私は、ただの凡人……

「オークションね～」

はい！現場のケントです！
今取引が許可されたロストロギアのオークション会場、ホテル・アグスタに来ております！
はっきり言って俺らが出なくてもいいような感じがするんだがロストロギアにつられてガジェットが出てくるかもしれないんだとさ…はやてさん……なんか小麦粉事件も含めて俺ら［パシリ］になってません？

『そっちはどう？ケント君？』

『何もなさすぎて眠たいです』

『このまま何もないのが一番なんだけどね～』

通信をしてきたのはシャマル先生

『俺らは昨日の夜から警備してるんですよ？少し仮眠を「だめよ、もうすぐ始まるんだから」…ですよね～』

帰ったらはやてさんに文句言ってやる！なんで副隊長だけ警備時間がこんなに長いんだ！

「あと少しの我慢だろ……本当にやる気がないな…お前は」

「シグナムさん、働いたら負けだと思いますます。」

「……。」

死んだ魚を見るような目でこっち見ないでください

ー警ー

アラート…やっとお出ましですか……

『シグナム！ケント君！お願い！』

「気を抜くなよ」

「そう簡単にはやられませんよ」

ｓｉｄｅ　　ティアナ

『スバル？そっちはどう？』

『うん…特に異常無し』

今の任務はロストロギアのオークションがされるホテル・アグスタの警備、確認のためにスバルと連絡をとる

「でもすごいよね！八神部隊長と守護騎士全員集合なんてめったにないよ！』

『そうね…あんたって部隊長達のこと詳しいんだったけ？』

『う～ん、お父さんやギン姉にちょと聞いたぐらいなんだけどね…
…」
簡単に言えば、リイン曹長意外は部隊長の持っているデバイスが関係している固有能力らしい
詳しい情報は特秘事項なので不明…
レアスキル……

警！

アラートが鳴り響く私はすぐにスバルと合流しサポートのシャマル先生に通信をつなぐ
「シャマル先生、私も前線の様子が見たいんでモニター回してもらえませんか？」
「わかったわ、すぐにクロスミラージュに転送するから」
画面に映ったのは副隊長達とザフィーラが次々とガジェットを破壊してゆく映像
「副隊長達とザフィーラすごーい！」
「これで…リミッターつき？」
自分と立っている世界が違う
でもだからってなに？

凡人は凡人なりに……天才を見返してやる！

ｓｉｄｅ　　ｏｕｔ

「オラ！！」

この一晩てめぇらのせいでろくに眠れなかんだ！落とし前はキッチリつけて貰うぜ！！

なんかシグナムさんがドン引きしてるがそんな事は気にしねぇ！！

俺のテンションＭＡＸダ！……おっ？

「動きがよくなった？」

「うむ…どうやら有人操作に切り替わったらしいな……」

『シャマル先生～どうしますか～？』

『相手に召喚師がいるらしいの…どっちかお願いできる？』

『ＦＷ陣は？』

『今ヴィータちゃんが向かってるから安心して』

「スカイ、ここは私が引き受ける…お前は召喚師の方へ行ってくれ」

まだ壊したりないんだが……仕方が無い

「了解」

『リインちゃんが向かっているから探してみて！』

いますね、ちゃっちゃと合流しちゃいましょう

「リイン曹長」

「ケッ、ケントさん！？」

「ぱかぱかん♪ケントが仲間に加わった！」

「ふっ、ふざけてる場合じゃないですよ」

「サーセン」

目の前で飛んでいる画びょう？みたいな虫を振り払いながら少しふざけてみる……

「リイン曹長」

「はい？」

「よけて！！」

ガキィイン、と一瞬、シーザーと相手のデバイスとで火花がちる

相手の男はすぐに距離をとり身構える

かなりゴツイイメージの男だ

「槍かよ…俺槍にいい思い出ねーんだよ」

「……。」

無言か……

「はぁ～、え～と速やかに武器をおいて投降してください、今ならあなたに弁護士をプレゼントしまs…っおっと！」

忠告したが、攻撃してきはった、投降の意思無しっと

「リイン曹長…離れないでくださいね…はぁ！」

「むっ！」

そのまま俺は相手との間合いを詰めて下から上に斬り上げる
だが相手も槍を振るいシーザーの軌道をずらし隙が出来た俺に対して槍を振るおうとする…
だけど…

「あめぇ」

自分の後ろに６つのスピィアを展開し男に放つ
男はすぐに攻撃をやめてスピィアをなぎ払い爆発が起きる
そこに向かってもう一度間合いを詰め今度は上から下に向かって斬りかける

「なめるな！」

だがそれは槍で受け止められ鍔ぜり合いになる

「俺ってな…ミッド主体ベルカ混合なんだよ……」

「だからなんだ」

お互いのデバイスから火花がちる…だが体格の差か若干男が押している

「ミッド式の攻撃の主体は射撃…それと」

シーザーが眩く光り始める……

「砲撃……」

「！！！」

男が間合いを取るが…遅い

「ショットオンムーブ！！」

リニアの時よりかは小さいが…零距離！！

ドガアアアアン！！

「やったか？」

まあ…現実そんなあまくないか

「今のは…効いたぞ……」
爆風がはれるとバリアジャケットをボロボロにした男が…
「零距離で立てるとか……どんだけだよ」
「いい騎士だ…名前は？」
「人に聞く時は自分から名乗れ、あと俺は一様魔導師だ」
「すまなかった……ゼストだ…」
「機動六課ライトニング分隊副隊長ケント・スカイだ、ゼストはなぜこんな事をする」
「目的の為だ」
「スカリエッティか？」
「あいつなどと一緒にするな」
……つまりゼストは自分自身の目的達成のためにスカ野郎と組んでると…
「聞きたい事が山ほど有るんで捕まって貰えませんか？」
「そんな気はさらさらない」

「残念です」
お互いがデバイスを構える……その時

「はいは～い、そこまで～」

どこからか聞こえる声
「なっなんですか？」
「？！」
リイン曹長とゼストが困惑する…だが…

俺の思考回路は一瞬遮断される
この声って…
「嘘……だろ？」
＞マスター！！上！＜
シーザーの声によって俺は我に返る
「ゼスト！リイン曹長！逃げて！！」

その声の直後、上から舞い降りたフードの女ににゼストは腹を蹴られ、体制を崩す
そして展開させた槍状のデバイスをゼストに…突く！

「！！っ…スカイ！いつの間に！」

俺はシーザーを使いゼストに向かっていた槍を受け止める

「ゼスト……勝負は中止だ……今すぐここから逃げろ！」

「なっ？！だがお前だけをおいて「お願いだから早くしろよ！」……わかった……」

俺は絶叫に近い声でゼストに怒鳴りつける

「ケントさん？！」

「リイン曹長はすぐにここから離れてください……お願いです」

「…わ、わかりました。すぐに助けを呼んでくるですぅー」

クロノからの連絡で奴らの内一人がこっちの世界に来ているのはわかっていた…
俺に接触してくるのだってわかっていた…
あの漆黒の槍……間違いねぇ
だけど…なんでよりによってあんたなんだよ……

「姉さん……」

フードの女は少しだけ…
楽しそうな表情をした……

第１３話　　ホテル・アグスタ２

ｓｉｄｅ　　？

カンッ！ガッ！

荒野の中に１０００を超える少年が走り回る……

その手には……刀…。

ガスッ！

一人……また一人と血を流す

大地は血色に染まり

少年達は殺しあう

自分と瓜二つの人間を……

荒野に立つ一人の少年

白かった実験服は真っ赤に染まり
大地には五体不満足の死体が並ぶ
肉の塊が……並ぶ
目の前には白衣を着た一人の男性……
初めて見た……自分ではない人
体はゴツく研究者よりかはヤクザに似ている男性
彼は一言だけ言う
「来い」……と…

side　ー

戦闘が始まって十分…ケントは絶え間なく攻撃を仕掛け、相手はず

っと防戦一方…いや、［防御しかしていない］

「うおおおおおおおおおおお！！」

ケントがシーザーで無数の斬撃を打ち出す…

だが……

ガガガガガガガガガガガガ

目の前の敵は［まるでそこに攻撃がくるのを知っていたかのように］斬撃を撃ち落とす

「くそっ」

そうつぶやいた瞬間、ケントの姿が…［消えた］　　その瞬間

カンッ！！

女性の背後で金属音がなる

「まだまだ…」

消えたはずのケントが背後から斬り上げるが相手の槍によって受け止められる…

「バレットシューター」

ケントの背後で１０個白いのスフィアが展開される。そして……

「ファイア！！」

スフィアが相手に襲いかかる

ドドドドドドドドドッ！！

甲高い爆発音と煙がまう

「うん！悪くない」

初めて発せられるフードの女性の声

「あんた…なんでここにいる……」

その問いに「う～ん」とうねった後、被っていたフードを脱ぎ始める

「う～～～会いたかったよ～～！！ケンちゃ～ん！！！」

現れたのはケントと同じ黒髪で青い目をした女性、胸の膨らみはフェイトやシグナムにも負けないぐらいに成長している

「……相変わらずだな……姉さん」

「さみしかったよ～さあハグハグしよ～お姉ちゃんと愛を確かめ合おお～」

「うぜえ」

「がび～ん」

ショックを受けたのか女性はすすり泣く真似を始める

「うう、酷いよケンちゃん…しばらく見ない間に反抗的になって…しくしく」

その姿を見てケントは深いため息をつき…シーザーを構える……

「で、なんの要件だ」

「おおっ！そうだった！…なんと！ケンちゃんわざわざお姉ちゃんが向かいに来ました～！」

それを聞いてケントは一気に真剣な表情に変わる

「それは…あいつの命令で来たのか？」

「半分そうかな～、あとこれは伝言」

「なんだ？」

「偽物の自由は楽しんだ？」

「あ…あ…うあああああああああああああああああ！！！」

雄叫びのような絶叫をあげてケントがいきなり斬りかかる、コンマ1秒足らず、瞬間の出来事

「そう言えばケンちゃんってレアスキルから二つ名ついたんだよね…確か……

（大空の閃光）」

side　ケント

何度も何度も意識を失いかける

ガスッ！

「う…あっ…」

槍を使っての打撃が腹にめり込む

「大人しく帰ろう、ケンちゃん」

姉さんの能力は俺の能力と全くの上下関係にある
余程の事がない限り……勝てない

「［覚醒］もしてないケンちゃんが私に勝つ事は無理よ…帰ろう」

「いやだ」

もうあんなところに

「いやだ」

戻るのは…

「いやだぁぁぁぁ！！」

間合いを瞬間的に詰めての斬撃…

俺の能力……閃光は大きく分けて2つある

限界の反射神経と超速移動

名前の通り限界の反射神経は生物が踏み込めない超高速の世界を見つめる事ができる…簡単に言えば俺に不意打ちは不可能、だが脳の処理量を超えてしまうため長時間の使用は不可

超速移動は音の約3倍もの速さで移動するチートくさい能力、当然、限界の反射神経を使わないと目がついていかない、それにいくら身体強化魔法を使っても空気抵抗などによって体にダメージを与えてしまうためこれも長時間の使用は不可

この能力によって俺にとってはＳランクもＦランクも関係ない［反応］ができなければどちらも手の出しようがないからだ…だけど

ガスッ！ガッ！

俺の能力は…姉さんには効かない……

「もう終わり、ケンちゃん。これ以上頑張らなくてもいいよ…」

＞マスター！しっかりして！＜

やばい……意識が…くそ野郎が…

約２０分……俺は一回も攻撃を当てれなかった……

姉さんは…強い

意識が、刈り取られる…

「紫電、一閃！！！」

ガキィン！

姉さんの発動させたプロテクションと上空から現れたシグナムさんがぶつかる

「へぇ」

「ぐ、はあああああああ」

ガシャンガシャンガシャンガシャン

シグナムさんのレバンティンからカートリッジが４発排出される

ドガアアアアアン

姉さんが発動させたシールドブレイクによって一旦シグナムさんは距離をとる

「スカイ！しっかりしろ！」

「シグナム…さん、な…んで？」

「すまない遅くなった、心配するなガジェットは全て破壊した」

俺は気合いで意識を立ち直らせる

「部外者は立ち入り禁止だよ～」

はれた煙から姉さんの声

「ケンちゃんは殺せないけど邪魔する奴は殺してもいいって言われてるんだ～、だから…」

やばい！

「死んで、そこのデカおっぱい」

槍での高速の突き！

「くっ！」

＞プロテクション＜

シグナムさんがシールドを張る、だけど！

「だめだ！シグナムさん！避けて！」

「なっ？！」

姉さんがニヤリと笑う

シールドに槍がふれた瞬間…シールドが［消えた］

「えっ」

「一匹目」

グサッ

血が……飛んだ

第１４話　　ホテル・アグスタ３

ｓｉｄｅ　　ー

「ぐ…はっ……」

「ス…カイ？」

「あらら」

人を殺す凶器が…ケントの腹を貫く

純白のバリアジャケットはみるみる内に赤く染まり、口から大量の血を吐き出す

「…捕まえ……た……」

ガシッ！！

左手で力強く槍を握る……右手には魔力によって光り輝く刀

「！！！」

目の前の女性が初めて焦る

「零距離だ……置き土産に貰っとけ……」

ケントがシーザーを天高く掲げる

「ムーブショット……」

「くっ！」

女性が回避姿勢をとるが…間に合わない！

「ブレイカァァァァァ！！！」

side　　ケント

姉さんのいくつかある能力の一つ、それは……

［絶対破壊］

結界もシールドも［触れるだけで］かき消す

だから避けるしか回避の方法がない、だがシグナムさんは…

［防御］した…

俺ができる事は一つだけ…

「閃光！」

そこから先ははっきりと覚えていない

体と脳を気力で動かした

頭から墜ちていく浮遊感

遠くでシグナムさんが叫んでいる

すみません

俺は今度こそ意識を失った

side　シグナム

「スカイィィィィィ！！」

頭から墜ちていくスカイを必死で追いかける、あの傷で墜ちたら……確実に死ぬ！！

「うおおおおおおおおおお」

ガシッ！！

捕まえ…た

＞シグナムさん！すぐにシャマルさんを！＜

「わかってる！」

シーザーが叫ぶ

ケントが放った巨大な砲撃は相手に直撃……あんなものをくらって無事ではすまないだろ…

「今のは流石に危なかったわね……」

「な…に…」

空中にはさっきの女の姿、だが

「なんだ、その翼は…」

片方だけ、左から現れた［悪魔のような］翼がすっぽりと女を覆う程巨大な漆黒の翼が現れている…

翼が開かれ女がでてくる

さっきまで青かった瞳は左側だけ黄色く変色している

「あなたなんかが知る必要なんてないわ…それより……」

女が目を閉じると翼は何事もなかったかのように消滅する

「私は治癒魔法を使う事が出来ない、今、ケンちゃんを連れて帰ろうとしても死んじゃうわね」

目を開けるとさっきまでの青い瞳に戻る

「だから……今日は見逃してあげる、私もそろそろ［あっち］に帰らないといけないし」

「お前の目的は…なんだ……」

「あなたに教えたところでどうなるの？」

「私は「逮捕と人命、どっちが大事？」ぐう…」

私が一様応急処置はしているがスカイの血は一向に止まる気配を見せない

それに敵は圧倒的に自分より強い…私の紫電一閃が、びくともしなかった

女が去ってゆく

私はシャマルが来るまでほとんど何も出来ずにいた

side　　ケント

目を開くと真っ白な天井…あの言葉を言うか？

「知らない天じょ「目が覚めたのね！ケント君！！」……シャマル先生」

シャマル先生…せめて最後まで言わせて……

「具合はどう？」

「まあまあです」

シャマル先生は「そうっ」とつぶやくと「すぐみんなを呼んでくるわ」とか言って何処かに行ってしまった

俺は…窓から見える空を見上げる

「負けた、か」

＞全く、本当にダメマスターなんだから＜

「スクラップがお望みですか？」

振り返るとシーザーがベッドの隣に置いてある

＞［カナ］にあれだけ戦えたら十分よ、勝手に落ち込まない＜

「ありがとよ」

＞全く…ほら、お客さんよ＜

「？」

バタンッ！！

「ケントーーー！」

「そげぶっ！！」

黄色い［ミサイル］が俺の腹に、直撃……って確か俺腹貫かれて…

「げぶしっ！」

「フェイトちゃん！あかん！それだけはあかん！ケント君死んでしまう！」

やべっ、魂が口から…

「シャ、シャマルー早くきてー」

「ほ、本当にごめんなさい！」

「もう…大丈夫です」

あの後、フェイトさんミサイルのせいで、どこかに飛んでいきそうだった俺の魂をシャマル先生が押し込んで何とか助かった……腹痛えあと今は隊長陣全員がここに大集合してる

「はやてさん…あの日結局どうなったんですか？」

その後説明された事を簡単に解説すると、警備の方は無事完了、ただティアナがスバルに向かってミスショットをしたらしい、なのはさん曰く「もう大丈夫、ティアナもちゃんとわかってくれた」と笑顔で答えた、ガジェットをあらかた片付けおわったシグナムさんの所へリイン曹長が、急いで向ったが結界のせいでなかなかはいれなかったそうだ

シャマル先生が駆けつけた時には俺は意識不明の重体、すぐに俺は六課で治療を受けた

ちなみに今あの日から3日後だとさ

「結構寝てたんですね～俺は」

「全く、血まみれで運ばれた時は生きた心地がせんかったわ～」

「よかった、よかったよ」

ガチ泣きはやめてくださいフェイトさん…すごく申し訳ないんですけど…

「さて、お目覚めのすぐあとやけど真剣な話や」

はやてさんの言葉で皆が真剣な顔つきになる

「ケント君の事はひとまずおいといて、これや…」

病室に中ぐらいのモニターが写しだされる

「この女の人、ケント君の事をケンちゃん、ケント君はこの人の事を姉さんって呼んどった、詳しく教えてくれへんか？」

皆が一斉にこちら側を見つめる、だけど…

「はやてさん」

「なんや？」

「すみません……」

「なっ！？」

はやてさんも予想外だったんだろう、驚愕の目をしてこちらを見る、他の人達も同じだ、でも、まだ早い

「敵がスカリエッティの仲間の可能性もあるんやで？、それにケント君をこないにした張本人でもある、なんでなん？」

今度は少し強めに質問してくる

「……今はまだ……話せません」

はやてさんが目つきを鋭くする

「ケント君、私達がいるのは［組織］や、個人の独断で物事を決める事はできひん」

ああそうだ、俺達がいるのは［組織］だ、それだからこそ

「その［組織］での機密事項な場合どうすればいいんですか？」

この場の空気がこおりついた

第１５話　過去の鎖・見えない鎖

「それは真面目にいうとるん？」

はやてさんが俺に問いかける

「はい……彼女、……姉さんの事を知っているのは俺とクロノ提督、聖王教会の騎士カリム・グラシア、そしてかの三提督ぐらいです。他の上層部の人間でさえ、彼女の正体は知らされていません…いえ、彼女自体知りません。」

「カリムにあの三提督やて！！！」

はやてさんが目を見開く、他の隊長達も程度は違うがかなり動揺している

「なんでそんな事をお前なんかが知ってんだよ」

「俺の姉さんだからじゃないですか？」

「あっ……」

ちょっとヴィータさん…

「ねえケント？」

フェイト…さん？

「それはケントの［過去］に何か関係あるのかな？」

「？！」

「図星だね…」

フェイトさんが微笑みながら話しかけてくる
だけどその目はまっすぐ、俺の目を向ける

「フェイトちゃん？ケント君の過去って…」

「すこし…ねっ」

なのはさんの問いにつらそうな笑いをしてから再びこっちに向き直す

「教えてくれないかな？私はこれ以上ケントが苦しむところを見たくない」

「あ……あ……。」

「組織としてじゃなくて［友達］そして［仲間］として…ねっ」

「とも…だち？なか…ま？」

「そうだよ」

フェイトさんの優しい言葉…

俺は…どうしたらいい……

『殺せ』

！！

目に映るのは大量の、壊されるためだけに生まれてきた、人の形をした［人形］

空から聞こえるのは冷たい声

理性が感情に押しつぶされそうになる

そして、姉さんの声

「偽物の自由は楽しんだ？」

「あっ」

俺の意識は闇に沈んだ……

side　フェイト

ケントに異変が感じられたのはすぐだった

「あああああああああああ」

ケントの体が小刻みに震え始める

「ケント！どうしたの！」

その瞬間、

ドンッ！

「キャ！」

ケントが私を弾き飛ばした

「「フェイトちゃん？！」」

「テスタロッサ？！」

みんなが私に駆け寄る

ガシャン！！

それと同時に、ベッドからケントが転がり落ちる、

「嫌だ嫌だ嫌だ

私達は突然のことに防御できないまま壁まで飛ばされる

「この感じ……」

「はやてちゃん？」

「同じや…初代リインフォースと」

「え？」

なのはがびっくりしたようにはやてを見る

「私がリインフォースの中におった時と同じ感情を感じる…今のケント君の魔力からは……さみしさと孤独しか感じられへん」

「嘘……」

なのはが言い終わる前に、私は走り出していた、バリアジャケットもつけずに…

「フェイトちゃん！」

「テスタロッサ！！」

あと少しの所てケントに手を伸ばす

ジジジ！

「うっ！」

結界……近づくたびに痛みがはしる…でも…

「一人じゃない！」

私は叫ぶ

「仲間がいる！！」

手を結界に押し込むそのたびに痛みが増す

体を入れる

「私も…みんなもケントの味方なんだよ」

一歩一歩近づく

「私が、ずっとそばにいるから」

ケントの目の前まで来てしゃがむ、ケントが顔を上げる

「もう一人じゃないんだよ」

おもいっきり抱きしめる

「私はケントの事全部わかってあげられないかもしれないけど」

強く…抱きしめる

「私が支えるから…ケントの事…だからもう…」

「あ…う……」

「過去の鎖、見えない鎖を断ち切っていいんだよ」

「あっ…」

プツンと糸がきれたかのように…

黒い魔方陣は消え

ケントはフェイトに倒れこんだ

第１６話　プチ家出

ｓｉｄｅ　はやて

「お久しぶりです、クロノ提督」

「クロノでいい…で、どうしたんだ？いきなり「時間をくれ」なんて」

時空管理局本局、ケント君がおかしくなった後、すこし考えてからクロノ君に連絡をとった、流石にすぐには会えないという事で１日経っているんやけど
そのため今クロノ提督の仕事場に来ている

「世間話は無しで率直に言うわ…クロノ君が私達に推薦したケント二等空尉についてなんや」

「あいつがなにかやらかしたか？」

「いや…私が知りたいのはケント君の過去についてなんや」

クロノ君が少し難しい顔をする

「どうしてそんな事を？」

クロノ君に全てを話す、ホテル・アグスタで現れた女性の事、六課で起こったケント君の行動

「まったくあいつは…世話が焼ける……」

クロノ君……苦労人やな～

「まあ座ってくれ…」

「えっ？……あっ、はい」

いつもより真剣な顔付きで話しかけてきたからちょっとびっくりしてもうた

「……これから話す事は本局の最重要機密事項の一つだ…すまないが部隊の人間にはもちろん、特に上層部には多言を絶対にしないでくれ」

「わかっとる…」

クロノ君は少し目をつぶって話し始める

「まず…『はやてちゃん！はやてちゃん！』「シャ？！シャマル？！」…」

ああもう、こんな時に！

「どないしたん？」

『ケント君が…』

「ケント君が？」

『医務室からいなくなりましたーー！』

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ｓｉｄｅ　　ケント

意識か闇に落ちた時に感じた優しいぬくもり

俺を包んでくれそうな暖かい光

「過去の鎖、見えない鎖を断ち切ってもいいんだよ」

闇の中で聞こえた言葉、でも…

「そんなものをお前が背負う必要はないよ…フェイト……」

＞よかったの？六課にはもう戻らないなんて……＜

「これ以上、俺のせいで迷惑をかけたくは無い」

＞まったく＜

俺は今、本局に来ている

六課で目が覚めてだいたい二時間くらいか？

「あの老人会とも話さないｔ「ケント！」はい？」

振り向くと走ってこっちに向かってくるクロノの姿が…

「久しぶりだな～クロノ」

「何が久しぶりだ！なんで六課から突然いなくなった？！」

「Ｗｈａｔ？なんでお前がしってる？」

「私がおるからや」　　「へっ？」

なんでここに？

「やあはやてさん、相変わらずお若く美しく」

「褒めてもお説教からは逃げられへんで」

またあのＴｈｅ正座タイムですか

「なんでここにいると？」

「それは…」チラッ

＞テヘッ＜

「シーザァァァァァァァァ」

「フェイトちゃんなんかケント君がおらんなったって聞いた途端倒れたらしいで」

「そういうわけだ、ケント、すこし僕の永久凍結魔法の訓練につきあってくれないか？」

「やーめーてー」

あ～俺生きて帰れるかな～

「ケントがいなくなったって聞いてみんな心配したんだよ！なのはやフォアードのみんなだってガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミ……」

クロノの1時間にも及ぶ訓練という名のイジメが終わりはやてさんからの正座での説教2時間……無理やり六課に帰らされてフェイト

さんからの説教…もう3時間……あ、足が……
始めはなのはさん達も何か言いたそうだったがフェイトさんの長々と続く説教についていけなかったらしい…
今ではこの広いブルーディングルームに2人だけだ……

「聞いてる？ケント！」

「はっ、はい！」

「もう、本当に心配したんだから」

おめでとうございますフェイトさん…［心配した］の回数が今回で70回目になりました

「ケーンートー」

…バルディッシュをのど元に突きつけないで、お願いですから

「なんでいなくなったの？」

「それは…＞自分の過去なんかで迷惑かけたくないんだとさ＜なっ？！シーザー！！」

それを聞いてフェイトさんは少し難しい顔をする

「私言ったよね、ずっとそばにいるって、もう一人じゃないって」

「……」

「私がケントを支えるって」

「言われたかもしれません」

よく覚えてないけど……

だがその直後、

［フェイトさんにキスされた］

「えっと……」

「もうこんなバカな事しないように！」

フェイトさんはそう言って小走りで部屋からでていく…

……部屋もどろ

「落ち着けん……」

あれから一度部屋に戻って寝ようとしても…眠れない……

なので今は落ち着くために六課の外回り…

＞よかったじゃない、美女のキスなんて＜

「ぶっ！！おっ、おまえなー」

抜き打ちとは……恐ろしい奴…

＞どうせ、自分に愛される資格なんてない、なんて思ってるんでしょ＜

「うっ…」

……そう、俺は…愛す資格も、愛される資格もない…俺みたいな化け物に…

＞ケント！！＜

「！！」

シーザーがいきなり怒鳴ってきた

＞あなたは何のために将来有望な部隊なんかを探したの？！＜

＞クロノがなんで無理矢理あなたを六課にやったのかわかってるの？！＜

「……。」

＞いつまでもうじうじするな！この部隊を信じろ！みんなはあんたを裏切ったりはしない！＜

「……お前には助けられてばっかだな」

＞だってマスターのパートナーだもん＜

いつも通りに戻る

まったくこいつは…

「あっ！ケントさん！」

ん？この声は…

「なにやってんだヴァイス」

「ちょ～と来てください」

俺の六課に少数しかいない男友達の一人…ヴァイス、なんか悩み事か？

「あれ見てください」

……ティアナ？

「自主練か？あいつ」

はっきり言ってもう六課は消灯時間に近い…こんな時間に自主練なんて

「今日は訓練休みだったのか？」

「いや、いつも通りでした…かれこれ４時間くらいしてますよ」

だったらだいぶきついな…ただでさえリンチみたいな訓練にこんな時間まで自主練なんて、無駄な努力でしかない、集中力も体も限界だと思うし何より変な癖がついたら逆交換だ、それにアラートなんかが出た時には疲労のせいで逆に足でまとい、いい事なんかこれっぽっちも無い

「注意はしたんですけど聞かなくて」

「それで俺にか？」

ヴァイスは首を縦にふる

「まあやってみるだけやってみりわ、お前はもう寝ろ、大事な時にパイロットが潰れたら意味ないぞ」

「お願いしますね」

……今日はいろいろとありすぎだ

第17話　変態研究者

side　ティアナ

自分のやった事が許せなかった…

だから同じことを繰り返さないように今日から自主練をはじめた

凡人の私が天才に追いつくには努力しかないから…

「成長期にはちゃんと寝ないと俺みたいになるぞ～」

「ケント副隊長？！」

今日の今日まで寝ていたケント副隊長がなんでここに？それよりももう歩いて平気なのだろうか？

「俺なんか3日も寝たのに身長伸びてないんだぞ」

「……」

なんか、可哀想だ

「まあそんな事よりもうすぐ消灯だからはよ寝ろ、なのはさんの訓練受けたあとにあんまり頑張り過ぎると最悪死ぬぞ～」

「大丈夫です…私みたいな凡人はこうするしか天才に追いつけませ

んから」

「凡人…ねえ…ほらよ」

ケント副隊長が何かをこっちに投げてくる

「俺コーヒー苦手でな、ココアで勘弁してくれ」

「あ、ありがとうございます」

素直にそれを受け取って飲むが

「ブッ！な、なんですかこれは！」

甘ったる過ぎる、なんなのよこれ、砂糖何杯入ってるわけ？

「かのリンディ提督の口に合わせた特製ココアだ！クロノが沢山あるからくれた、本当にうまいな～これ」

冗談じゃない、これを飲みほすぐらいならスバルと同じ量のパスタを無理矢理食べるほうがまだマシよ！

「すみません…ちょっと口直しに水を……」

「ああ水ならここにあるぞ、ちょうど飲んでなかったからな」

「すみません」

ケント副隊長が出したペットボトルの水を口直しに飲んだ筈だったが…

「＊☆＋〒＜$→？％＃＞÷｜〆々：／&＠＊×$¥！！！！」

「これもリンディさんの口に合わせた特注品らしいぞ！俺、こんなうまい水があるなんてしらなかったよ」

ケント副隊長って、甘党だったんだ…ああ…意識が……

「ん？ティアナ、ティアナァァァァァ！！」

彼女はこの時に誓った…彼からの貰い物は口にしてはいけないと…

side　　ケント

いきなり倒れたティアナを医務室に連れて行き今は自分の部屋の前

シャマル先生曰く、過労と精神的ショックで倒れたそうだ、なんかしたか？俺

まあ明日には目を覚ますらしいから大丈夫か～

そんな事を考えながら部屋のドアを開ける

ガチャ　　↑ドアを開ける音

「やあケント君、待っていｔ」

バタッ　　↑ドアを閉める音

俺は頭に手を当て今起きた事を整理しようと努力する……

うん、ない、俺の部屋に今六課が追っているマッドなんかがいる筈がない、やっぱ病み上がりだから少し脳が正常に動いていないんだ、うん

次にドアを開けたらいつも通りの俺の部屋が……

ガチャ　　↑開ける音

「人の顔見て現実逃避するのはやめてほしいんだｇ」

バタッ　　↑閉める音

「……。」

＞マスター。＜

「なんだシーザー？」

＞現実から目をそらさないようにしましょ＜

「……いや、これは夢だ、夢オチだ」

ガチャ　　↑……

「フフフフフ、何度ドアを開けても現実は変わらんよ」

「なんで此処にいらっしゃっるのでしょうか？ジェエル・スカリエッティさん？」

マッドで変態な研究者がそこにいた

「つまり俺がいない間に忍び込んでそのホログラム装置を置いたと…」

「まあそのとうりだケント君、君は実にもの分かりがいい！」

なんか俺がいない3日の間に部屋に忍び込んでホログラム発生装置を置いて行ったらしい、まあ本物が現れるわけがないか……

「で、なんの用だよこんなそんじょそこらの二等空尉ごときに」

「おや？わたしが君の正体を知らないとでも？管理局のデータをハッキングすれば直ぐにでてくるよ？まさか機動六課にわざわざ二等

空尉など名乗って務めているとは思っていなかったがね」

……こいつ

「俺の事はどこまで知ってる？」

はっきり言って俺の過去さえ知られてなければいいんだが

「そうだね…君が二等空尉などでは無いことと」

「飛天王の血を受け継いでいることぐらいか？」

「それだけか？」

「まあね、他にもいろいろ調べてみたがろくな情報などなかった」

それぐらいなら……良しとしよう

「そんな事よりケント君」

「なんだ？」

「私の所に来ないかね？」

「はっ？」

こいつは一体なに言ってる？

「知りたいのだよ！無限の欲望の名にかけて！幻の王を！勿論君には今私が出来る最高の待遇でお出迎えしよう」

俺に進んでモルモットになれと、冗談じゃない

「知らねーよそんな事、それよりもお前自首しろ、こっちの面倒が省ける」

「むうっ、残念だね…まあいきなりそんな事をいわれても戸惑うだろう、また来るよ。いい返事を期待しているよ、ケント君」

なんかハーハッハッハッハッとか悪役によくありそうな笑いをしながら出ていった

「シーザー？」

＞なに？＜

「今あったことはノーカウントにするよ」

＞立派な現実逃避ね＜

とりあえずホログラム装置は破壊しました
スカ野郎は明日報告しよ、もう眠い
時計を見たらもう1時…

本当にいろいろありすぎだ、今日は…

第18話　治癒魔法って素晴らしい

どもっ！ケントです！
今自分は何をしてるかっていうと……

「お願いしますお願いします、もう訓練場壊さないで下さい。
お願いしますお願いしますお願いしますお願いしますお願いします・・・」

正座の俺とシグナムさんの前で泣きながら頼みこんでる部隊長です
……

はい、訓練場ぶっ壊しました、収束失敗作で…ちなみに［また］です
今回は3分の1ぐらい海に替えましたー　　イエーイ
♪――O（≧∇≦）O――♪

壊した回数は5回目から数えてないです
もう六課は火の車
八神家の晩御飯がだんだん質素になっているのは気のせいだと思いたい

ふざけるのはよしたほうがいい気がする……
もう正座始めてから俺もシグナムさんも3時間が過ぎようとしています……
その間はやてさんは泣きながらずっと「お願いします」を繰り返すんですよ、何処のホラー映画だ

シグナムさんも「切腹でござる！！」なんか言い出すし……
まあ今の俺に出来ることは、
「どうもすみませんでしたーー」
土下座するくらいだったりする
へっ？プライド？そんなもの今可燃ゴミに捨てましたがなにか？

さらに1時間後

トンッ
ビリッ
「痛っ！」
＞マスターの自業自得＜
麻痺した足で歩くのってこんなに辛いんだな……

ｓｉｄｅ　　なのは

ティアナ大丈夫かな
今日のティアナは明らかに動きがおかしかった、技のキレも無く回

避もいつもと比べて遅い

「どうしちゃったんだ「ムニュ」？？」

……今足元でムニュっていった？

試しに足に力をいれてみると…

ムニュムニュ

「なのはさん……一部の大きなお友達にはたまらないかもしれませんが俺にそんな趣味ないんで足どけてくれると嬉しいんですけど……」

「ふ、ふえええええええ？！」

なになになに？！なんでケント君が廊下に倒れてるの？！しかもなんで私は頭を容赦無く踏んづけてるの？！

「む、無念、た、高町、こっちも頼む……」

なんでシグナムさんまで倒れてるの？！

と、とりあえず

「シャマルさーん！！」

side　　ケント

治癒魔法っていいもんだ
みるみる内に痛みが引いていく

「はいお終い、シグナムもケント君も大丈夫！」

「すまないシャマル」

「ありがとうございました、シャマル先生」

とりあえず訓練場はもうこれ以上壊さない様に努力するとしよう

その日の八神家の夕食が白米だけだったというのは余談である

side　　？

ビー・ビー・ビー・ビー

「敵は一人だ！」　　「直ぐにに駆除しろ！」

第12管理世界　　フェディキア

都市からだいぶ離れた山岳地帯にその研究所はある

「こっちだー」　　「死にやがれ！！」

バンバンバンバンバンバンバンバン！！

発射されるのは鉄の銃弾

「……シールド」

銃弾が向かった先に銀色の魔方陣が展開される

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン

その魔方陣は鉄の塊を全てはじき返す

「撃て！撃ちまくれ！！」

ものすごい量の銃弾が発砲されるが全てシールドに遮られ、目標に当たる事はない

「……こんなミッドのお膝元みたいな世界に違法研究所があるなんて…」

身長は１７０中間ぐらいだろうか？シールドを展開しているのは銀髪で紅い目をした美しい女性、髪はショートカットで青と黒をモチーフにしたバリアジャケットを着ている

「私の任務はこの研究所の破壊と実験台とされている人と動物の保護です…貴方達は抵抗しないならマスターが助けてくれる可能性がありますが？」

「黙れ！おまえは此処が何かわかっているのか？！かの時空管理局少将ラーズ様の研究所だぞ！次元犯罪者になりたくないんだったら大人しく帰りやがれ！」

時空管理局少将ラーズ、デブで黒い噂があとを絶たないどうしよもない局員だ、

「ありがとうございます。わざわざ教えてくれて、おかげで探す手間が省けました」

その瞬間、２０～３０いる研究員の胴体に一瞬で銀のバインドが巻かれる

『！！！』

「一度だけ聞きます、投降するか、しないか」

「はっ！こっちにだって魔導師はいんだよ！バインドぐらいでいい気になんな！」

「残念です……」

胴体にあるバインドが、光始める！

「バインド・バースト！！」

ドドド

頭に現れる、とんがったフサフサな純白な耳

パア

腰に現れる「九本の」またまたモフモフな真っ白い尻尾

「お…お前、使い魔か！」

奥にいて生き残った研究員が声を荒げる

「ちょうどいいです、実験室などにいる被害者達の所へ案内して下さい」

その１時間後…第１２管理世界フェディキアの山岳地帯で大規模な爆発が起きた

第１９話　　お財布～と相談だ♪

「ティアナが朝と夜に自主練？」

「はい」

訓練場ぶっ壊して３日が経ちました、昨日の夜中に散歩してたらまたまたティアナ嬢が自主練してたから注意しようと近づいたら逃げられた…なぜだ？
もしや？と思ってサーチャーをそこに置いておいたらやっぱ朝も自主練してたわけで、あまりに休憩がないので許可降りてるかなのはさんに確認中

「う～ん、わかった、こっちからは注意しとくね。ありがとう、ケント君！」

なのはさんが注意するんだったら大丈夫だろう。だけど、

「質問いいですか？」

「ん？どうしたの？」

「俺からみたティアナは明らかに焦っている、力に執着しすぎているんです。なぜなのかと疑問に思いまして…」

ティアナは…焦っている。何かを追う様に、否、何かから逃れるように、

「アグスタ警備の時にしちゃったフレンドリーショットの事気にしてるのかな…あと、お兄さんのこと…」

ティアナのお兄さん？

そこからティアナの過去を聞いた。
ティアナには親はおらず、家族は兄しかいなかったこと、
兄はティアナの憧れで、一等空尉、名をテイーダ・ランスターということ、
そんな兄が、任務中にしんでしまったけこと、
そしてその時にかけられた兄の上官の心ない言葉のこと、

「…プレッシャーになってるんですね…兄の存在感が」

「そうだと思う…」

俺は目の前のココアを飲む…ん？リンディさん使用のココアだけど何か？

「それでも、無理して体を壊し、またミスなんてされたらたまらんですよ」

「うん」

ちなみになのはさんにココアを勧めたら断固拒否された、美味しいのに…

「それと、考えもおかしい、ここは古代遺物管理部機動六課、今はロストロギアであるレリックの回収が目的であり強くなるために作

られた物ではないです、訓練の疲労のせいで任務に支障がでました
だとただの足でまといになるんです。
訓練はいいですが本来の目的を大切に、わかってますか？なのはさん？」

「にゃ！にゃはは～
わ、わかってるよそれぐらい」

目が泳いでますが……まあいいか。

そのままわかれて俺は訓練場へ、シグナムさんの収束魔法、早く完成させないとな～

side　はやて

「お腹すいたな～」

「ですぅ～」

「だ、大丈夫？はやて？」

あかん、この頃ちゃんとした物食べてへん、栄養が不十分なんはよ

うわかっとんやけど…

「お金がない～」

「ですぅ～」

「ほんとに大丈夫？！」

フェイトちゃん、心配してくれるならお恵みを……

もう６時やし晩御飯の時間やな、今日の晩御飯は白米かな～

「主～～～」

ドタドタドタドタドタドタ

んっ？遠くからシグナムの声が…

バッコーン！！！

「……」←自分

「……」←リイン

「……」←フェイトちゃん

……これは幻覚や、シグナムが部隊長室のドアを吹っ飛ばして入ってくるなんて考えられへん、

夢やと思いたい。

「主！！」

「なんや～シグナム？」

デアボリック・エミッションでぶっ飛ばしたいと思いながらも冷静に対応する私は偉い！賞賛に値するわ！
こんなにシグナムが取り乱すことはそうそうないし、もし敵の襲撃とかやったらシャレにならへんからな～

「スカイが！」

「ケント君が？」

……またあいつが何かしたか？

「前線メンバーと隊長陣全員を、ミッドにある○○レストランで奢ってくれるそうです！！」

「ようやったーー！！シグナム！！六課隊長陣と前線メンバーをすぐに集め！早速出発すんでー！」

○○レストランってミッドでも有数の超高級バイキングやんか！！
シグナムが何したんかしらんけど奢ってくれるんやったら話にのらん手はない！
ドア？それがどうした！

「ちょっ！シグナム？どういう事なの？」

「テスタロッサ！お前もすぐに準備しろ！私達は腹が減って減って死にそうなんだ！」

side　　ケント

鬱だ……

なんでよりによって高級店なんだよ、2時間前の自分を思いっきりなぐりてぇ

〜2時間前〜

「えっと、シグナムさ〜ん？」

目の前にはピンク色の髪をした物体が転がっている…

「シグナムさ〜ん」

「……。」

返事がない、ただの屍のようだ

試しに落ちていた気の棒でつついてみるが反応無し、だったら…

「模擬戦しましょうか～」

ビクッ！！

「しよう！今すぐしよう！始めよう！」

「……バトルマニア…」

呼んでも起きなかったのに［模擬戦］と聞いた途端起きるとは…

「ですが残念で～す。収束が完成したらという約束でした～」

「ぐっ、」

残念そうだけど仕方ない、その時、

ぐぅぅぅぅぅ～～

「……」

「……な＃＃＃」

あら、かわいい音がシグナムさんのお腹から

そのままシグナムさんは恥ずかしさから赤面してしまった

「えっと、なんか奢りましょうか？」

「……いや、いい、主やヴィータ、シャマルやザフィーラも我慢してるんだ。私だけ楽は出来ん」

八神家全員ですか…なんとなく、なんとな～く誰のせいかわかる……まあ、お腹すいてるままも可哀想なんで…

「じゃあシグナムさん、こういうのはどうですか？」

「なんだ？」

シグナムさんが首をかしげる

「今日の練習で収束を完璧に出来るようになったら隊長陣プラスFW全員分俺が夕食を奢りましょう。場所は何処でもいいですよ。」

「本当か！？」

まあ、シグナムさんの収束はまだまだ酷いし今日中に終わる事なんて無理なんだが……

適当に練習して八神家の皆さんに食堂のカレーでも奢ろう。他の隊長達やFW陣は不公平にならないようにだしただけ

「じゃ、じゃああの有名な○○レストランでも……」

「なんでもいいですよ～」

どうせまだまだなんですからね～

この時の発言を俺は5分後にものすごい後悔する事になる……

まさか1発で成功だなんて……

そして今……ミッドに行く車の中

「本当に太っ腹やな～ケント君！」

はやてさんにはベタ褒めされるわ…

「あんなレストランに行けるなんて感激です」

スバルは目をキラキラさせてよだれ垂らすわ

「うう…ありがとう。ケント君」

シャマルさんは空腹とおさらば出来るのが嬉しいのか泣き出すわ

「そんなにすごい所なんですかフェイトさん」

「ミッドでも美味しいって評判のレストランだからね」

フェイトさん一家はその話で盛り上がるわ

「…さて」

お財布〜と相談だ♪

第２０話　魔王降臨！？　Σ（゜д゜lll）（前書き）

ものすごいグダクダです
途中から何言いたいのか全くわかりません
それでも良い方は見て下さい

第２０話　魔王降臨！？　Σ（゜д゜lll）

「……。」

＞……．……。＜

こんにちは、現地リポーターのケントで～す　キラッ☆・・・
すみません、調子のりました、１９の男がやったら気持ち悪いだけですよね

さて、今私は機動六課の訓練場に他の隊長達と一緒に来ています。
なんとも今日は六課のスターズとライトニングに別れてなのはさんと模擬戦らしいです
ん？なんで最初「…」で始まったかって、それは…。

「私は……もう、誰も傷つけたくないから！！失くしたくないから！！」

「……」←ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ　（なのは様）

「だから、だから強くなりたいんです！！！」

「少し……頭冷やそうか」

なにこれ？（―。―；

～今朝～

起床、パンを口にいれてからデスクワークへと

～昼～

デスクワークがなかなか終わらず軽い休憩と一緒にラーメンをすする、午後からの模擬戦をなのはさんに遅れると連絡、

～今～

シーザーに手伝ってもらいなんとかデスクワーク終了、急いで訓練場へと、模擬戦始まってたからヴィータさん達がいるビルの屋上へと移動、「遅れました～」的な事を言ってみたら全員無視……少し凹みながら模擬戦に目を移すとティアナ死亡フラグ、そして魔王降臨……なんで？

「クロスファイア…」

「うあぁぁぁぁぁぁぁ！！ファントムブレ……」

ん？あれって砲撃？

……まあとりあえずティアナ
事情を知らない俺が介入したらややこしくなるんで……

「シュート……」

なんか怒られてそうだから、それぐらいはくらっとけ

ガガガガガガ！！

これで終わりか……
面白くは無かったな…

「ティア？！　　バインド？！」

……はい？

ウイニングロードの上にはバインドされたスバル、なんで今更バインドされる必要がある？

そしてフラフラで半分意識がないティアナ

ティアナを見たまま無表情に新たなクロスファイアを生成するなのはさん

だいたい今の状況は理解できた

「オーバーキルだな……介入する理由ができちまった、シーザー？」

＞わかってるわよ＜

「それじゃ」

「＞セットアップ＜」

ｓｉｄｅ　　ティアナ

認めてもらう

それだけだった
そのために疲れた体に鞭を打って朝、夜と自主練をした
天才やエースばかりの部隊で認めてもらうには努力するしかない
自分がここにいる為には、努力するしかないのだから
けどその結果がこれ……
なのはさんを怒らせ、撃墜寸前、意識はもうすぐきれるだろう
目の前で２発目のクロスファイアがなのはさんの指先にためられる
避ける気力は……ない

静かに目を閉じる

だけど、待っている衝撃は……来ない

薄れゆく意識の中で最後に見たのは

自分の上司である小さい青年だった

ｓｉｄｅ　　第３者

ギャラリーは目の前で起こった出来事に目を見開く
なぜなら今さっきまでギャラリーにいた青年が一瞬でこちらに現れたのだから
さらに砲撃型のなのはが放ったクロスファイアを全て［斬り裂いた］のだから……

「邪魔しないで、ケント君……」

クロスファイアを放った張本人、なのはは静かに、だが周りにいる人間を震え上がらせる声で青年……ケントにつぶやく

「俺は途中から見ていてティアナが何しでかしたかは知りませんけど、明らかなオーバーキルです。
少し冷静になって下さい、あとスバル！」

ケントはウイニングロードの上に立っている青髪の女性、スバル・ナカジマに声をかける

「ティアナを医務室まで運んでくれ」

「えっ？でもバインドが……ない？！」

スバルはさっきまで自分を縛っていたバインドが外れている事に驚愕する、いや、バインドは外れたのではなく［斬られていた］

そして……

「こいつを頼んだぞ」

次はティアナを抱えたケントがスバルの前にまたしても［現れた］

スバルは驚きながらもティアナを受け取り医務室に走って行く

「余計なこと…しないで！！」

ガガガガガガガガガガ！！！

なのはから１０発の魔力弾がケントに向かって放たれる……だが

シャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャ

ケントはその全てを［叩き斬った］

少しの間両者共に無言になる

なのはは自分の魔力弾がいとも簡単にかき消された事に驚きを隠せない

「それがなのはさんの教導ですか？」
無言の時間を破ったのはケントだった
彼は静かに、優しくなのはに問いかける
「うん……だから邪魔しないで」
相変わらずの無表情でなのはは質問に答える
「教導官でもなんでもないケント君が私の教導に出て来ないで」
彼女は冷たく言い放つ、だがその瞬間
「寝言は寝て言え、高町」
ゴウッ！！
不可視の風がふく
青年……ケントを纏う雰囲気が変わる
なのはは動かない、否、動けない

レイジングハートを持つ手は震え、一瞬の内に体は汗をまとう
風に乗って来たのは尋常じゃない［殺気］
体にかかるのは［威圧］
「自分と考えが違い、気に入らない下の人間には力で捻じ曲げる？
はっ？笑わせんな」
カツッ、カツッ、と一歩、また一歩とケントはなのはに近づく
なのはは……動けない……
「そんなもんただの支配だ」
ケントがなのはの目の前に立つ
「ティアナが何したかはわかんないけど」
顔を近づける
「十人十色、十人いれば考えはみんな違う、相手の全てを力で否定するな……悪い所を変えれるように努力しろ、完璧な人間なんていないんだからな、助け合わなきゃいけね～だろ？」
何時の間にか殺気は収まっている
「あいつが目を覚ましたら2人でお話したらどうですか？今回の事を通じてなのはさんも何か学べますよ」

そう言っていきなり［お姫様抱っこ］し始める
これにより、なのはの脳は半分正常に動き始める
「へ？はにゃ？はにゃぁぁぁぁぁぁぁぁ？！」
「体ちゃんと動かないでしょ？ギャラリーまで連れて行きますから
そこからは歩いて下さいね」
「大丈夫だよ！歩ける歩ける歩ける歩ける！！」

余談だがギャラリーについた直後にケントはフェイトにバルディッシュでホームランされた

side　　ケント

……いてぇ

なぜかバルさんでのホームランくらって現在部隊長室

「これが何なんか説明してくれるな？」

わかりましたわかりましたはやてさん、だからその右手に持っているシュベルトクロイツ閉まってくれません？

この子狸……ゴホンゴホン、はやてさんが知りたがっているのは今日みんなの前で見せた［閃光］の事……

アグスタの時の戦闘映像では上手く誤魔化してばれずにすんだが……ハアｏｒｚ

あれ見せたら転移魔法とかと勘違いされるんだよな～

実際消えて現れた様にしか見えないし

～説明中～

「ほんならそれはケント君のレアスキルになるんやね」

「まあ……はい」

「それやったら私やなのはちゃんなんかは天敵やな～」

そうですな～お2人は移動砲台ですから自分の懐に入られるのを嫌がりますからね～

俺の能力でしたら発射する前に撃墜ですから、それで……

「なぜ、わたくしは正座をさせられているのでしょう？」

「ん？今の今までそんな事を報告せんかった罰よ～」

その笑顔が怖いです

「お説教スタートや♪」

「やーめーてー」

side　はやて

「謎や……」

今日のケント君の行動を映像で見るとあのエースオブエースの攻撃をいとも簡単に無力化する姿が映し出される。

だが、いくら［閃光］という能力を使ってもここまで無力化できるものなのか？

「クロノ君はクラウディアで主張中やしな～」

結局はケントについて聞ける人物は今いないのだ

クロノに迫り聞き出す寸前だった時はケントが行方不明になり結局

聞けなかった
通信で聞こうにも機密事項なので万が一ハッキングなどされていれば洒落にならないので無理

その時

ー警ー

「考え事は一旦中止や！お仕事モードに切り替えるで～」

彼女は自分に喝をいれ、仕事場へと向かっていった

第２１話　クロノの思い（前書き）

短いです、すみません

第２１話　　クロノの思い

こんな時にアラートとか空気読めよスカ野郎
そんなわけでただいま痺れた足に鞭を打ちながら絶賛移動中です。
はやてさんは説教キャラが定着してるのでしょうか？

「ギ……ギギ……」

ビリビリビリ！！

「いってーー！」

＞早く行かないとまた怒られるわよ＜

「わかってる……わかってるんだけどよ～」

無理じゃね？飛んでいいかな？部隊内で…なのはさんからＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩくらいそうだ

「あーー！ケントさん！？こんな所にいたんですか！」

ん？

「なにしてたんですか！隊長達行っちゃいましたよ！」

「……あ！シャリオか……」

「何ですかその間は！」

「いや……お前がちゃんと出て来たのは初めてだからつい……」
本当に誰かと思ったよ……で、何で後ろにＦＷ陣？それにシャマルさんやシグナムさんまで、ティアナの頬腫れてないか？
「まあちょうどよかったです。ケントさんも一緒に来て下さい」
「ＯＫわかった、だがその前に誰か肩かして下さい、足痺て動けない…」
「なら俺が……」
ザフィーラはそう言い、
［人型になった］
「持てるか？」
「ああ、ありがとう」
おお？！だいぶ楽になった……ん？
（（（（（；゜Д゜））））））↑ＦＷ陣＋シャリオ
ピピピ、状況把握。
「……ザフィーラ、耳塞げ。」
「なんでｄ「「「「「ええええええ！！！」」」」」」

シャリオもといシャーリーに聞かされたのはなのはさんの過去、ジーンとくる話だったけどプライバシーの事考えましょうねシャーリー（こう呼べとうるさい）
あれから帰って来たなのはさんとよく話したらしい、俺は盗み聞きしてた愉快なカラフル頭のちびっ子達を縛り上げただけでなに話したかは知らない、まあ今度は大丈夫だろう。
じゃあ、

おやすみなさい

ｓｉｄｅ　　クロノ

「スティンガー・レイ！！」

ガガガガガガ！

「ぐう」「くそがー！」「うわー！」

研究員を１０人ほどふっ飛ばす、もちろん非殺傷設定なので死んではいない

「ディランダル！」

まだ２０～３０人はいるが、これで決める！！

「スティンガーレイ・エクスプロージョンシスト！！」

１００を超える刃が研究員達を貫く、これでおわりか？

「うおおおおおおおお！！」

「くっ！」

＞ボス！！＜

死角からの斬撃……間に合わない！

ガキィン！！

「なっ！」

目の前に純白のミッド式魔方陣、恐らくは彼女の［遠距離プロテクション］

「シールドだと？！なっ、バインド？！」

研究員にかけられる腕と足を拘束するバインド、

キィィィィン……

そのバインドが光始める……！！

「まて！殺しては駄目だクオン！」

僕が叫ぶとバインドの光はだんだんと小さくなる

「最後に気を抜くからそんな事になるのですよ、クロノ提督」

草履のようなものを履いてこちらに近づいてくる彼女、クオン……

彼女の頭には真っ白な毛が生えた動物の耳が付いており、お尻の辺

りにはこれも真っ白な九本の尻尾が付いている

「殺しはしてはいけないだろ！君のマスターからも注意を受けている筈だ！」

「それが殺されそうだった貴方を助けた恩人に向けての態度ですか？」

「それについては礼を言う、おかげで助かった、だが！」

「こんな奴らは更生なんかしても無駄ですよ、こいつらのせいでどれだけの人間や動物が殺されたか…」

クオンは違法研究者を嫌う、実際第１２管理世界フェディキアの時も研究者達を皆殺しにしてる、だけど

「それで、これで全員ですか？何なら私がここで殺しておきま「いや、僕は君とは違う、この人達は管理局で法によって裁く」……勝手にして下さい、私は先にクラウディアに戻っておきます」

第１０３管理外世界の違法研究所の職員は全員逮捕、実験台とされた拉致被害者の生存者０名、管理局上層部が黒幕の疑いあり…っと

僕は自分の砲撃で空いた穴から空を見上げる
思い描くのは自分の親友、
自分の運命に縛られ、羽ばたく事が出来ない命の恩人
かつて白い少女が一人の少女の運命的を変え、助けた様に

僕も彼を助けたい
なあ

「ケント……」

第２２話　機動六課のある休日　１

いきなりだけど今日一日休みだ……休みだ……休みだぁぁぁぁぁぁ！！！

「ちょっ！いきなりどうしたん！？」

「休みですよ休み！俺が六課に来てから休みなんて一日も無かったじゃないですか！ワーカーホリックにもほどがあります！」

魔王が降臨してから数週間が経ちました、相変わらず訓練、デスクワーク、訓練、デスクワーク、訓練……と、「休日？なにそれおいしいの？」みたいな日々を乗り越えた自分に賞賛をおくる！

えっ？お前はアグスタの時寝てたじゃないか？そんなもん知るかーーー！！

「えっと、まあ今日一日ゆっくりしてな」

はやてさんがなんか苦笑いしてるが無視無視、今日一日なにするなにする？よし！今日は一日寝よう！グダクダ過ごす、これ決定！

＞だったら私のメンテいけるわね♪＜

こやつは一体なにを言っておる……

「我輩に本局へ参れともうすか？」

＞当たり前じゃない、もう四ヶ月くらい行ってないじゃないの」

「いや……でも俺には予定が……」

＞どうせ一日中寝て過ごすとかでしょう＜

デバイスにまで心を読まれた……

「わかった……本局行くｋ〔ドドドドドドドド〕？」

バタッ！！

「ケントさん！！」

……シャリオ？

「私も……」

はい？

「一緒に本局行きます！！」

「いやなんで？」

「ケントさん、シーザーのメンテナンスさせてくれないじゃないですか！」

それとこれとどういう関係が？

「私のメンテナンスを断り続けているシーザーが認めたデバイスマイスターがどれほどの技量なのかを私自らが確かめにいくんですよ！！」

……いや…でも、

「もちろん拒否権なんかありませんよ！相手が私より下だと思った場合はシーザーのメンテナンス、ちゃんとさせてもらいますからね！」

……はい……。

ギュゥゥゥゥゥゥゥ

ん？なんか風を切る音が、

ガシャン！ドカァァァァァン！！↑新しく付け替えられたドアが破壊される音

「「「……。」」」↑俺、はやてさん、シャリオ

「いくらシャーリーでも抜け駆けはゆるさないよ！！」

「なっ！？フェイトさん？！私はそんなんじゃないですよ！デバイスマイスターとしての職務を果たそうとしているだけです！着いていくと言っても今回だけです！」

「そんな事はわかってるよ！でもダメーー！！」

「ああ……ドアが…ドアが…」

シャリオもフェイトさんもなんで話し聞こえてるんですか？シャリオは辺りにあるもの投げない、フェイトさんはバルさん振り回して

はいけません、はやてさん……頑張れ。
まあ今俺が出来る事は、
「逃げよ、」
＞私も賛成＜
触らぬ神に祟りなしって言うからな

で、
「結局こうなんのかよ」
本局に行くにはそれ用の転送ポートがある場所に行かないといけない
そこに行く時、電車を使おうとしたのだが…
「そのデバイスマイスターはどんな人なんですか！いつから管理局に！」

後ろに座ってるシャーリーは敵対心バリバリだし

「シャーリー、あまり相手に迷惑かけちゃ駄目だよ」

なぜかフェイトさんがついてきてるし、しかも車だしてくれたし

あとフェイトさんの話によるとFW陣も今日は休みらしい、なんでも今日の訓練が第二段階クリアの見極めテストだったんだと、ついでに俺が教導してるシグナムさんはだいぶ上達した、訓練場はもう破壊しないだろう、今は実戦を踏まえた強化中というところ、日に日にシグナムさんが「模擬戦をしよう！」と言ってくる回数が増えてる感じがする。収束魔法が完成したらするって約束だったからな～

「とにかく！私より技能が少しでも下だったら変わってもらいますからね！」

……鬱だ

ピピピピ

「ん？」

全体通信、発信したのは…キャロか

side　スカリエッティ

「レリックのもとにたどり着いたドローンの反応が、全て消滅しました」

とうとう来たね、ああ嬉しい、自分でも笑っているのがわかる

「やったのは局の魔導師かい？それとも［当たり］をひいたのかな？」

「確定できませんが、恐らく後者だと思います」
とうとう来たのだね、器よ
「素晴らしい！早速追跡するとしよう」
「ドクター、［当たり］がでたんだって？」
「おや？ノーヴェ、耳がはやいね」
私が作り出した戦闘機人Ｎｏ．９、ノーヴェ、彼女もまた、私の計画を行うための駒の一つ
「それなら私も出たいんだけど」
「駄目よノーヴェ、貴方の武装はまだ調整中なんだから」
「今回のが［当たり］なら、自分の目で見てみたい」
彼女の気持ちもわからんではないがね、だが
「焦らなくても、あれは必ず私たちの元へくる、今回は待っててくれないかな？」
貴重な駒を失いたくはないんでね
「わかったよ、ドクターがそう言うなら」
「すまないね」

さあ、

ショーの序章だ！！

彼は知らない、

自分を超える人間が、

世界にはいると言う事を……

ｓｉｄｅ　　？？？

「あーめんどくせぇ」

ミッドチルダの裏路地に一人歩く男がいる
彼の後ろには何処の世界でもいそうなチンピラが転がっており、ここで殴り合ったことがわかる
本当は綺麗な筈な金髪はボサボサで、しばらく手入れをしていない様に思える
年齢は、１７、８くらいか？

「表の世界の王様なんかになんで興味があるんだろうねーー親父は」

そう愚痴お言い、チンピラから［奪った］財布を自分のポケットにしまう

「いるのかねぇ」

一度大きな背伸びをし、言い放つ

「この［雷神］を楽しませてくれる存在は」

そう言い青年は、ニタリと笑い

飛びたった

第２３話　機動六課のある休日　２

「うん、バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし……心配ないわ」

シャマル先生の言葉でみんなが胸をなでおろす

キャロの通信を簡単に説明するとミッドを歩いていたら不思議な物音が、駆けつけてみるとレリックに繋がれた金髪幼女発見。ただケースは２つなのにレリックは１つしかないことからもう１つは地下水道に落ちている可能性大、それにつられてガジェットがくるかもしれない。

と、いう感じだ

なので機動六課が緊急出動、俺たちはそのまま車で、なのはさん達はヘリで合流した

「ごめんね皆、お休みの最中だったのに……」

全くだ、メンテと言っても午前中には終わらせたかったのに…

「次はぜーーったい検証しますからね！！」

シャリオうっさい、今それどころじゃねーだろ、まあ十中八九ガジェットは出てくるな、あと……この金髪幼女…

ボロボロの服に足の鎖、恐らくは違法研究所の……

「ケント隊長？聞いてる？」

「ん？ああ、すみません」

やっべ、全然聞いて無かった。

「はぁ～、それじゃあみんな、ケースとこの子はヘリで護送するから、みんなは現場調査お願いね」

「「「「はい！」」」」

下水道の方にはＦＷ陣が逝くのか……ん？字が間違ってる？臭い下水道なんだからこっちのほうがいいだろ？

そんなくだらない事考えてたらグリフィスからの通信がきた

『ガジェット来ました！地下水路に数機ずつの構成で総数１６……２０！海上方面、１２機単位が５グループ！』

やっぱ来たか、しかも海上方面もあるとかだるすぎんだろ、休みだったから余計に、それに地下水路の制圧をこれだとＦＷ陣だけでしないといけなくなる。人手不足か……

『ロングアーチへ。こちらスターズ０２』

ヴィータさん？

『海上で演習中だったんだけどナカジマ三佐が許可をくれた、今現場に向かっている、それともう１人……』

『１０８部隊、ギンガ・ナカジマです』

なんか隊長達やスバルなんかがビックリしてるが……だれ？

『別件調査の途中だったのですが、そちらの事例とも関係ありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？』

『うん、お願いや』

まあ人数が増えることに越したことがないしな、それに「ナカジマ」と言ってたぐらいだからスバルの姉かなにかだろう、ひとまず人手不足は解消っと

「さて、皆。短いお休みは堪能したね？」

「お仕事モードに切り替えて、しっかりやっていこー！」

「「「「はい！」」」」

ＦＷ達の元気な声が響く、ん？そういえばクラウディアってもう帰って来てるんだったよな……

「一様保険として呼んどくか……」

そう思い、俺は通信をいれた

ｓｉｄｅ　　３人称

とあるビルの一角に一人の少女が紫色の髪をたなびかせながら佇んでいる、年齢的にはエリオやキャロと同じくらいだろうか
少女が静かに目を閉じるとモニターが現れ、一人の女性が映し出される

「ヘリに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。お嬢様は地下の方を……」

少女は何も言わずに目を開ける、

「騎士ゼストとアギト様は？」

「別行動……」

「お一人ですか？」

「一人じゃない」

少女がデバイスを使うと目の前に黒い何かが召還される

「私にはガリューがいる」

「失礼しました、協力が必要になりましたらお申しつけ下さい、最優先で実行いたします」

「うん」

モニターが消え、少女は黒い何かに話しかける

「行こうか、ガリュー、探し物を見つけるために」

少女の周りに魔方陣が展開され、彼女は［消えた］

ｓｉｄｅ　　ケント

『私が呼ばれた事故現場には、ガジェットの残骸と壊れた生体ポッドだったんです。ちょうど、５～６歳の子供が入るくらいの。

近くに何か・・・重いものを引きずって歩いたようなような跡があって、それを辿って歩いていこうとした最中に連絡を受けた次第です』

ギンガと呼ばれる女性から説明を受ける、

『それにこの生体ポット、少し前の事件で見たことがあるんです』

『私も……な…』

2人の声が沈む、当たり前だろう、俺だって一つ、思い当たるものがある、それは……

『人造魔導師計画の……素体培養器』

1番当たってほしくないのか、まったく……

「これはあくまでも推測ですが……あの子は人造魔導師の素体として造りだされたのではないかと……」

ブチッ！！

俺は念話を切った、これ以上聞かなくてもいいだろう。それに……俺自身を抑えられなくなる

今はフェイトさんとなのはさんで海上のガジェットを制圧している、制圧し終わるのは時間の問題だろう

ちなみに俺はヘリの護衛だ

その時、事態は急変した

「航空反応、増大！！」

「これ……嘘でしょ…」

ロングアーチからの通信……マジだ、なんかどんどん増えてやがる

「シャマル先生！俺も出ます。ヘリ任せました！ヴァイス、しっかり操縦しろよ！」

「わかったわ」

「了解っす旦那！」

いい返事！

俺はセットアップしてヘリから出ようとする。その時……

パリパリパリ……

……なんだ？

一瞬だけ何かが聞こえた……電気？……っ！！

ズドォォォォォォン！！！

ヘリに向かって晴天の空から［雷］が墜ちた！

［閃光］があったからとっさにシールドをはれたが、くそ、ヘリは……なんとか無事か……っ！！

そして第二波！！

「うおおおおおおお！！」

ショットオンムーブ！！

俺は雷を［斬り裂いた］

魔力による斬撃と衝突し、爆発を引き起こす、やはり、魔導師かだがこの電力、人がだせるものじゃないぞ！！

「ヴァイス！！直ぐにここから離れろ！出来るだけ遠くへ！！」

「りょ、了解！」

相手は電撃の性質変化を持つ魔導師、さらにはさっきの雷はゆうにフェイトさんの２～３倍の威力、くそ、悪い予感しかしねぇ

煙がはれる

目の前にいるのは１７～８歳くらいのボサボサの髪をした金髪の青年

青年は口を開く

「えっと……ああ、始めましてだっけ？

裏切り者の兄さん」

第２４話　機動六課のある休日　３（前書き）

むっさ短いです

第２４話　機動六課のある休日　３

ｓｉｄｅ　３人称

「俺はお前を弟にした覚えが無いんだが……」

ケントは冷たく金髪の青年に言い放つ

金髪の青年は一度小さくため息をしてから口を開ける

「そりゃそうだ、兄さんが裏切った時はまだ俺は［選抜中］だったからね、兄さんが知らないのは不思議じゃない」

そう言って青年は杖の様なデバイスを機動させる

デバイスはアームドデバイスらしく何かを話すことがない

「そう言うことはお前も［王の血］を持ってんのか？」

「いや、俺は兄さんみたいに特別じゃない……あるのは、これだな」

青年がデバイスを前に出すと

パリパリパリ……

「電撃の性質変化……」

「いいや、俺のは性質変化なんてもんじゃね～よ」

「は？」

魔力を氷や炎、雷などに変える事を［性質変化］という、現に六課ではシグナムは炎熱系の性質変化、フェイトやエリオは電撃の性質変化を操る。

だがもともと魔力だった物を別の物に変えるのは限度があり、一定以上の威力は望めないのだ。

なので主に攻撃魔法の補助として使われる事が多い

だが性質変化以外の方法で魔導師が「自然の力」を操れるというのは管理局の歴史上存在しない。

「兄さん達……いや、俺達魔導師はリンカーコアから魔力を放出し、攻撃魔法や防御魔法、またまた回復魔法や補助魔法を使っている。だけどこんな考えはどうだ？」

お互いがデバイスを構える

「リンカーコアから放出するのが魔力以外のエネルギーにしてしまったら」

「……と、言う事は、お前のリンカーコアから発生してるのは魔力ではなく、雷だと」

「まあこうやって空を飛んでる訳だし、全部が全部ってわけじゃないんだけどな」

ケントは片手で頭を抑えながらつぶやく

「全く、あいつが考えそうな事だ……ここに現れた以上、目的があ

るんだろ。あと名前、なんだ？」

「まあな、俺がここにわざわざ現れたのはこっちの王が見つかったから回収しに来た、本当はさっきのヘリと一緒に一番やっかいな兄さんたおしておきたかったんだがね」

「こっちの王？」

「おっと、これ以上裏切り者に話す事はないよ」

「だろうな」

二人は戦闘準備にはいり、名乗る

「時空管理局本局所属二等空尉、ケント・スカイ」

「Ｎｏ．６、［雷神］、ボルス」

「「勝負！！」」

ｓｉｄｅ　　なのは

私は今、フェイトちゃんと一緒に現場の北西部海上でガジェットと交戦している

「シューート！！」

何体か爆発する、だけど……

「やっぱり……」

スフィアが当たっても爆発せずに消えるだけ…

幻術と魔法の交戦編隊、かなり巧妙で見分けがつかない

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、ちょっとキリがないね」

明らかに敵の戦力が集中している、そうなると狙いは……

「地下か、ヘリに主力が集まってる」

だろうね、ヘリはケント隊長に任せたけど……ロングアーチからの連絡によるとケント君は今、正体不明の敵と戦闘中、今のヘリは無防備ということになる。どうしよう……

「なのは、私がここに残って抑えるからヴィータと一瞬に！」

「フェイトちゃん？！」

ダメ！いくらフェイトちゃんでもこの数相手にリミッターかけたままなんて危険だよ！！

「コンビでも普通に空戦してたら時間がかかりすぎる。それに限定解除すれば広域殲滅で見分け落とせる」

「それは……そうだけど……」

それでも、一人残していけないよ……

「なんだか、嫌な予感がするんだ」

「でも……フェイトちゃん…」

『割り込み失礼！！』

にゃ？！はやてちゃん？！

『ロングアーチからライトニング１へ、その案も限定解除も部隊長権限で却下します』

あれ？

「はやて？！」

「はやてちゃん？なんで騎士装甲？」

はやてちゃんは戦闘には参加しない筈なのに、

『悪い予感は私も同じでな、クロノ君から限定解除の許可をもらった、空の掃除はわたしがやるで～、なのはちゃんはヘリに、フェイトちゃんはケント君の応援に行ってもらうで！』

な、なんかノリノリだね、はやてちゃん……

『書類仕事や頭硬い上司に向けて、たまりに溜まったこのストレス……ぶつけさせてもらうわーー！！』

それが本音なんだね、はやてちゃん……まっ、でも……

「行こう！フェイトちゃん！！」

「うん！なのは！」

出来れば、何も起きないで欲しいの

side　　クロノ

僕は今、ケントと［雷神］との戦いを聖王教会で見ている

「やはり、動き始めたのですね」

そうつぶやいたのは騎士カリム、［奴ら］の事を知る数少ない人間であり、聖王教会の権力者でもある

モニターに映るのは二人の戦闘、だが……

「なんなんだ、これは？」

［雷神］の周りを流れる電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気電気・・・・はっきり言って異常だ。

普通の魔導師では制御不可能な電撃をいとも簡単に操作する。

「［自然の力］をいとも簡単に操る魔導師か……」

ケントは大丈夫だと思うが自分も飛び出したくて仕方が無い、なんたって［親友］なのだから

「心配ないですよケント様なら」

カリムの言葉で冷静さを取り戻す。

今から行っても間に合わないんだ、それに［彼女］も現場に向かっている

「負けるなよ、［最強］」

僕は小さくつぶやいた

第２４話　機動六課のある休日　３（後書き）

ちなみにボルスはスカさんとは全くの無関係です。
Ｎｏ．６といってもセインはちゃんといます。

第２５話　機動六課のある休日　４（前書き）

今回が一番長いのではないか……

第２５話　機動六課のある休日　４

「一千万ボルトォォォォォ！！」

オッス！オラごｋ……調子乗りました、すみません。
残念ですけど俺には、か○はめ波なんて出来ませんしスーパーサ○ヤ人にもなれません。

＞馬鹿な事考えない！＜

「なぜばれたし……うおっ？！」

やっぱり強い……自分から［雷神］なんて厨二臭い事言ってたけど、実力は確かだな……
ノータイムでディバインバスター並みの雷撃砲撃とかあり得ねーだろ！！

side　3人称

「クソォ」

金髪の青年、ボルスはだんだんと苛立ちの声を出す。
彼の周りにはバチバチと電気がはしっており、少しでも触れたら感電し、動けなくなる。はっきり言って人間が避けれる様な動きはしておらず、不規則に動いている。
だがケントはいとも簡単にそれらをかいくぐる。

「やっぱり厄介な能力だな、［閃光］は」

ケントの希少能力……［閃光］、人間では反応出来ない高速の世界についてゆき、又、人間では介入不可能なスピードを持つ事が出来る能力

そのうちの一つ、［限界の反射神経］を使い雷を全て避ける。
ボルスが不意打ちで撃つ雷を固めてノータイムで撃ち出す砲撃もケントには当たらない
強力な能力な分、コストもあるのだがまだまだ大丈夫なんだろう、
さっきからボルスの攻撃パターンを観察している様にも見える。

ガッ！

「なっ！」

いきなりケントがボルスの前に現れ斬りつける。
だがボルスも紙一重で攻撃に反応してデバイスで受け止める

「あまい！！」

ケントの後ろに3つのスフィア

「ファイア！！」

「雷神壁！！」

ボルスの目の前に雷の滝の様なものが現れケントのスフィアとぶつかり爆発する
その爆発によって両者が見えなくなるが……

「ショットオンムーブ！！」

「六千万ボルトォォォォ！！」

魔力の斬撃と砲撃がぶつかり合い先ほどとは比べ物にならない程の爆発が起こる

ｓｉｄｅ　　ケント

あぶねーあぶねー
あんな砲撃くらったら死ぬよ、間違いなく死ぬよ
なんなのこいつ、常磐台の超電磁砲？それともワ〇ピースのエ〇ルさんだったりするわけ？！

＞つまんない事考えんな！＜

おっと、デバイスに怒られちまったぜ
それにしてもこいつ、強い……
さっきもよけながらチャンスを探して攻撃したけど反応できたとはな……
俺と同じなのがよくわかる。
それより［限界の反射神経］の使い過ぎで頭が痛い、脳に負担かけ過ぎたか……
さて……

「終わりにしますか！！！」

side　　3人称

現場から離れていない廃墟ビルの屋上に2人の影が見える。
2人とも青いボディースーツに身を纏い、上からマントを羽織っている
大きなお友達には泣いて嬉しがられる格好だろう

「ディエチちゃ～ん？ちゃんと見えてる～？」

どちらも茶髪だがメガネをかけた女性がもう一人に声をかける
もう一人、ディエチと呼ばれた女性は髪の後ろをリボンで結び、マントを風になびかせ、自分より大きな黒い［何か］を構えたまま、ある一点だけを見つづけている

「ああ、遮断物もないし空気も澄んでる……よく見える。」

ディエチが見続けている点、それはヘリ……

「でもいいのかクアットロ、撃っちゃって？ケースは残るだろうけどマテリアルの方は破壊しちゃう事になる」

ディエチがメガネの女性、クアットロに確認をとる

「フフフ、ドクターとウーノお姉様曰く、あのマテリアルが［当たり］、つまり［聖王の器］なら砲撃くらいで死んだりしないそうだから大丈夫、それよりも余計な邪魔が入る前に終わらせましょう」

クアットロはそう言ってケントが戦闘をしている方向を見る

「もともとはトーレお姉様に時間稼ぎをお願いするつもりだったのですけど……あのビリビリ、なんなのでしょう？」

「わからない、でもドクターは今頃、計画そっちのけで解析してるだろうね」

2人して苦い笑みを浮かべる。
スカリエッティは自分の分からない事が起きると周りが見えなくなる様な人間だ。
今頃はウーノ姉が苦労してるんだろうな～と2人してつぶやく

その時にそのウーノからの通信が来た

『クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様g「ウーノ！私はこの少年（ガチッ！！）ぐえっ！」ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「えっと……あ～あ、そういえば例のチビ騎士に捕まってましたね～」

後ろでスカリエッティがウーノに犬の様な鎖で繋がれていたのをとりあえず2人は無視した

「今はセインが様子を伺っているけど……」

「フォローします？」

『ええ、お願い』

2人は自分の製作者の性格にため息をつきながら支持を送った

side　ケント

「チィ！」

「くそっ！」

スフィアを展開してボルスに向かって飛ばすが彼は雷で全て相殺する……くそっ！

相手も肩で息をしてるし俺も頭痛や空気抵抗での体の痛みとかで結構やばいぞ

だけど……この勝負、勝った！！

「五千万」

行くなら……

「ボルトォォォォ！！」

今！！

俺はボルスの砲撃のスレスレの所を［超速移動］によって間合いを詰める。

やっぱり使い過ぎたせいで体中がいてぇ

「なっ！？」

驚いてる驚いてる……

「てめえは大技を使った後、必ず1秒間何も出来ない時間がある」

おそらくは［充電時間］かなんかだろう。

こいつにとってはたった1秒なんだろうけど……

「クソォォォォォ！！」

俺にとっては［1秒も］なんだよ！

「ショットオンムーブ！！」

ボルスを斬撃が飲み込んだ……

ｓｉｄｅ　　３人称

「ハァハァ」

ケントが肩で息をする。目の前には煙が立ち込めている

「やっぱり使い過ぎはきつい「ケント！！」フェイトさん？」

ガジェットの殲滅に当たっていたフェイトが近づく

「……やったの？」

「わかりませんよ、結構タフな奴でしたから……なのはさんは？」

「なのはならヘリの方に向かったよ」

ケントはよかったと内心安堵する。

突然の攻撃を防いだとはいえヘリはノーガードだったのだから

「非殺……傷？？」

煙の中から聞こえた声にケントは信じられないような顔をし、フェイトはバルディッシュを構える

そこにいたのはボロボロになったバリアジャケットをまとったボルス……彼は信じられない物を見たように自分の斬られた所を見る……

「そこまであまくなったのか？兄さんは？」

「お前を殺す理由なんてねーだろ」

ケントは再びシーザーを構え直す

「兄さんや俺はは選ばれたんだ、神によって……なのに……なんで？」

「兄さん？」

フェイトボルスの［兄さん］という言葉に反応してケントに問うが、ケントは答えない……

「……もういいや、兄さんはそっちにつくんだね。だからもう敵」

ボルスの目が本気になる、その目を見てフェイトは硬直する…あれは……

人殺しの目

多くの犯罪者を見てきたので直感でわかる。
あの子はやりかねない、本気で殺しにくる……と

「みんな信じてたのに、［カナ］だって……だけどもうあんたは、昔の兄さんじゃない、もう俺たちとは違う……」

ボルスの周りに信じられないほどの雷が渦をまく、そして一つに固まる

「さあ、死んで……兄さん」

「三億ボルト　　雷竜」

雷の竜が、そこにいた

ｓｉｄｅ　　機動六課

機動六課管制室に、けたたましいサイレンが鳴り響く

「市街地に二つのエネルギー反応！！……なにこれ？どっちも大きい！！」

「うそ……そんな！？」

巨体すぎるエネルギーが同時に二つ、管制室は驚愕する

「片方の砲撃チャージ確認！！」

「物理破壊型、推定Ｓランク！！」

「もう一つは！」

この場を任されているグリフィスが声を荒げる
そしてモニターに映った物をみてまた驚愕する

「なんなんだ……これは……」

「竜……でしょうか…」

人など簡単に飲み込んでしまいそうな大きさの雷竜……それをケントとフェイトの二人で相手をしている

「なっ！こちら側も推定ランクＳ！！」

「なんだと？！」

おそらく砲撃の方はヘリの方を狙っている、だが雷竜をリミッターをつけている隊長二人で相手する事も出来ない……だが、まだなのはさんが……

「うそ……でしょ……」

「どうした」

いきなり震え出したロングアーチの女性に、グリフィスが確認中を

とる

「スターズ1の反応……ロストしました」

管制室がかたまった

side　ケント

バチバチバチバチバチバチ！！

「くぅ！」

「ケント！！」

雷竜の攻撃をシールドで抑える、おもてぇ

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

フェイトさんがボルス本体にザンバーフォームで斬りかかるが雷竜に邪魔されて近づく事が出来ない
それに俺は閃光を使い過ぎたせいでろくに動けていない、体は動かねーわ頭がガンガンして意識飛びそうだ

「そうそう、兄さんにいい事教えてやるよ」

突然ボルスが口を開く

「兄さんに会いにくる途中ね、全身青タイツの女の人を2人みたんだよ。なんだったのかな～」

ボルスはさも楽しそうに話すがケントは頭に？マークをあげている

「そのうち一人がなんか大っきい袋もってたんだよ、いや～、なんだったんだろ～」

何か嫌な予感がする……ケントは直感で感じ取る「こんな所にいる場合ではない」と

「あれってもしかして、

魔力砲じゃないかな～」

ケントは飛び出す！
だが雷竜が先にゆくのを拒む

『砲撃のチャージ確認！！』

ロングアーチから聴こえてくる声、フェイトも理解して離脱しようとするが……出来ない、

「邪魔するなぁぁぁぁぁ！！」

ケントの雄叫びの様な叫び声をあげる、そして……

遠くで爆発音がした……

「ハハ、ヘリ爆発しちゃったね～、残念残念」

「きさまぁぁぁぁぁ！！」

フェイトがボルスを睨みつけるがボルスは平喘とした顔で言い返す

「したのは俺の仲間じゃない、部外者だ。勝手に罪をなすりつけないでほしいな～」

笑が止まらないらしい、ボルスは必死に口元を隠している

「結局は誰も救えないんだよ！仲間も、自分自身も！！なぁ、兄さん！」

だがその時、

ケントが小さく笑った

「なにが可笑しいんだよ」

フェイトも気持ちの整理が落ち着かないのか「えっ？」という顔になっている

ケントは静かに向き直る

「今回は俺達の勝ちだ、なぁ

クオン」

ヘリの煙が晴れるとそこには

三重に重ねられた魔方陣が展開していた。

第２５話　機動六課のある休日　４（後書き）

なんか神に選ばれたとかでてきましたがケントやボルスは転生者ではありません

あと　六億ボルト　雷竜　はぶっちゃけバオウ・ザ〇ルガです

第２６話　機動六課のある休日　５（前書き）

やっと休日編終了です。
長かった～

第２６話　機動六課のある休日　５

ｓｉｄｅ　３人称

「あら～～」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ、マジで？」

２人は驚きの声をあげるがクアットロはふざけた顔をしながらもヘリに施された防御魔法の解析を始める。

誰が見ても変なのだ、あの魔法は、

なぜならば……

術者がいない

これがクアットロが不思議に思った事だ
普通防御魔法と言う物は術者が手をかざし魔力をそこに形成する事で展開する魔法である
だが目の前に発動されている魔方陣では［術者がいない］のだ
そんな物は聞いた事がない

「見つけました」

不意にクアットロとディエチが振り向く、
そこに九本の尻尾がある銀髪女性が降り立った

「残念だったな、ヘリは無事だ」

ケントがボルスに向かって語りかける、ボルスは一瞬悔しそうなかおをしてからケントに再び向き直る

「勝った気でいるなよ、まだ終わってない……」

そう言い、ボルスは雷竜を一度、自分の元へ呼び寄せる。

その行動により、ヘリの方を見ていたフェイトも再び戦闘体制にはいる

「兄さんはもう［閃光］は使えないはずだ、俺に近づく事すら出来ないよ、雷竜がいる限り……」

「俺は能力ばっかに頼ってる様な奴じゃないんだよ。」

ケントは大口を叩いているが実際は満身創痍、立ってるだけで精一杯という状況だ、それに対しボルスは一撃必殺の威力を持つ雷竜、フェイトをいれたとしても明らかに不利だ

「それに援軍が来るまでもたせればいい事だ」

「だったら今殺す！！」

甲高い雄叫びをあげて雷竜が二人に突進する、それをフェイトは左右に上手くよけて突っ込もうとする、

だが……

ケントは見てしまった

フェイトの頭上から急降下してくる

もう一体の竜を

声を出す暇もない
コンマ一秒、それだけの時間がフェイトの命運を分けた
そして……

ガガガガガガガガガガ！！

雷竜がフェイトの場所を貫いた……

ｓｉｄｅ　　３人称

「見つけました」

サッと使い魔、クオンがディエチとクアットロの背後に降り立つ
それに気づきディエチは自分のＩＳ、［ヘビーバレル］をいつでも打てる様にクオンに瞬時に向ける

「さて、おとなしく投降してくだされば嬉しいのですが……」

「今は遠慮しておきます～」

クアットロは自分のＩＳ、［シルバーカーテン］を発動させて姿を消そうとするが、

「な？！」

「動けない？！」

動かないのだ、二人の腕が、足が、体が、

「不可視の拘束（インビジブルバインド）、あなた方の目を持ってしても見える事はないでしょう。
もう一度言います。

おとなしく投降してくだされば嬉しいのですが……」

「ぐぅ……」

二人共必死にバインドを破ろうとするが一向に破壊が出来ない。
クオンが終わりだと思い二人が近づくが……

「ハァァァァァァ！！」

「なっ！！」

クオンに紫色の閃光が衝突する

「トーレ姉（様）！！」

紫色の閃光、No．3トーレは腕についている羽の様な物を使いクオンに連続で斬りかかる、クオンも上手く小型のシールドを展開して攻撃を防ぐが、いきなりの不意打ちで集中が乱れたせいか、ディエチとクアットロにかかっていたバインドが……外れた！

「ディエチ、クアットロ！！今すぐここから離れろ！私が時間をかせぐ！！」

「わかった！」

「わかりました～」

二人はビルの屋上から飛び降りて撤退するが、

「逃がさない！！」

ガチガチガチガチガチガチガチガチガチガチガチガチ！！

二人が通った場所に現れる
バインド

「「「「なっ！！」」」」

ディエチとクアットロのすぐ後ろで連続して純白のバインドが発動される
二人は必死に距離をとるがバインドは追いかけるように瞬時に発動されていく
おそらくトーレが攻撃を止めたら一瞬でバインドの餌食となるだろう……
だがその分クオンは右手をバインド生成、左手をトーレからの防御に使っている、片手になった分だけ…

「スキだらけだ！はぁぁぁ！！」

「がはっ！」

トーレの蹴りがクオンの腹にはいる、それによってクオンが一瞬よ

ろけたスキにトーレは戦線を離脱する

「クアットロ、ディエチ、直ぐにここから離れる！掴まれ！」

「だから逃がさないと言ってるでしょう！！」

二人がトーレに掴まる

だがクオンのかざした手からはヘリの時のような三つ、一定間隔で重ねられた魔方陣が……

「三重魔法壁　　［滅波］！！」

「ハァァァァァァ！！」

魔法陣から竜巻のような風が放たれる、だが……

「……逃げられたか。」

そこに三人の戦闘機人の姿はなく

あるのは竜巻によってえぐられた地面だけだった

二匹の竜が空を舞っている。
それを従えているのは金髪の青年
その戦闘はまっすぐに正面を向いてつぶやく

「オイオイまじかよ」

彼が想像していたのは感電死した女性の遺体だった
だが煙が晴れて見てみると、

真っ黒な翼が女性を覆っていたのだ
天使の翼が黒く塗られている……例えるならば［堕天使］

彼……ボルスはこの翼の事を知っている
だからこそ悟った

勝てない　　と……

side　フェイト

私はさっき本当に感じた

［死ぬ］　　と

体は動かなかった、今からだと無駄だと本能で感じたから
だから私は目を閉じた

だけど感じたのは痛みではなく、

優しく抱きしめられる感覚だった

ｓｉｄｅ　　３人称

バサッと音をたてて翼が開かれる
そこには怒りをあらわにしたケントと雷竜が直撃したはずのフェイト

「もう許してもらえるとおもうなよ」

さっきよりひとまわり低いトーンでボルスにむかって話しかける
ボルスは恐怖半分悔しさ半分という顔をしており、再び二匹の雷竜
をぶつけようとするが……

「遅いよ、お前」

ボルスの目の前にケントがいた

ダンッ！！

「か…はっ！」

ケントの拳がボルスの腹につきささりボールのようにボルスの体は
投げ飛ばされる
そしてシーザーに集まるバカみたいな魔力……

「大丈夫だ……ちゃんと非殺傷にしてある」

「クッソォォォォォォォォォォ！！」

ボルスが二匹の竜を盾にする、だが……

「消え去れ、ダークライトブレイカー……」

白と黒の光が、天を埋め尽くす……

「ケント？」

我に帰ったフェイトがケントに近づく、若干声が震えており、少し恐怖しているのがわかる

「この翼って……」

ケントから生える翼、最初ははやてと同じ、魔力で出来ている物だと思っていたフェイトだったが、よくよく見てみると本物、つまり異常なのだ

「初めて見たわ、［カナ］以外の翼を」

フェイトが驚いて声がした方向を振り向く、
明らかにボルスとは違う声、第3者……

煙が晴れる、そこには一人の女性、
黒髪で黒目というフェイトが昔いた［日本人］によくいそうな特徴、
年齢は……二十歳中盤くらいだろうか、十人いれば十人とも「美しい！」と叫ぶほどに〝お姉さん〟というオーラを全身からだしている
そして彼女が担いでいるもの……右肩にはボロボロになったボルス、
そして左肩には……

「なのは！！」

反応がロストしていた管理局のエースオブエース、高町なのは
目立った外傷はないが気絶している。

「お前……俺に殺されたいのか？」

ドスの聞いた声でケントが口を開く、殺気をだだ漏れしてるためフェイトも少し震えた

「大丈夫、心配しなくてもこの子は返すわ、その代わりボルスはこっちで預からせてもらうわよ、簡単にいえば取引ね」

「俺がそんな取引に応じるとでも？」

「あら？悪い取引じゃないと思うけど？私だって［今の］貴方とは戦いたく無いし、貴方だってそろそろきついでしょ？完全な［覚醒］はしてないんだから」

「……。」

「図星ね」

クスッと彼女は笑う、大人の笑みというものだろう。ここに大きなお友達がいたら何人かは鼻血ながして倒れてるだろう

「奴に伝えとけ……」

「？？」

「一年後、必ずお前を捕まえる……そう伝えろ」

「フフ、わかったわ。一年後、楽しみにしてる」
彼女はもう一度小さく笑ってなのはを放り投げる。
それを上手くフェイトがキャッチする
「……約束は約束だ……手を出すなよ、フェイト」
「でもケント！」
「あいつはちゃんとなのはをこっちに渡した、こっちが約束破ったらどちらが正しいかわからなくなる」
「……わかった」
フェイトは少し不満げだが何とか押しとどまる
「じゃあ帰るわ」
「お前、名前は？」
ケントが思い出した様に彼女に尋ねる
「Ｎｏ．２　［ファンタジア］よ、長い付き合いになりそうね、王子様」
そう言い残し、彼女…ファンタジアはボルスと共に転移魔法で消えた……

そして、ケントの翼が光の粒子になって消える。

「フェイト……さん。」

「？」

「あとは……お願いします……」

そう言って、ケントは倒れた

side　スカリエッティラボ

「ウーノ姉、ドクターに報告は……」

「もう私じゃ抑え切れないわ……収まるまでやすんでていいわよ」

セインの問いかけにウーノがげっそりした声で答える、相当苦労したんだろう

研究室から狂ったような声が聞こえてくる、はっきり言ってアジトのどこいいても聞こえてくるこで気味が悪い

作戦に参加したメンバーが散り散りになっていく中、トーレがウーノと飲む約束事をしたのは余談だ

side　　スカリエッティ

ああ面白い、ああ楽しい！！

シールド魔法の原理を根本からぶっ壊した使い魔、リンカーコアを自然のエネルギーに変換する青年、そして何より面白いのが！

飛天王状態のケント君

ああ楽しい！
この世界にはまだこんな可能性があるというのか！！

「くはははは！美しい、美しいぞ！！」

早速解析にはいるとしよう、こんなに笑ったのはいつ以来だ！

だが、

「自然エネルギーを持つ青年……あんなものをもし［造れる］としたら……いや、ないだろう。だいいち彼は死んでしまったし、こんなもの、無限の欲望を持つ私でも造れるかどうか怪しい……恐らくは突然変異だろう。ああ、彼が欲しい！研究したい！」

その日から一週間、スカリエッティは飲まず食わずで研究していたという……

第２６話　機動六課のある休日　５（後書き）

［クオン］はとらハに出てくる［久遠］ではなく、
森羅万象チョコの四代絶影クオンの姿をしてます、
なぜなら……作者が好きだからです！！

またケントやクオンの設定書きます。

オリキャラ設定（前書き）

ケントとクオンです。

オリキャラ設定

ケント・スカイ

魔導師ランク　ＳＳ＋

魔力量　Ｓ相当

魔力光　白と黒の混色　（白が主体で黒が混じってる感じ）

階級　？　（機動六課では二等空尉と名乗っている）

術式　ミッド主体ベルカ混合

出身　？

年齢　１９歳

身長　１６４ｃｍ

体重　５１ｋｇ

希少能力１　閃光

希少能力２　飛天王状態

好きなもの（事）　甘い物・読書・空を眺める・ラーメン　ｅｔｃ

嫌いなもの（事）　　心霊系全般・デスクワーク　　ｅｔｃ

黒髪に青い目をした青年、顔は整っており背が高いと［かっこいい］なのだろうが残念ながら低いため［かわいい］と認識される事が多い。
ケントの過去を知っているのは親友である　　［クロノ・ハラオウン］　　聖王教会騎士で少将である［カリム・グラシア］
そしてかの三提督　　［レオーネ・フィルス］　　［ラルゴ・キール］　　［ミゼットクローベル］など
アグスタの時に対峙した女性［カナ］とは面識があるがその仲間である［ボルス］や［ファンタジア］とは面識がない
フェイトの好意には薄々気づいているが自分にはそんな資格はないと言って距離をとる。
また、自分を［化物］や［怪物］と言う時もしばしば……
基本的に優しい性格であり誰からでも好かれるが、女性陣などからの目が身長の事があって、子供を見る目になって来ている事が最近の悩み
謎の王、飛天王の血を引き継いでいる

クオン

魔導師ランク　ＡＡＡ＋
魔力量　ＡＡＡ
魔力光　純白
階級　二等空尉
術式　ミッド式
出身　本人にもわからない
年齢　本人にもわからない
好きなもの（事）　油揚げ　きつねうどん　きつね
そば　いなり寿司　ケントの役に立つ事
嫌いなもの（事）　違法研究者　マッドサイエンティスト　ケントの敵

容姿は森羅万象チョコの四代絶影クオン　（作者が好きだから）
ケントの使い魔
冷静な性格で大人しい、ケントを尊敬、敬愛しており彼の右手となって働く
バインドやシールド、幻術など、補助系のスペシャリスト、シールドは耐久ランクＳＳとかなりの実力者だがその分、攻撃魔法のランクはＣである

クオンが使う遠距離で発動するプロテクションはクオンにしか出来ない、彼女曰く「なんか出来た」らしい……
またシールドを他の場所に何個も展開させたり、バインドを瞬時に発動させたりといろいろと常識外れ
昔尻尾が九本と珍しい狐という事から違法研究所で捕まり、毎日地獄の様な日々をおくっていた
ケントがその違法研究所を破壊しクオンを発見、衰弱して死んでしまったところをケントが使い魔にした

第27話　予言

一人の少年がいる、手には刀、

シャッ、ビチュッ、

血がとぶ、

シャッ、グチャ、

肉がとぶ、

何人かがまとめてかかる、

シャシャシャシャシャ……グチャグチャグチャグチャグチャグチャ、

腕がとぶ、足がとぶ、頭がとぶ、

何人かは絶叫しながら、何人かは何も言わず、否、何も言えずに冷たくなる

少年は虚空を見上げて小さくつぶやく

「いつになったら自由になれるの？」

少年の目は色あせたまま……

求めるように自由を欲する。

side　ケント

「ん……」

目を開ける、見えるのは白い天井。
知らない天井じゃないな、明らかに六課の医務室の天井だろう、さて、王道を封じられた俺は第一声になんと言えば良いのか……

＞あら？お目覚め？ダメマスター？＜

「？が多いぞダメデバイス」

＞フフ、よかったわ目を覚まして、あと、そろそろくるわよ……＜

「覚悟はできてるよ」

未覚醒状態で飛天王になったからな……その代償は……

「ぐっ……ぎっ……がはっ！」

目覚めた後の激痛……

「ぐあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！ああ、がふっ！あ……あ……」

やばい、身体中の細胞が、骨が痛む！！

「はあはあ……ぐっ！ギギギ、ガアァァァァァ！！」

内蔵をぐちゃぐちゃきかき混ぜられるような痛み、脳を潰されるような頭痛……骨を一本一本折られるような感触、目を潰されるような激痛……

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「はっ、はあはあ……ようやく…おさまったか……」

どのくらい耐えていただろうか……いつのまにか身体中汗だくでベッドからも落ちている。

シーザーに結界をはってもらっているので外に声が漏れる心配はない。

＞お疲れ様……＜

「ありがと……よ、すまないな、こんな……酷い姿で……」

＞本当にそれを見てると生きた心地がしないわよ＜

「俺もこんな激痛くらってなんで生きてるか不思議だよ……」

あれだけ痛かったのに終われば何事も無かったかのようにぱたっと痛みがなくなる。なのでもう立つことも出来るし普通に喋れる。

「誰か呼んだらまたごっちゃになるからな……簡潔にあの後の事を頼む」

シーザーから俺の倒れた後の事を聞く…

なんでも目的であるレリックの回収は達成したのだそうだ。やるな、ＦＷ陣。

ヘリを狙った相手の逮捕はクオンが失敗したらしい、そのクオンはというとどこかに消えたとか……多分クロノの所だろう。

負傷者は俺ぐらいでなのはさんは一時間くらい目が覚めたらしい、あとはほぼ軽傷、俺も目立った傷はなかった為に病院ではなく六課だそうだ。

あと保護した幼女は無事に目を覚まして名前はヴィヴィオというんだと……

最後に俺は二日寝てた事

「それにしでもクオンが失敗だなんて珍しい…」

＞結構凹んでたわよ～＜

「マジで？」

＞マジで＜

あいつ結構溜め込みやすいからな～、少し慰めにいかないと

「にゃ！ケント君目が覚めたの？！」

「Ｇｏｏｄ　Ｍｏｒｎｉｎｇ　なのはさん」

「ケント君！今は朝じゃないよ、お昼だよ！」

べつによいではないか

「今シャマル先生呼んでくるから！動いちゃ駄目だよ！」

へ～い、と軽く返事をしてからシーザーを手に取る、さて……

「ケントー！！」

「＞プロテクション＜」

「へぶしっ！！」

黄色のミサイルを撃墜する事に成功！

ミッションコンプリートだぜ

「イタタ、なんて事するの」

「飛び込みはやめて下さい、流石に痛いんですから」

アグスタの時はたましい半分抜けましたもん

「もう大丈夫？ケント君」

「あっ、いたんですかシャマル先生」

「扱いが酷い！」

気のせいですよ気のせい……

それから少し診察した後、特に異常がなかったのでそのまま退院しました

ｓｉｄｅ　　子だぬ……ゴホンゴホンはやて

「頭がいたい」

二日前の事件は結果を見るとこっちの勝ちや、でも正体不明の敵やら狐ちゃんやら問題が多いんちゃうか

それになのはちゃんは撃墜された時の記憶が無いらしくて…あの女の能力も謎やし……

まあそうなんやけど！

「フフフ、やっと会えるで～、クロノ君、そしてカリム……」

そう！ついに、ついにこの問題を解決してくれる救世主！クロノ君とカリムに会えるんや！

ん？全体通信、なのはちゃんから？

ｓｉｄｅ　　ケント

「はぁ～、食った食った～」

「よく食べれたね、ラーメンばっかり……」

今はちょうど昼飯の時間、なので食堂に行って来ました～、醤油ラーメン味噌ラーメン、豚骨ラーメン塩ラーメンと四種類全て完食したぜ～、二日間も食べてなかったら以外と入るもんなんだなと、廊下を歩いていると……

「やだぁぁぁぁぁ！いっちゃやだぁぁぁぁぁ！」

……だれですか？

ドアの向こうから幼女の声、六課にキャロ以外の幼女なんていたか？それとも誰かが誘拐して来たか？

「ああごめんね、お願いだからなかないで～」

ドアの向こうからなのはさんの声……誘拐犯はなのはさんですか……

「フェイトちゃんやないか、ケント君も大丈夫やったか～」

「お久しぶりですはやてさん、大変ですよ、なのはさんが誘拐犯になってしまいました～」

「な、なのははそんなことしてないよ！」

ジョークですよジョーク、

だいたい誰なのかわかります。

「あっ！八神部隊長にフェイト隊長、それにケントさん！いつ目が覚めたのですか？！」

「お～ティアナか～久しぶりだな～それにチビッコも」

なんだ？ＦＷ陣に隊長陣だなんて、

「なのはちゃんからＳＯＳもらってな～、面白そうやから来たんや～」

助けにきたのではなく面白そうだから来たと……

はやてさんがドアをノックして開ける

「み、みんな！来てくれたんd「びえええええええん」泣かないで～」

見るとなのはさんのスカートに金髪幼女がしっかりと掴まっている。引き離すのムリじゃね

あとヴァイス、どこから現れたかは知らんが写真撮るのやめろ、ん？ネットで売れば高くつく？なら俺も……

「ケント君　（怒）」

……やめておこう、命の方が大事です。

後、金髪幼女、もといヴィヴィオはフェイトさんが上手くなだめました、

ヴァイスは今度なのはさんと一緒に特別メニューをさせられるらしい……ドンマイ

そこまではよかったんだが……　ヴァイス「よくねーよ！！」

「じゃあヴィヴィオの子守はケント君、お願いな」

「ちょ～と待って下さい」

「なんや？」

「なぜ俺が？」

「ケント君、あんたが寝とった時に私たちは……山の様な書類を手分けして終わらせたねん……やりたいか？」

「サー、いえ、私はヴィヴィオの子守に専念したいです、サー」
「よろしい、じゃあ私やなのは隊長、フェイト隊長はちょっと出かけてくるから、エリオとキャロはケント隊長と一緒におったってな～」
「「わかりました」」
「ほな行ってくるな～」
「ヴィヴィオ、いい子でいるんだよ」
「……うん、」
しっかりとお母さんキャラが定着してますね、なのはさん
まあそれはおいといて……
（ティアナティアナ……）
（は、はい、なんでしょうか？）
（念話でわるいな、なのは隊長達ってどこに行くんだ？）
（えっと、聖王教会に、確かクロノ・ハラオウン提督とカリム・グラシア少将に面会する、だったと思います。）
（ん、ありがとな）
クロノとカリムね～、ふ～ん、だから俺に子守を、ふ～ん

（ねぇキャロ、ケントさんが怖いよ）

（なるべく近づかない様にしよ、エリオ君）

チビッコが念話でこんな事を話していたのは余談である。

side　3人称

「じゃあ、クロノ君久しぶり」

「お兄ちゃん、元気だった？」

聖王教会のとある一室、そこに機動六課の隊長三人とその後見人であるクロノ・ハラオウン、カリム・グラシアが集まっている。

「それはもうよせ、お互い、いい年だぞ……」

「兄弟関係に年齢は関係ないよ、クロノ」

クロノは一度否定したが言い返せなくなったので満更でもなさそうである。

少しはやてが笑ながらジト目でクロノを見つめるが軽い咳払いを一度して場を変える

「さて、おとといについてのまとめと改めた機動六課設立の表裏について、それから今後についてと…」

はやては一度目を閉じてからクロノとカリムに向き合う

「謎の襲撃者についてや」

五人のいる場所にカーテンが閉じ、他とは切り離されたような空間になる、空気も少し重くなり、いきなりだと少しばかり恐怖心もい

だいてしまう。
そんな中、クロノが重々しく口を開いた、
「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア［レリック］の対策と、独立性の高い少数部体の実験例」
そう言ってクロノは何もない空間にモニターを展開させる
「みんな知ってるとおり、六課の後見人は僕と騎士カリム、そして僕とフェイトの母であり上司、リンディ・ハラオウンだ。」
そう言うとモニターが消え、また新たなモニターが現れる、そこには三人の老人が映し出される
「それに加えて非公認ではあるが、かの三提督も設立を認め、協力してくれている」
これにはなのは、フェイトは驚き、目を見開く
それを見てカリムは口を開く
「それは、私の能力と関係があります」
そう言うと椅子から立ち上がりくくられた紙の束を持ってくる
カリムがそれに触れると紙の束は光だし宙に浮いた
「私の能力、［予言の著者］、これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で表した予言書を作成することができます」
そのままカリムは自分の能力について話し始める、月の魔力が必要なこと、年に一度しか使えないこと、そして…

旧き結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる

「それって」

「まさか」

予言を聞き、なのはとフェイトは何かを感じたかのようにカリムに問う、そして……

「そう、ロストロギアをきっかけで始まる、管理局地上本部の壊滅と管理局システムの崩壊」

二人が息を飲む

「情報源が不確定と言うこともありますが、管理局崩壊ということ自体が、現状ではありえない話ですから」

カリム自身、この予言の危険性と信憑性を鑑みて、現状の管理局システムの強固さや高い完成度が崩壊するとは考えにくい思っている

「そもそも、地上本部がテロやクーデターにあったとして、それがきっかけで本局まで崩壊・・・いうんは考えづらいしな・・・」

はやても予言には実質半信半疑という考えだ、今のところ管理局に脅威となるような組織は見つかっていない

「まあ、本局でも警戒強化はしてるんだがな・・・」

クロノが難しい顔をして腕を組む。

「問題は、地上本部なんです」

レジアス中将は予言を信用しておらず、対策はとらないらしい

「異なる組織同士が協力し合うのは難しい事です」

「協力の申請も内政干渉や強制介入という言葉に言い換えられれば、即座に諍いの種になる」

「ただでさえ、ミッド地上本部の武力や発言力の強さは問題視されてるしな」

「だから、表立っての主力投入はできない、と？」

「・・・すまないな。政治的な話は現場には関係なしとしたいんだが・・・・」

クロノは少し悔しそうにつぶやく

「裏技気味でも、地上で自由に動ける部隊が必要やった。
レリック事件だけでコトが済めば良し、大きな事態に繋がっていく様やったら最前線で事態の推移を見守って……」

「地上本部が本腰を入れ始めるか、本局と教会の主力投入まで、前線で頑張ると？」

「それが六課や」

はやての言葉になのは、フェイトも同意する
そしてまたクロノが唐突にびっくりする事を言い出した

「その六課なんだが……」

「？」

「試験期間が変わった……」

「なっ！なんやて？！」

「嘘！！」

「そんな……」

これには三人とも驚き声をあげる、確かに六課はいろいろと突っ込

みどころ満載の部隊だが試験期間を短くするような問題はまだ出していないはずだ、

「お、落ち着け」

「落ち着いてなんかいられへんわ！まだ何も問題起こしてないで！！訓練場は壊しまくりやけど！」

「それもいろいろと問題じゃないのかしら……」

カリムが少し苦笑する

「そうじゃない！逆だ逆！！」

「ぎゃ、逆？」

はやてが鳩に豆鉄砲くらったかのような顔をする、クロノは一度咳払いをしてから改めて話し始める

「試験期間が二年間になったんだ」

「でもどうして？」

「なのは達が聞きたがっていた事に関係ある」

三人が聞きたがっていた事……ケント、

「彼は、一体何者なんや」

はやてが単刀直入に聞いて行く

今回の襲撃者との関係や突然現れた翼……
前に問いただした時は暴走してしまった為に今回はムリに聞かなかった、その代わりここ、聖王教会へクロノ、カリムに問いただしに来たのだ、
予想外な事に彼が今日、目を覚ました為に成り行きでヴィヴィオの世話を任せた、教会に行くなんて言ってしまったらなにしに行くかなんてわかるだろう
クロノが少し目を閉じて口を開く

「すまない、それには答えられない」

「なっ？！なんでや！」

はやてが机を叩きクロノに詰め寄る、フェイトやなのはも教えてくれない事に驚いている

「六課にはレリックの事件が終わった後、今回の襲撃者達の逮捕に六課は動いてもらう」

「納得がいかへん！」

「ケントは！！」

クロノが大声で叫びはやても思わず体を震わせる、クロノは常に冷静であり、感情をぶつける事などほとんどない、そんな彼がいきなり大声を出したのだ。実の家族であるフェイトは目を一段と見開いている

「この事件が終わった後、［自分から］話すつもりでいる。そしてそのせいでみんなに新たな危険を作ってしまう自分を悔いている」

ぽつぽつとクロノは話す

「襲撃者達はこの事件中ではこれ以上大きな動きは見せないだろう、だが早くて半年後、最長でも一年後には動き出す事はわかっている。その時ケントは自分の命さえ賭ける決意さえしている……だから、お願いだ。」

そう言ってクロノは

頭を下げた

「彼を……助けてやってくれ」

二人きりの部屋、一人はクロノ、一人はカリム、
はやてやフェイトは、自分の過去を話すのがどれほど勇気がいるのかを知っている、彼が自分から話す気なら気長にまとうという結論になり、一通り提供できる範囲の情報を渡した後、帰っていった

「クロノ提督が頭を下げるなんて、珍しい所を見れました」

「よして下さいカリム」

さっきの行動を少し後悔しているのか、クロノはため息をつきカリムはクスクスと笑っている

「全く……そろそろでて来たらどうだ、クオン」

クロノが後ろに向かって話しかけるとその空間が歪み、クオンが現れる。
その光景を見てカリムは目を白黒させて驚く

「いつから気がついてましたか？」
「最初からさ、クラウディアからお前が消えたと報告があったからね。
ケントに頼まれたか」
「……ありがとうございました」
「何がだ？」
「ケント様の覚悟、理解していただいて」
「思い出させないでくれ」
クロノは苦笑して顔を歪める、
「彼は話さなくてはなりませんね……予言の続きも含めて……」
カリムがそう言って先ほどの予言書を取り出す
この予言には続きがある……

伝えられしは王の罪　　裁かれしは神の歌

裏の世界で生きる　　悪魔達は歌いだす

表と裏が交わりし時

忘却の都　　現れん

第２７．５話　　番外編　幼女ほど怖いものはない（前書き）

第２７話のすぐ後です
暇潰しに書いたので今までで一番短く物語に何の関係もありません。

第27．5話　番外編　幼女ほど怖いものはない

「ぶつぶつぶつ

てくれましたし」

そう言って足下を見るとすやすや眠っている二人、それを見てフェイトさんはまた微笑む

「気持ち良さそう……」

「日頃の訓練の疲れがでたんでしょう。今日は寝かしてあげて下さい」

年が近いだけあって二人共よくやってくれた、それに二人共今日は少し子供に戻ったようでイキイキとしてた、この二人精神年齢結構高いんだよな

「ほらヴィヴィオ、ケント君に「ありがとう」ってお礼しよ」

なのはさんがヴィヴィオに話しかける、べつにいいんだが、お礼なんて、こっちも楽しかったし……

トコトコとこっちにヴィヴィオが歩いてくる

俺の目の前で止まると小さくお辞儀をすると……

「ありがとう！ケントお兄ちゃん！」

「おう！また遊ぼうな」

「うん！」

だがその時、

なのはさんが病んだ

病む寸前のなのはさんの発言

「ケント君はお兄さん……私はママ…あれ？なんで？私達って同じ年よね？私ってそんな老けてるのかな？あれ？なんで？さっきまではママで嬉しかったのに、あれ？あれ？あはは、あはははは」

ちなみケントお兄ちゃんと呼ぶのは一緒に遊んでたらそう呼ばれる様になっただけである

そんな感じで病んだ、すっごく病んだ、だがそれからも問題だった……

「だ、大丈夫やで、なのはちゃんはまだピチピチやで」

はやてさんがフォローにはいる

ちなみにはじめに言っておくとはやてさんはまだヴィヴィオにちゃんとした自己紹介はしていない、書類にうもれていて出来なかった

らしい、そのせいで……

「あーーー！！」

「なんや～ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオが妙にキラキラした目ではやてさんを見て言い放った

「たぬきさんだーー！！」

目の前の金幼女はまだ［ギャグ］というものを知らない心が真っさらの純粋な少女……

そんな子からマジの

［たぬきさん］宣言をされてしまったのだ

そしてはやてさんは……

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！」

泣いた……盛大に…そして走った、部隊長室に……そして隔離した、全ての通信を、入口のドアをロックして……

その光景を見て不思議に思ったのかヴィヴィオがシャマル先生に向き合い質問した

「ねえねえ、」

「えっと……どうしたのヴィヴィオ？」

守護騎士達は自己紹介を終えていたりする……

「どうしてたぬきさんはどっか行っちゃったの

シャマルおばちゃん」

それを聞いた途端シャマルおば……先生も泣いた。…そして医務室を占拠、隔離した

俺はこの時確信する

魔王よりたち悪い……と…

余談だが、病んでるなのはさんをカメラで撮ろうとしたヴァイスはピンク色の光によって星になりました

第２８話　模擬戦！　ＶＳシグナム！！（前書き）

なんか今までと違って少し変になりました

第２８話　模擬戦！　ＶＳシグナム！！

「シグナムさん……やめにしませんか、こんな事……」

「約束は約束だ、それを破るなど騎士道に反するぞ」

よく間違えられるけど俺って魔導師なんだよね……騎士じゃないんだ、騎士道じゃなくてどっちかっていうと魔道？なんかなのはさんみたいになった……

あっ、こんにちは、ケントです。

ヴィヴィオが保護されてから少し経った、はやてさんやなのはさんは次の日にはなんとか立ち直ったけどシャマルおば……先生はひどかったな～、三日間くらい引きこもって最後は守護騎士全員で医務室に突入して取り押さえた。

なのはさんはなんとか［なのはお姉ちゃん　（笑）］にしようと頑張ってたけど結局駄目だったらしい、保護責任者はなのはさん、後見人はフェイトさんになった訳なんだが、フェイトさんも［ママ］と呼ばれて少しだけ病んだ、後から俺の事を［ケントパパ］にしようと頑張ってたけどこれまた無理だったそうだ。

訓練の方はスバルのお姉さん、ギンガが移動してきて模擬戦とかやった、実力はスバルより少し上ぐらいか？

まあ前置きはこの位にして今どうしているかというと……

「フッ、やっと剣を交える事が出来る」

「俺は刀なんですけどね～」

なんと！シグナムさんがとうとう収束を完成させたんだよ！まだ実戦段階ではないんだけど、［魔力を集める］事はほぼ完璧、これをどの様に工夫して、実戦で使える［技］にするかが今後の課題ん？飯を奢った時に完成したんじゃないかって？
あれはトラウマだな。食事が終わった後俺のライフは０だった。主にサイフの中が……
人って生命の危機をかんじたら何でも出来るらしい。シグナムさんは空腹で死にそうだったから今まで以上の力が出たんでだろう。あれからまた出来なくなった。

まあそんなこんなで完成した訳だが、あの約束、「収束が完成したら模擬戦をする」なんて言ってしまったからね～、今シグナムさんが向かい合ってる訳。
ほんと勘弁して欲しい、バトルマニアは……

「じゃあケント君は［閃光］のスピードが早くなるのはなしね～、それ以外はいつもの模擬戦と同じだから」

なにノリノリなんですかなのはさん……こらそこの青毛姉妹、目をキラキラさせない、あと、いつから現れたかは知らんがヴァイス、どさくさに紛れて賭博しない。おい！なにシグナムさんに賭けてんだよ、俺の応援しろよ。

「いくぞ！！」

「お手柔らかに……」

全く……［超速移動］が使えないとなるときついか……まあそれでも…

「勝ちに行く！！」
お互いの武器がぶつかり合う

ｓｉｄｅ　　なのは

「すごい」

思わず口から出てしまう。
私は魔導師になってからシグナムさん以上の剣の使い手をほとんど見た事が無い
それほどまでに彼女は強い
ケント君ははっきり言って［閃光］を注意すれば勝てると思ってた。
まあそれでも難しいんだけど……
私やはやてちゃんみたいな移動砲台はふところに入られるのが一番嫌いだからね……
でもケント君はそれだけじゃない……上手いんだ……刀さばきが……
シグナムさんは相手の攻撃を受け止めるタイプだけとケント君は［受け流す］そして隙を見つけて斬りかかる。みたいな感じ……かな

り……上手い

「あはは……負けちゃうかも」

味方にいたら何よりも安心だけど敵だったらと思ったらぞっとする。音の……三倍だったけ？最大スピードは……フェイトちゃんでも音速並みだから……反応できるかな～

あとなんだかこの模擬戦……不気味……

side　ケント

「ふはははははははははははは！！」

「ふはははははははははははははは！！」

うん！怖い！だぶん周りから見たら不気味だろーな、笑いながら斬り合ってるって……

さっきから硬直状態ですよ～、特に動きをみせない、まあ探り合いですかね。

受け流し斬りかかり受け止めれ斬りかかられ受け流し斬りかかりのループですよ、こっちから動きますか！

「おらっ！」

俺がシグナムさんに向かって蹴りを入れるがバックステップでよけられる、だけど俺の狙いは…

「ショットオンムーブ！！」

「クッ！紫電一閃！！」

俺の斬撃とシグナムさんの紫電一閃がぶつかり合い爆発する……

そして俺がそのまま突き！！

だが、

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「くっ！」

俺が突く前にシグナムさんのレバンティン（略してレバ剣）が刃が付いたムチのようになり俺に襲いかかる技、シュランゲバイセン……

一旦距離をとるが……

「はぁ！！」

「ちぃ！！」

シュランゲバイセン・アングリフ…多分そのまま……

「飛竜一閃！！」

ほら来たよ！シグナムさんが元々覚えてた砲撃級魔法！！

「シーザー！！」

＞わかってる＜

そして攻撃は直撃した……

ｓｉｄｅ　　シグナム

終わった……か……

だが強かった、現に紫電一閃の後私はシュランゲバイセンをしてなかったら相当な痛手だっただろう。

さらにケントは私に飛竜一閃まで使わした、あれを使ったのは久しぶりだな、それほどまでに気が抜けなかった、始めの撃ち合いの時も同じ力量、［閃光］を百パーセントで使われていたら……負けていたな、飛竜一閃も難なくよけてしまう。

「まだ終わってねーですよ」

「な?!」

ケント?!なぜ立っている?!

確かに飛竜一閃は直撃だったはずだ！

「不思議そうですね、答えはこれ」

ケントの右手には光り輝くシーザー、いつでもショットオンムーブが放てる状態、だが技どおしがぶつかり合った感じはしなかった……まさか！

「そう、俺の魔力をシーザーに込めて強化したんです。一時的にね」

「そんな事が……」

「行きますよ！」

「くっ！」

間合いを詰められるとっさにレバンティンで受け止めるが……

ガキィン！！

「なっ！！」

弾かれただと？！

「終わりです！」

「やらせるものか！」

０距離砲撃、これをくらったら負けだろう……だが！

「ショットオンムーブ！！」

「紫電一閃！！」

二つの技がぶつかり合い、爆発した

ｓｉｄｅ　　ケント

「いてぇ」

「私は楽しかったぞ、礼を言う」

あの爆発の後俺もシグナムさんも伸びちまって医務室で休んだ、結果は引き分け……勝ったと思ったんだが…

「それにしてもデバイスの強化とは……」

「フフフ、すごいだろ、一撃の威力も上がるんですよ。その代わり魔力消費が激しいけど……」

あれは常に魔力を送らないといけないからな～、はっきり言って諸刃の剣だ。

「私にも教えてほしいんだが……」

「いいですよ、魔力をデバイスに溜めるだけなんで収束よりは簡単です」

「そうか、あとなんだか、明日も模擬ｓ「却下です」なっ！なぜだ！」

「あれは試合ではなく半分［死合い］です。あんな勝負毎日なんてとてもじゃないですけど無理です」

「大丈夫だろうそれくら「教えませんよ、強化」……卑怯だぞ」

そんなこんなでシグナムさんが好敵手になりつつある俺でした……

ちなみにこのあとデバイスに魔力を溜める強化の練習でシグナムさんが失敗し、訓練場にちいさなクレーターができました

第２９話　公開意見陳述会（前書き）

展開が早すぎる……

なんでこんなのになってしまったんだろう……

力の無さにすみません　ｍ（＿＿）ｍ

第２９話　公開意見陣述会

「さて、明日から公開意見陣述会や」

公開意見陣述会、簡単に言えば地上本部で意見を言い合う会だと思ってくれ、ん？なんで省いたのかって？
作者がうる覚えだからだよ！ちゃんと原作見直して書き上がれってんだ！
おっと、メタ発言がでたな……原作？何の事かさっぱりなのだが、

「ちょっとケント君？聞いとるんか」

「ん？すみません、聞いてませんでした」

「そこは聞いてなくても聞いてましたって答えるべきやろ……」

なんか大変そうですね～、あまりストレス溜め込むと剥げますよ

「誰のせいや誰の」

さあ？誰でしょうか？

「はぁ全くもう、明日の１４時からの開会に備えて現場の警備はもう始まっとる。なのは隊長とヴィータ副隊長、リイン曹長とＦＷ陣はこれから出発、ナイトシフトで警備開始」

「みんなちゃんと仮眠とった？」

「「「「はい！」」」」

なのはさんからの問いにカラフルズは元気良く挨拶をする

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に集合入りする。それまでの間、よろしくな」

「「「「はい！」」」」

「はぁ……それとケント副隊長は……はぁ……」

かなり疲れた様子でこっちに声をかけてくる、まあ、当然か……

「クロノ君から［貸し出し］が来てるからちゃんと行くように、地上本部まではなのは隊長達とヘリでおくるわ、要人警護らしいからしっかりな」

スカリエッティは公開意見陣述会に動く可能性が高い、はやてさんも出せる戦力が減るのが惜しいんだろう。すみません……

「ほんなら、よろしく頼むで！！」

「「「「はい！」」」」

ロビーに元気な声が響き渡る……

「そんじゃ、よろしく頼む、ヴァイス」

「任して下さい旦那」

六課の屋上はヘリポートになっておりそこから毎度ヘリが出ている、なのはさんやＦＷ陣も集まってきてもうすぐ出発するだろう
あと今回は塩ラーメンをチョイスしてみた

「ほんとに旦那はそれ（ラーメン）好きですよね～」

「ラーメン食わないと力がでない、ヴァイス、新しいラーメンを……」

「ケンぱんマン、新しいラーメンよ！それ！……て、なにさせるんですか」

国民的ヒーローあ〇ぱんマン……
あいつって自分の顔ちぎって痛くないのか？

そんな会話を大人にもなってヴァイスと軽く語り合う、やっぱり男

の話し手はいい、エリオも一様男だけど……やっぱり年が近いだけあってヴァイスとは話が弾む、グリフィス？あいつはちょっと真面目すぎだ……

そこに金髪幼女、もといヴィヴィオがとてとてと近づいてくる、うん、可愛い、ロリじゃないよ、素直に子供として可愛いと思っただけだからな

ヘリの音でよく聞こえないが何やらなのはさんと話ている、いいよな、こういうのって、さて、場も和んだ事ですし、

「行くか、ヴァイス」

そして俺たちは地上本部へと向かった

side　はやて

「はぁ～」

何回目やろ、六課設立からため息がでたのは、それも約一名がほと

んどや、
そして約一名に課せられた要人警護の任務、はっきり言って絶対に違う、クロノ君からの任務やから余計や、大体ケント君の強さを多分一番知っているクロノ君が、今日見たいな日にわざわざケント君を指名するはずがない……

自分の前にモニターを展開する、そこには翼をまとったケント君……この前の事件の映像、
もう一度新たにモニターを展開する、ホテル・アグスタ、突然洗われて襲ってきた正体不明の彼女、そして彼女にも翼、
似ているのだ、なぜだかそう思う、形は全然違うのに雰囲気が……

「一体何者なんや、あんたは……」

月の光に照らされた部隊長室の中、八神はやてはもう一度ため息をついた

side　ケント

『であるからして、我ら地上の人間は……』

……長い、
ほんとに長い……
それさっきも聞いたよ、何度同じ事言えば気が済むんだよ、
えっと、誰だったっけ？地上本部の准将だったよな、なんかポ〇モンに出てくるサ〇キさんにそっくりなやつ、目つきとか凄い似てるよ、ほんとに

ん？俺か？俺は今、中だ
中と言ったら地上本部しかないよ、簡単に言えば俺も聞かないといけねーんだ

公開意見陣述会を！

全く、ほんとに面倒くさい、
こんなもん愚痴を言い合うだけじゃね～かよ
それだったら警備させろや

「ふぉっふぉ、不満そうじゃの、ケント」

「当たり前だ、俺が何でこんなもんに出席しなくちゃなんねーんだ」

「あなたがいなかったらそれこそ地上のお人が文句言ってきますよ」

くそっ……

ちなみに今俺は個室にいる、下には本局や地上でそれなりに地位がある奴が議員席見たいなところに座っている

あと個室といってもあと三人も同じ部屋にいるんだがな……

簡単にいうと老人会、威厳がある言い方でいうと三提督

「それに貴方がこの様にすぐ来てくれたところを見ると、何か企んでそうですし。」

はぁ、全くその通りだよ、だから年くってる奴は…

その時……

ズズズズズズン　　ガッ！　　ドカン！

「なんだ！」　「管制室と連絡を…」　「何がどうなってる！？」　「早く外部と連絡を」　「うわぁぁぁぁ！」

……来たか、

「んじゃ、行ってくるわ」

俺はシーザーを持って個室から出る、デバイス所持禁止？　んなもん知らねーよ

さて、少し頑張ってくれよ、機動六課、

side　ギンガ

「三重魔法壁［滅波］」

「がはっ！」

圧倒的　この言葉は今の状況に一番相応しいのじゃないかしら

「くっ！ＩＳ［ランブルデトネイター］」

「プロテクション」

ダンダンダンダン！！

戦闘機人が投げるナイフは唐突に現れた女性によって全て防がれる

「シールド」

彼女がそうつぶやくと戦闘機人の目の前にミッド式のシールドが現れる、

そして……

「バースト」

「がぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

シールドが爆発し、相手を吹っ飛ばす、

「凄い……」

私がかなり苦戦した相手を、こうもあっさりと……
そして彼女は相手をバインドで拘束する

「さて、この子は預けますので、処理はお願いします」

「まって！」

どこかに行こうとする彼女を押しとどめる、彼女は立ち止まって無表情のままこちらを向く

「名前はなんｄ「クオン」即答！！」

そう言って彼女は消えた

ｓｉｄｅ　３人称

カツカツ

誰もいない廊下を青年が歩く、おそらくは外の襲撃の対処で出っぱらってるのだろう

カツ、チン

見た目はふつうのエレベーター、それに乗り込み一番下のボタンを押す

『最下層・第４８会議室・第４９会議室でございます』

「シーザー……」

＞了解＜

青年は自分の相棒に頼んでエレベーターにハッキングをかける、するとエレベーターの扉が閉まり最下層より下へと進んで行く

チン

今度はアナウンスが流れる事は無い、扉が開くと真っ暗の部屋に三本の
発光する柱の様なものがある部屋に行き着く
そしてその柱、いや、柱の中にある物が喋り出す

彼らがごちゃごちゃ言っているが青年は聞く耳を持たずにデバイスをセットして告げる

「終わりにしましょう。腐りきった元・英雄達よ」

第３０話　移り変わっていく時代

『お、おぬし、どうやって？！』

「エレベーターにハッキングかけたんだよ結構頑丈だったな」

『こ、こんなところにくるくらいなら外の警備に行かぬか！！』

「俺はお前らに用があって来たんだよ、それぐらい察しろ」

どこからか聞こえてくる声にケントが答える、彼の目の前には発光する柱……いや……生体ポットの様な物の中に丸出しの脳がそれぞれ三つ浮いている

『なんの用だ！お前が今ここにいる事がどうゆう事かわかっておるのか！いや、それ以前にどうしてここがわかった！』

脳の内一つ、評議長と書かれた脳が声を張り上げる、それに対しケントはボリボリと頭をかく

「おいおい、こっちには超優秀な使い魔がいるんだ、てめぇらのいる所を調べるなんて簡単なんだよ」

『……クオンか……。』

クオンは後方支援のエキスパート、シーザーが行ったハッキングもクオンが組んだデータを使った

「それともう一つ質問したな、なぜ俺がこのタイミングで来たかっ

て事か、まあそれは簡単だ、いつもなら見張りや監視なんかもいるだろ？それが面倒だっただけ、あと［最高評議会］を抹殺した、なんて知られたら俺が犯罪者になるじゃん」

だがそれが言い終わらない内にどこからか現れた五人の人影がケントを囲む

「洗脳魔導師か、んなもんに二十四時間護衛させるなら外の警備に当たらせろよ」

『自分が今おかれている状況を理解できているのかな？こやつらは全員最低でもSランクはある。
いくらおぬしでm「すまん、もう終わった」なに！？』

そう言うと五人の洗脳魔導師はバタバタと倒れていく

『なっ！なにを！？』

「俺の力、知らない訳じゃないだろう。［反応］できないと俺にとってFランクもSSSランクも変わらない、そして俺のスピードに反応できるのはベテランの［直感］だな、そんな操り人形に直感があるなんて到底思えないんだが……」

自分が選んだえりすぐりの護衛、それが一瞬で倒された事に三つの脳、最高評議会は焦る。ケントが口にした［抹殺］という言葉、脳味噌だけになった彼らにそれを止めるすべは無い

『なぜ！なぜそんな事をしようとする！我らは人類の宝、我らを殺すという事が、人類にとってどれほどの損失か理解しているのか！！』

「んなもん知るか、平和平和って、お前らはどれほどの人間をその言葉で殺してきた」

『それくらいの犠牲は当然、次元世界の平和のためだ』

ケントはまた一つため息をつく

「お前らもういいよ、それそろ定年退職しろ」

『なにを言っておる！我らがいるからこそ今の時代があるのだぞ、その我らに向かって！』

「はっきり言ってお前らは今の時代の中で邪魔でしかない、お前らの言い方で言うと［平和のため］に死んでほしい」

『なっ！』

ケントがシーザーを構えると……ゆっくりと、ゆっくりと光始める

『おっ、おぬしは人を殺さないのではないのか！！』

「１００年以上も生き続け、体も思想も腐りきった奴らなんで人間でもなんでもないよ、最後に教えといてやる」

そう言って、シーザーを振りかざす

「時代は、移り変わっていくものだ」

暗い空間を、光がつつむ

「この世界のトップも、呆気ないものね」
女性の声、ケントは静かに振り返り、目の前の女性と向き合う
「今回は手を出さないんだろ、カナ」
ホテル・アグスタに現れた女性、［カナ］その彼女が、ここにいた
「もう、［お姉ちゃん］って呼んでくらたらいいのに」
そんな彼女を無視してケントは乗ってきたエレベーターに向かう、
「今回は負けらしいよ、地上本部かなりやばいよ～」
「……そうか」
ケントはそれだけ言ってエレベーターに乗り込み、この場を後にする
それを見守るカナの目は、敵ではなく、弟を心配する、れっきとした［姉］の目だった……

実質、地上本部襲撃事件はスカリエッティの勝利、機動六課の敗北で幕を閉じる、多くの人の負傷、六課壊滅、そして保護児童、ヴィ

ヴィオの誘拐、さらには全次元世界に向けての大演説

だが、正式な歴史、原作とは違い、ギンガの誘拐阻止、さらに戦闘機人一人の捕縛という結果になるが、
ここに、正式な歴史を知る者はいない……

side　ケント

一夜が明けた、
俺はあの後地上本部に襲撃してきたガジェットの殲滅にあたった、
だが六課は壊滅、妹の様に接してしたヴィヴィオが誘拐される、という結果に終わった。
ギンガの話によるとクオンが捕縛した銀髪眼帯の戦闘機人は聖王教会のほうで眠っている、あいつは敵に容赦ないからな〜、まあいつ目覚めても大丈夫な様にかなりきつい結界をはってある、逃げる事はできないだろう、それに万が一の事を考えてクオンにも隠れて見張ってもらっているからな

ほんとに悪い事した、六課には……

けど今回のタイミングしか無かった、奴らにも話した通り、いつもの地上本部で今回の事をしたら瞬時に情報が流れて俺と、俺に関わった全ての人間が殺される。
それだけは避けないといけない

現場処理、簡単に元六課の調査をして少しの休憩にはいる
一人ココアを飲みながら少し考える

おそらくスカリエッティは一ヶ月以内には必ず動く、目標はそれまでに奴を止める事……
いろいろあったが楽しかった六課での生活、こうしてやられてみるとやはり悔しい思いだってある

扉越しに聞いたなのはさんの心の内……ママと慕われていた彼女だ、思うものは大きかったのだろう
だから終わらせない、こんな所で……

だからやられたら…

やり返す！！

とあるラボ、厳密に言うとスカリエッティのラボ

「ふむやはり素晴らしいね、聖王の器は」

「お疲れ様です、ドクター」

機動六課を襲撃した際に手に入れた聖王の器、もといヴィヴィオ、
その小さな体に彼はレリックをいれ終わったところだった

「それとドクター、ドゥーエから報告がありました」

「ふむ、なんだったのかな？」

ＩＳ［ライダーズマスク］で地上本部にスパイとして潜入している彼女、Ｎｏ．２ドゥーエはスカリエッティにとってのスポンサー、そして生みの親、最終的には抹殺したいと考えている最高評議会に近づく任務を与えている

「はい、報告によるとスポンサー達はすでに何者かによって殺されていたと……おそらくは、飛天王の仕業かと思われます」

「ふむ、それは本当かい？」

「はい」

スカリエッティの問いにウーノは極めて冷静に答える、スカリエッティ自身、もう用済みの人物が死んだ事にはなんの感情も持たないが起こした人物が飛天王の血を受け継ぐ、［ケント］なら話は違ってくる、なぜ彼がそんな事をしなければならないのか……

「フフフ、面白い、だがまだレジアスは生きているのだろう？」

「はい」

「ならもう少しだけ彼女には頑張って貰おう……ああ、一週間後が楽しみだ！」

彼は高笑いして、

いつも通り研究に励み出す

side　　???

「最高評議会の連中が、死んだか……」

薄暗い空間の中、何者かの声にする、恐らくは、男

「最高評議会が私たちに味方するのを恐れた……か、なかなかいいじゃない」

近くにいた女性……ファンタジアが口を開き小さく笑う、よくよく見渡せば他にもいくつかの影が見える、中にはまだ小さな子供の様な影もある

そして半透明、恐らくは通信を使っている女性、カナが続けてその中の中心の男性に報告をする

『スカリエッティはすぐに動くでしょう、どうします？』

「……私が行こう」

『なっ！』

これにはカナだけでなく、周りの影も動揺する

「なんで親父が！だったら俺が行く！」

そう言って声を張り上げたのはボルス、だが男性は黙ってボルスの言葉を静止させる

「挨拶だけだ、奴らの決戦の時には手を出すつもりはない、終わってからだ」

「なら……いいけど、」

ボルスは押しとどまり男性は歩き出し、つぶやく

「さて、お前はどんな反応をする？

ケントよ」

第３０話　移り変わっていく時代（後書き）

ちょっと早い脳味噌達のログアウトでした

第３１話　チンクとクオン　ついでにケント

「ほえ～、でけぇな～」

あ、おはこんばんわ　ケントです

今俺はなんか大きな宇宙船の前にいる

近くで見るといつ見てもでかいな～

「アースラって言ってね、私達が小さい頃お世話になった船なんだ……」

隣のフェイトさんが懐かしい物を見るかの様に答える

なんでも六課隊舎が全壊してしまった為に仮の隊舎としてこの船が選ばれたらしい

結構古い船だと言っていたんだが……まあ大丈夫だろう

それにしてもはやてさん、いくらなんでも古いとはいえ次元航空船ですか……別にいいですけど……

「それじゃあ乗ろっか」

「ん？あっ、はい」

さて、これから会議だったっけ？

はぁ～、めんどくさい

ｓｉｄｅ　　３人称

聖王病院のとある一室
そこで眠っている少女が目を覚ます
髪は銀髪で右目は眼帯をしていた　（今は外されている）彼女は体を起こし、少し周りを見渡すと突如険しい顔になって、音をたてずにベットから降り、病室から出ようとする。
だが、

ガチガチガチガチ！！

「くっ！」

少女の手足に展開されるバインド、そして

「無駄ですよ、この周りには見張りとして一様魔導師が見張っています、［今の］貴方なら撃墜されて終わりです」

「っ？！お前は！」

いつの間にか自分の寝ていたベットの隣に狐の女性、クオンがたっている
それに反応した少女が自身ＩＳを発動させようとするが……

「？！なんでだ！」

ＩＳが発動しないのだ、それに自身の魔力も感じなくなっている

「少々貴方をいじらせてもらいました。
今は魔力もＩＳも封印されているでしょう」

「！！」

少女は信じられなかった、自分は天才、無限の欲望の肩書きを持つスカリエッティに造られた存在、その自分にアクセスなどできるとは考えられなかった
さらに目の前の女性は「いじった」と言った……その先は、考えたくもない

「心配しなくても、いじったと言っても魔力とＩＳを一時的に封印しただけです。」

そんな様子を見て察したのかクオンが静かに自分の言葉を修正する
その言葉を聞いて安心したのか、少女は安堵の息をはく

「さて、戦う力のない貴方がここから逃げ出す事はまず不可能です。
大人しくこちらの質問に答えて貰えれば嬉しいのですが」

「私が口を開くとでも？」

少女はそう言って口を閉ざす、それにクオンはいかにも面倒くさそうなため息を一回はく

「名前くらいは教えて下さい」

「……チンクだ」

「…以外と素直で良かったです」

「どういう事だ？」

少女、チンクが首を傾げる、今の返答は相手がいかにも自分を知っているかの返答だった、それをチンクは疑問に感じたのだ

「貴方の頭の中、少し見させてもらいました。なので知っています、名前もＮｏ．も基地も姉妹達も目的も、今の質問は貴方の性格を拝見させてもらう為です。もし、敵対の意思があり、偽名などを使っていたら、貴方を拘置所に送らなくてはいけませんでした」

「そうか……」

その言葉にチンクは一気に体の力を抜く、隠し通す事は無理だと察したのだろう

「もう六課にもアジトの場所は聖王教会を通して伝えました。後は結果を待つのみです」

「……」

チンクは無言で頷き、クオンに問う

「もし、もしもだ、私達が敗れた場合は……妹達はどうなる」

チンクの頭にあるのはその後の事、もし、自分達が敗れ、捕まった場合は……自分達は戦闘機人、もしかしたら裏で実験台として使われるかもしれない……

「安心して下さい、加害者のスカリエッティは知りませんが被害者の貴方なら方なら別です。」

「私達が被害者だと？」

「貴方達は生みの親には逆らえないでしょう？」

その言葉にチンクは静かに頷く、彼女自身、はっきり言って今回の事をする意味を見出せずにいた。
わからないのだ彼女には、こんな事をする理由が、
だが生みの親がそう決めて姉妹が納得しているのであれば……そんな感じだ

「マスターは貴方達を見捨てませんよ、同じですから……」

そう言ってクオンは部屋を出て行く、だが……

「……あの、だな……何処かに行くのなら、その、バインドを外してからにしてくれないか……」

だがもうそこにクオンの姿はなく

チンクのつぶやきは虚空に消えた

side　　ケント

「で、これは誰？」

怖いですフェイトさん

ただいまアースラの会議室にいます
そこで公表されたのはスカリエッティのラボの場所や今後について、
ちなみにラボの
場所はクオンが捕まった戦闘機人を解析してわかったものだ
カリムの弟のロッサも見つけたらしいが少し遅かったな
まあそれはそうと今目の前に映し出されているモニター、
うんクオンだね、なんでこんなに目の前の金髪美女は怒っているの
でしょうか？

「クオンですが？」

「だから誰やねん」

だからクオンですって、知っているでしょ、俺の使い魔ですよ

「んなもん知らんわ！」

「あれ？もしかして言ってませんでした？」

「……ケントくん、少しＯ☆ＨＡ★ＮＡ☆ＳＩ★しよっか……」

…えっ？

ＦＷ陣はこの後語る

「地獄って、こんな所にあったんだ～」、と

自分の体がプスプスいってるよ
危うく死にかけた、なにあの集中砲火、閻魔様もびっくりだよ
さらに廊下に放置って…
どうやらクオンの正体をあの休日の日からずっと追ってたんだと
まあいきなり現れて市街地で戦闘、さらにはギンガを助けたらしい
し、突然現れて突然消えるし、行動も不明だから六課では［要注意
人物］だったらしい
俺はそれを聞かされた時寝てた、寝る子は育つ！
あと俺が怪しいと思ったのは女のカンなんだと、怖ぇよ。
と、その時、なんかよくわからん通信が入った

『ククク、始めまして機動六課の諸君』

「……。」
はぁ、機動六課に向けての全体か…さらに発信元がスカ野郎って…
…ほんとマッドは何考えているかわからん
そこから勝手に演説？的なものを始めやがるし……
しばらく適当に聞き流していたら画面が変わる、そこには……

『あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

えっ？

「ヴィヴィ……オ？」

モニターに映し出されているのはなにやら椅子のようなものに座っている。
そして恐らく激痛による絶叫……
俺の中で何かがグツグツとこみ上げてくるのがわかる

『……アルハザードの遺産……聖王の……』

……うざい

『……これこそ私の……なのだよ』

だまれ

目の前のモニターでクズがごちゃごちゃ言ってる、ふざけんなよ

『さて、ケント君、この前の答えを聞いていなかったね。私がに付くなら今のうちだが？あとこの通信はケント君だけの音声は拾えるからね、さあ、答えを聞こう』

「……こ……す……」

『ん？すまないね、聞こえなかった、もう一度言ってくれるかい？』

こいつは絶対……

「ぶっ殺す！！」

はやてさん達が俺を見つけてこちらに走ってくる

目の前のスカリエッティは残念そうな顔をしてため息ををつき、口を開く

「はぁ、残念だよ、ケント君……いや、ここはあえてこう言った方がいいかな？

時空管理局本局所属

第四代・戦闘技術総大将

ケント・スカイ』

第３２話　決戦前（前書き）

長く更新してなかった割には短いです

第３２話　決戦前

「えっと……あの……」

「……。」

普通に喋って下さい、はやてさん……

あっ、こんにちは、ケントです

スカ野郎からの通信があって十分くらいか？

今はアースラの会議室にいます。

まあそれはいいんですけど……はぁ……

「こ、この様な方針で進めようかと考えているのですが……よろしいでしょうか？」

ほんとやめて、俺のライフはもうゼロです。

「はやてさん……お願いだからさ、普通に話して」

「ですが…一様上官ですし……」

さっきからみんな敬語で話してくるし動きがガクガクしてる。

はぁ～

「今まで通りでいいんですよ、はやてさんはこの部隊の部隊長、俺はライトニング隊の副隊長、それでいいじゃないですか」

「う～、わかった、じゃあそうさせてもらうわ」

軽！！

「だってケント君なんかにこの喋り方はちょっとな～」

「にゃはは、私しもちょっと…」

……泣いていいですか、

「にしてもおめー何者なんだ？そんな階級聞いたことねーぞ」

「私もそれ気になる」

ですよね～、

「う～ん、［大将］といっても政治とかには関与しませんよ、簡単にいってしまったら本局所属の戦闘技術総大将というのは［本局戦闘魔導師のトップ］ですかね～」

「じゃあ、ケントは私達の直属の上司って事？」

「まあそうですね」

ほえ～、という感じでなんか皆口を馬鹿みたいに開けて

「でもなんでみんな知らんねん？」

「機密なんですよ、知っているのは将官クラスの人物と提督達ぐらいです。

おいロングアーチ、そんなガクガクしなくていい、ＦＷ陣も、俺の

管理外なんだから元に戻れ、ヴァイスはケータイの俺のメアド見て手を震わせない、いいんだよメアド持ってても、階級ぐらい気にすんな！」

「ＦＷの奴らがお前の管理外って、どういうことだよ？」

「簡単ですよ、陸には陸の大将がいるという事です」

またも全員「ほえ～」とした感じに口を開ける

そんなに以外？

「まあその話は後や、みんな自分のやる事、ちゃんと確認しーや」

ちなみに役割分担というかなんというか……

俺とフェイトさん、それから教会のロッサとシスターシャッハでスカ野郎のアジトを、

ヴィータさんとなのはさんでゆりかごの殲滅

ＦＷ陣やザフィー、シャマルさんとかで市街地の応援、シグナムさんは何かあった時の待機だ、流石ニート侍の事だけはある……

「スカイ、今変な事考えていただろ」

「イイエ、ソンナコトハアリマセンヨ」

なんで考えてる事わかるの？

今のがなんの役割かというと……ゆりかごとかいうのが浮上したんだよ

めんどくせぇ～……ん？

「おっ、着いたか」

「どうしたん、ケント君？」

「はやてさん、ちょっといいですか？」

「？」

子だぬ……ゴホンゴホン、はやてさんが頭に？マークを浮かべる

「考えてみたんですけどゆりかごの戦力が少ないと思うんです。」

「ケント、それははやても重々承知だよ、でも……」

回せる戦力が無い……か

「なのでちょっと応援を……」

そう言うと会議室のドアが開き一人の女性が入ってくる

クオン

「お久しぶりです。マスター」

side　なのは

「えっと……よろしくね」

「……。」

「ゆ、ゆりかごの制圧頑張ろ！」

「……。」

えっと、こんにちは高町なのはです
ゆりかごが浮上して、私達がそれを制圧する役なんですが……

「おいおめー、何か言ったらどうだよ！！」

「……。」

このとおり、クオンさんが……うん、

「おめぇいい加減に「脳筋馬鹿が……少し黙って下さい」なっ！てめぇ！！」

「ヴィータちゃん！抑えて抑えて」

この人が強い事は分かってるんだけど、性格が問題かもしれないね……

「クオン、気に入らないかもしれねーが言う事ぐらい聞け、今から一緒に動くんだから」

「……分かりましたマスター」

はぁ、大丈夫かな

side　　3人称

スカリエッティアジト

「ドクター、少しよろしいでしょうか」

紫の髪をまとった女性、ウーノがモニターを見ているスカリエッティに声をかける

かけられたスカリエッティは「どうしたのかね」と一言言うと今まで見ていたモニターを背にし、ウーノに向き合う

「妹達の配備、完了しました。

ゆりかごは残り3時間45分で所定の位置に到着します。」

「フフ、そうか、六課の方はどうだい？」

「先ほどエースオブエースと夜天の主、守護騎士一名と使い魔一匹がゆりかごへと

テスタロッサお嬢様と大将はこちらへと向かって来ているのが確認されました」

「やはりか……」

スカリエッティが一言つぶやきモニターをいじると今度は新しくガジェットの映像が映し出される

そこに乗っているのはルーテシアとガリュー

「ルーテシアにもお願いした、上手く動いてもらおう。
騎士ゼストは？」

「一様作戦は伝えましたがおそらくは……」

「まあいいだろう、彼には時間がない、放って置いても直ぐに死ぬさ」

スカリエッティは笑っているがウーノは何か奥歯に挟まったような顔をして報告を続ける、スカリエッティも気づいたらしい

「どうしたんだいウーノ、そんな顔をして」

「いえ、ただ一つ疑問に思った事が……」

「ふむ、」

ウーノはスカリエッティに次ぐ知能派でありだいたいの事は一人で考え、一人でこなす、
スカリエッティはそんな彼女が抱く疑問に興味を持った

「いえ、［ゆりかご］の危険性はケント様もよく知っているはずです。
なのになぜゆりかごの迎撃に行かないのかと……」

［大将］という肩書きを持っている彼だ、ふつうは自分達の逮捕を自らの使い魔をさせて自分はゆりかごの迎撃にあたったほうが１番手っ取り早いはずだ、
それにクオンはどちらかと言うと［制圧］よりは［逮捕］の方が向いているはずだ

なのになぜ逆なのか……

「ウーノは知らなかったんだね、それは彼が持っているデバイスに関係があるんだ」

「デバイスに、ですか？」

ケントがつかっているのはシーザーという名のデバイス、特に変わった所はない筈だが…

「ゆりかごでは彼の［シーザー］は使えないのだよ、恐らくは事前にクオン君によって簡単な幻術でもかけておいたんじゃないかな、ゆりかごの担当者にならないように」

「それなら他のに変えれば……」

「そう簡単じゃないのだよウーノ、なぜなら彼はシーザーであってシーザーは彼であるからね」

「？？」

スカリエッティの答えにウーノが理解出来ないといった顔をする

「言い方が悪かったね、要するに彼はシーザーなしでは戦えないという事だ」

「へぶしっ！！」

「大丈夫？風邪？」

「大丈夫ですフェイトさん、ただ何処かのマッドが俺の噂をしている様な気が……」

ケントは体を震わせながら答える
だが彼等のまえには……

「どうしましょうかね……フェイトさん…」

「が、頑張ろ」

目の前を多い尽くすガジェットガ

ジェット・・・・・・・

明らかに時間稼ぎだ

「無駄な事ばかりしやがって」

「でもこの数はキリが無いね、振り切るよ」

そうして二人は空を駆ける

「やっぱり外側からだけやったら拉致があかへん、中からなんとかせんと」

そう言いながらもはやては迫り来るガジェットを薙ぎ払う
だが数は減るどころか増える一方でさらにゆりかごからは絶え間なく四方八方へと砲撃が発射される
さらには敵も味方も入り乱れている中、自分が得意とする広域殲滅魔法などは使う事が出来ない

もし上手くガジェット、ゆりかごに放てたとしても巨大なゆりかごの前では決定打は与えられない
止めるには中から動力源を破壊する以外にない

「ディバイン・バスター！！」

「アイゼン！！」

なんとかしてもこの二人を突入させなければ、そんな思いがはやてによぎる

side　　？？？

空を飛ぶゆりかご、それを阻止しようとする局員達

その様子を見つめながら、初老の男は自分のタバコに火をつける
周りには残骸と化したガジェット……
「ん、そろそろか？」
男がつぶやくと体が少しづつ変わってゆく
白髪の髪は綺麗な金髪へ
手についたシワはすっかりなくなり
そこにいるのは所定の位置の男性ではなく美しい青年になっていた
「じゃ、遊びにいくか」
青年は歩き出す
ゆりかごへと

第３３話　決戦　１

ｓｉｄｅ　３人称

「おらっ！」

ドガンッ！！

ヴィータとなのは、この二人がゆりかごに突入してどれくらいの時間が過ぎただろうか。
突入部隊のメンバーが揃うまで、少しでもゆりかご内の敵を減らす役目、それが二人にあたえられた任務だった。
だが実際に武器を振るい、攻撃を打ち出しているのは紅い騎士、ヴィータだけでありなのはは全くと言っていいほど手を出していない。
否、出せていない。

「ヴィータちゃん、飛ばし過ぎだよ……」

ヴィータを見ると彼女にはかなりの疲労の色が見える
それを気にしてなのはが声を掛けるが……

「はっ、いーんだよ、ベルカの騎士を舐めんなよ」

そう言って無理して作った笑いを向ける
ヴィータのおかげでなのはの魔力、体力ともに余裕という状態なのだが、このままいくと変わりにヴィータが潰れてしまうだろう

だがヴィータが頑張っている理由は他にもある。
簡単に言えばイライラだろう

「それに……あいつは何処いったんだよ！！」

「お、落ち着いてよヴィータちゃん」

二人とともに突入したクオンが当然いなくなったのだ。
気付いたらフッと、いつ、何処でいなくなったのかもわからない
それがヴィータの心をイライラさせていた

と、そこに通信が入る

『突入部隊からスターズ分隊へ』

「はい」

『駆動炉と玉座の間、詳細ルートが判明しました』

その言葉の後、二人の目の前にモニターが現れ、ゆりかご内部の地図を映し出す
自分達の現在地、駆動炉の位置、玉座の間

「これって……真逆方向！」

「くそっ、突入部隊のメンバー、まだ揃わねぇのか！？」

『各地から緊急招兵していますが…まだ……』

二人揃って少しの間無言となると、ヴィータが重い口を開く

「仕方ねぇ、スターズ1とスターズ2、別行動で行く」

「ヴィータちゃん?!」

なのはが声を上げるのも無理はない、なのは自身は大丈夫だがヴィータは今までの戦いによって体力、魔力ともに消耗が激しい、そんな彼女を、まだどれだけの戦力を隠しているかわからないゆりかごに残すなどなのはにはできる筈がない

『了解しました。急いで応援をそろえます』

向こうからの通信が途切れる

「駆動炉と玉座の間のヴィヴィオ、かたっぽ止めただけで止まるかもしんねーしそうじゃねーかもしんねーし、こうしてる間にも外は危なくなってきてる。
時間がねーんだ。」

「でもヴィータちゃ「破壊力と粉砕はあたしとアイゼンの得意部、なのはだってしってんだろ?」……うん。」

なのはは言い返せない、彼女の言っている事が正論だから、外はもう……時間が無い。

「鉄槌の騎士、ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼンに砕けねぇ者なんてありゃしねーんだよ」

ヴィータはなのはに背を向ける、小さい筈の背中は、今のなのはにとって少し、大きく見えた様な気がした。

「一瞬でぶち壊してからお前の援護に行ってやるよ。」
なのはにヒラヒラと手を振ってヴィータは歩き出す。
「絶対、絶対にすぐ合流だよ！！」
「あったりめーだ！！」
その言葉に安心したのかなのはは玉座の間に向かって飛び立った。

「はぁ～、ここがマッドの研究所、ひろいねぇ～」

言葉を発したのはケント、隣には一緒に飛んできたフェイトと入り口で合流したシスターシャッハ、緑の長髪査察官、ロッサは一足先に潜入している

そして今彼等がいる場所はスカリエッティの研究所、彼の言うとうり広くはあるが壁際には生体ポッドや起動していないガジェットたちが所せましと並んでいる

「これは、人体実験の素体？」

「そうなんじゃないっすか～」

「人の命を弄び、ただの実験材料として扱う。あの男がしてきたのは、そうゆう研究……」

フェイトの拳に力がはいる

彼は人の事を実験動物（モルモット）としか見ていない、そして自分やエリオみたいな消える事のない傷を持つ人を造り出す。

今の彼女にあるのは途方もない悔しさと怒りだ、

「一秒でも早く……止めないといけませんね」

「はい……」

シャッハの言葉にフェイトは短く肯定する
止めないといけない、絶対に
「んじゃ、ちゃっちゃと終わらせましょう。」
そう言って歩き出したその時、研究所全体が大きく揺れ、そして……
「ぐっ！！」
「「シスター！！」」
シャッハの頭上から落ちてきた？型ガジェットが彼女を押しつぶしたのだ。
その巨体から普通ならば助かる事は出来ない
フェイトが慌てて？型が落ちた所に近寄ると同時に……
ガキンッ！！
「ぐっ……」
「なかなかいい不意打ちだったけど……ちょっとあまかったな」
フェイトが振り向くとケントがシーザーを使って紫色の羽の様な武器を防いでいる
一度舌打ちしてから襲撃者は一度自分達との距離をとって再び武器を構える。数は、二人

『フェイト執務官、こちらは無事です。
戦闘機人一人を補足しました。この子を確保次第、そちらに合流します』

その言葉に胸をなでおろした彼女は目の前にいる二人はの戦闘機人に向き合う
紺色の短髪と桃色の長髪、戦闘機人、トーレ、そしてセッテ

「今の一撃で大将殿、貴方を潰そうとしたのですが……やはり失敗ですね」

「おいおい、潰そうだなんて物騒な」

ケントが両手を広げて　　やれやれ　　とした感じで首を振る
その様子は得にあせった感じはなく、終始落ち着いている

「フェイトお嬢様」

トーレが今度はフェイトに向き合う
フェイトが彼女等に睨みながら答える

「こちらにいらしたのは帰還ですか……それとも反逆ですか？」

「どっちも、違う」

「犯罪者の逮捕、それだけだ」

彼女はつぶやく様に、それでもはっきりと答えた

「これぐらいか……」

ゆりかご内にあるとある部屋、そこにクオンはいた

彼女は今、ゆりかごの壁に手を当てて目を閉じているだけ、だがそれだけでも彼女にとってはとても意味のある行動に変わる

「さて、そろそろ行きますか」

壁から手を離して彼女は向かう

ゆりかごの制御室へと

第３３話　決戦　１（後書き）

やはりこの小説は隊長陣中心ですね～
ＦＷ陣、書いた事が無い気がする……

第３４話　決戦　２（前書き）

駄文です……

第３４話　決戦　２

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ガキィン！　　バッ！

「寝てんのか？」

「！！！」

トーレが自身のＩＳ［ラインドインパレス］を使いケントに殴りかかる、しかし彼はデバイスのシーザーを巧みに扱いトーレの攻撃を軽く受け流す、魔法など一切使っていない
さらにセッテがブーメランブレイドで斬りかかるがまたも受け流される、もちろん魔法は使っていない

そんな攻防が約２分、ＡＭＦなど関係ない、ケントはその［技量］だけで二人の戦闘機人を圧倒していた

その間、トーレとセッテは今までフェイトには一切手を出せていない、彼女等は目の前にいる［本局の大将］の相手で精一杯だ。

「すごい……」

フェイトはつぶやく、それは純粋な感想、地上本部襲撃の時、自分を足止めした二人の強さは自分自身が一番わかっている、だがケントはそれをはるかに上回り、彼が［大将］だと言う事を改めて実感させられた、なら今まではどうだったのか？
おそらくは今まで大将だと言う事を隠していたので彼なりに力を抜いていたのだろう。

「やはり……お強い……」

トーレが悔しそうにつぶやく、それに反応したようにケントは一つため息をつく

「お前ら自首しろ、悪いようにはしねぇ」

「悪いがそれは出来ません」

「……そっか」

一瞬だった、ケントは自身の希少能力（レアスキル）を使いセッテの後ろに回り込んだと思ったら彼女の後頭部に肘打ちを決め、さらにはそのままトーレに投げつけた

「ぐはっ！」

「うっ！」

魔力で身体強化をしたのだろう、セッテを投げつけられたトーレは

そのまま吹っ飛び、壁に激突した
二人は再び立ち上がろうとするが彼のバインドで拘束され、動く事が出来ない

「フェイトさん、すみませんがこの二人、外までお願いします。スカリエッティは俺が探しておくんで」

ケントはいたって冷静に、静かに答える、フェイトはこの様な彼を見た事がない、今までどんな戦闘でも自身の感情を少しでも出していた筈、しかし今の彼はなんだ？
冷静なのはいい事だ、だが今の彼は冷静すぎる、何かを隠している様な、いや違う

怯えているんだ

何に対してかはわからない、だが彼は静かに怯えている
それを表情に出さまいと必死になっている
彼がこうなったのはいつからだ？
そうだ、スカリエッティの研究所に入って、シスターシャッハと人体実験の素体などと話しをした時から……

「どうしましたか？」

「えっ、いやなんでも無いよ」

彼が突然覗き込んできたのでびっくりしてしまう

「じゃあ、すみませんがお願いします」

「でも、一緒に行ったほうが……」

「大丈夫ですよ、すぐ終わらせてきます」

そう言って背中を向ける、だが……

「その必要はないよ」

真っ白な白衣をまとい

肩まで伸ばした紫色の髪

「スカリエッティ」

変態マッドがそこにいた

「おぉぉぉぉりぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ゆりかご内部、駆動炉の手前、そこに彼女の声が響き渡る
足元には大量のスクラップ、彼女の胸には……血

そしてスクラップの元の原型はガジェット？型、かつて彼女、ヴィータの目の前に現れなのはに歩くことさえ難しくなる程の大怪我を負わせた機体
その全てがヴィータのハンマによって破壊された

「うっ……ぐっ！」
全て破壊したことによって安心感したのか、彼女は床に手をつく、
胸からは絶え間なく血が流れ出て、それがどれほど大きな傷かを物語っている
それだけではない、戦闘によってできた身体中の傷、普通ならば激痛によって動くことすらままならない
「ゲホッ、ゲホッ、ちくしょう」
彼女の目の前には目的の場所、駆動炉がある部屋が見える
ヴィータは自身の相棒［グラーフアイゼン］を杖の様にして一歩、
また一歩と進む
そして……

「これが……駆動炉……」

今までで一番大きな部屋、そこには禍々しい程紅く光り輝く巨大な、
水晶のようなプリズム
そしてこれが、目的の駆動炉……
「これを、ぶっ壊したら……この、デカブツも、止まんだよな……」
ヴィータの息は荒く、言葉も途切れ途切れになる

しかし彼女は自分と同じ様に傷ついた相棒を残った力を総動員して振り上げる

「アイゼン、リミットブレイク……やれるよな」

その問いにアイゼンは力強く答え、ガシャンガシャンとカードリッジが三つ排出される

そしてアイゼンはその形を変え、彼女ができる最大の攻撃を発動する形に変化する

そして……

「ツェアシュテールングスッ！！」

ヴィータができる、最大の攻撃が発動する……

「はっ！」

「！　　っく」

ディードによる［ツインブレイズ］による斬撃、ティアナはとっさにクロスミラージュのタガーで相殺しようとするが力の差で後方へ飛ばされる

「ティア！」

「よそ見してんじゃねーぞタイプゼロ！」

「スバル！！」

「お前もっスよ！」

コンビであるティアナが吹っ飛ばされた事によってスバルの反応が遅れる、それを見過ごす様な事をせずにノーヴェによる蹴りが彼女に迫る、それを防ごうとギンガが前に出てシールドを張るが対峙していたウインディからの砲撃によって二人まとめて吹っ飛ばされる

スバル、ティアナ、ギンガ、この三人相手にノーヴェ、ウインディ、ディード、そしてガジェット、戦況はほぼ五分五分、今回は一瞬の油断によりスターズ側は後退したが戦いの行方はわからない……

「はあ……はあ……」

高町なのはは荒い息をする
目の前には彼女との砲撃戦に敗れた戦闘機人、ディエチが倒れている

「くっ、」

とっさの判断によって使用したブラスターシステムの反動、その苦痛に彼女は顔を歪ませる

ＡＭＦ状況下は飛行するだけでも大量の魔力を消費してしまう
いくら空のエースであり、魔力量がオーバーＳの彼女だろうときついものはきつい
しかし……

「ブラスター１はこのまま維持、いけるよねレイジングハート」

その問いかけに彼女のデバイスは当たり前のように返事をする

彼女は止まれない、もうすぐそこに助けを求める娘がいるのだから
そのまま飛翔し先を急ぐ、その時彼女から3つのスフィアが流れて
行く

［あの扉です］

固く閉ざされる扉、そこに向けてなのはは砲撃を吹き飛ばす
土煙などものともせずに彼女は突っ込み、そして……

「いらっしゃ～い、お待ちしておりました～」

涼しい顔をした戦闘機人、Ｎｏ．４クアットロと、ピクリとも動か
ず、椅子に縛り付けられたヴィヴィオであった。

ゆりかごの外の戦闘…。

『6時の方向、ガジェット減少！』

『第8区間、殲滅完了しました！」

「第2分隊、残りは少ない全部堕とせ！」

次々と入ってくる情報にはやては笑みをうかべる、確かにガジェットはまだゆりかごから投入はされ続けてはいるが初めにくらべてかなり減ったさらにはそのおかげでほかの隊長達の指揮もだんだんと安定してきた。
だったら……

「だれか指揮を代わって！私もゆりかごに突入する！！」

「なら私が！」

「お願いします！」

近くにいたある分隊の隊長が彼女の問いかけにいち早く答える
そしてはやてが突入しようとした時……事態が急変する……

『なっ！　ガジェット増大……新型です！！』

「なんやて？！」

航空部体から送られてきた情報に彼女は旋律する、

「あれはなんだ！」

近くにいた隊員が声を荒げる、新型ガジェット……数はあまりないが？型と同じくらいの大きさであり飛行型……

「くっ、私が広域殲滅魔法で一掃する！隊員は全員下がって！！」

はやてはこれによってゆりかご突入へのチャンスを逃してしまう……

第３５話　　心（前書き）

書く側から読む側になってました……
ついつい夢中になって……更新遅くなりました。

第３５話　心

「スカリエッティ……」

ケントは目の前の男を見てそう小さくつぶやく、
紫色の髪に真っ白な白衣を見にまとう［不気味］の三文字が驚くほど似合う男性

「ククク、初めましてかな？ようこそ大将殿、そしてフェイトテスタロッサ執務官」

その言葉にフェイトはスカリエッティを睨みつける

「地上での祭りを楽しんでくれているかい？」

「何が祭りだ！この重犯罪者が！！」

フェイトが怒鳴りつけるがスカリエッティはどこ吹く風とばかりに涼しげな顔をする
火に油なのか……フェイトの顔がみるみる恐ろしくなっていく

「……ったく、まあそこらへんはおいといてスカ野郎、お前を逮捕ｓ「自首しよう」……は？」

ケントとフェイト共々思わず間抜けな声を出してしまう。
なんせ今まで六課が追ってきた犯罪者がいきなり目の前で「自首する」と言い出したのだ、驚かないほうがおかしい。

「私としてもオーバーＳの魔導師と［本局最強］の大将が目の前に

いる状況で抵抗しようなんて思わないさ、ここは潔く捕まろう」

「だったらゆりかごも「自首はするがゆりかごを止める気はないね、ゆりかごの制御自体はクアットロが全て請け負っている、こちらからはゆりかごにアクセルすらできないよ」…そんな」

クククとまたスカリエッティが不気味な笑いを取るする

「私は［囮］さ、六課の戦力を分断する為のね、まあそれはいいとして」

スカリエッティがケントに向きなおる、フェイトが悔しそうに歯軋りをしているがスカリエッティは見向きもしていない

しょうがないことだ、スカリエッティは管理局からすればこれ以上ない危険な存在、たとえ今回、たまたまアジトを発見して囮だと思っていても絶対に捕まえなければならなかった、今を逃すといつまたチャンスがあるかなどわからない……

「ケント大将殿、今の私は君にとても興味があってね、君について私が調べた事、捕まる前にその答え合わせをしたいんだが」

ケントが目を細める

「時間がないんだ、後にしろ」

「そうもいかないな、無限の欲望という二つ名を持つ私からすれば今すぐに君について知りたいんだ、もし断るならば……」

そう言ってスカリエッティは一つのスイッチを取り出す、

「このボタンを押して研究所全てを崩壊させよう」

「その前に脱出すればればいいだけの事だ」

「いいのかい？この研究所にはまだ生きている実験素材もいる。彼らを全て殺すと言う事になるのだが……」

「……ッチ、早く終わらせろ」

またスカリエッティはクククと不気味な笑いを一つしてから話し出す。

フェイトは話しについていけないという感じだ。

「大丈夫だよ、すぐに終われせる。

まずいくつかの質問に答えてほしい」

「とっととしろ」

「ふむ、そうだね、ではなぜ君が［ゆりかご］に出撃しなかったかだね」

ピクッとケントの体が動く

「古代ベルカの時代、代表的なのは聖王や覇王だね。彼ら王達は一人一人が強大な力を持っていた、それこそ普通の魔導師など足元にも届かない程」

「王達の実力はほぼ互角、まあ聖王は少し抜けていたらしいけどね。そんな王達が一番自身の力を発揮できる場所、それがどこだかわかるかい、フェイト執務官殿？」

「……自身の城か？」

今のスカリエッティに抵抗の意思はなさそうと見てフェイトは戦闘体制を崩す

「そのとうりだ、城、またはその国の切り札の様な兵器、これらの中では王達の力はほぼ百パーセント引き出すことができる。そして逆に敵の王の力を引き出せなくする場所でもある」

「何が言いたい……」

ケントがスカリエッティを睨みつける

「ゆりかごの王に対する効力は知っているかい？フェイト執務官？」

「……。」

「フフ、正解は［精神操作］だよ」

「それとケントは何の関係がある」

「おや？知らないのかい？」

スカリエッティは怪訝そうな顔をする、

「ケント大将も王の血を引き継ぐ人間だよ、忘れられた王、［飛天王］の」

えっ、とつぶやきフェイトがケントを見つめる、ケントはスカリエ

ッティをみたまま動かない

「ふむ、話を戻そう。
まあ［精神操作］と言ってもその時の感情を強めるだけだがね、憎しみの感情を持っているならばそれを強め、絶望を持っているならば強める。
そうして敵の王に冷静な判断をできないようにする。
それがゆりかごの王に対しての効力、そうだろう［シーザー］？」

＞……＜

「スカ野郎、お前、どこまで……」

「おや？私は［シーザー］に聴いているのだが？なぜそのデバイスはＡＩを使って話さないんだい？いや、［話せない］のか……」

「？」

フェイトが頭の上に？マークを出す

「初代飛天王［メビウス］のデバイス、［神月］の能力の一つがゆりかごと同じ［精神操作］、名前は同じだがゆりかごとは違い持ち手の精神を安定させる、これによって初代飛天王は［黒］にならずにすんだ」

「……。」

「ククク、今の君はこの研究所にあった実験動物（モルモット）達を見て殺意などの感情に駆られている。
そしてその感情を抑えているのが君のデバイスであるシーザーだ。

だがそれはシーザーであって神月ではない、恐らくは神月を元にした模造品（コピー）、ということはそのデバイスを作った研究者がいるということだ、そして今、君はそれを持っているそうなるとケント大将、君はその研究者と面識があり研究者は飛天王の存在を知っている。忘れられた王の存在をね、違うか？」

ケントはそれを聞きため息を一つする

「シーザーのＡＩが作動していないのも今、君の本当の考えは私に対する殺意などにみちているから……シーザーはその負の感情を抑えているんだろう。
もとより、普段の日常生活でも微かだが作動している様にみえるが……」

「……。」

「ククク、無言は肯定と捉えよう、おかしいと思ったんだよ。
君が始めて飛天王の象徴である［翼］を出現させた時、翼は［白］にも［黒］にも完全には染まりきっていなかった。
二つの色の混色、つまり君は［覚醒］していないんだ。
だが飛天王の歴史上、どちらにも染まらなかった王はいない、覚醒は自身の心によってきまるからね、したがって私が導き出した答えは一つだ」

「君の心はもう壊れている、廃人なのだろう」

「私には君に何があったのかは知らないが……まあいい、シーザーにも［擬似的な心］を作り出す事は簡単だ、それによって今の君は心を保っていられる。違うかい？」

「それって……」

フェイトが自分なりに何かを感じ取ったのか静かに声をあげる

「疑問に思わなかったのかいフェイト執務官殿？本局の大将という強大な力、そして今、一番危険視されているのは私ではなく［ゆりかご］の筈だ、だが君は何の疑問も感じていない……流石は本局大将補佐クオンといったところか、高度な幻術だよ」

「！！」

「流石は無限の欲望（アンテミテッドデザイア）、アルハザードの人間が元になっただけの事はある……」

「そちらも私の事を知っているというわけか、流石だね」

そう言ってスカリエッティは手に持っていたスイッチを握り潰す。

「最後に聞きたいことがある……」

「なんだよ」

「君は……誰に造られた？」

「く……そぉ……」

今にも崩れそうな体を必死に奮い起こしてヴィータがつぶやく
目の前には不気味に輝く巨大なプリズム
足元には新たに破壊したガジェットの残骸が転がっている
ゆりかご外に現れた新型ガジェットだ

「手間……かけさせやがって……」

ヴィータはアイゼンを持ち上げようとするが手に力が入らずに膝をつく、

「あたしがやんねぇと……いけねぇのに」

そのアイゼンでさえもボロボロで、すでに鉄の塊と言ったほうがいいだがそんな状態でもヴィータは残る力を振り絞って立ち上がるだが……

「えっ……」

いつもの彼女ならきずけていたかもしれないだが今は立つ事すらままならない、そんな彼女の目に写ったもの……それは……

「ちく……しょー」

そこにいたのはガジェット?型、昔、管理局のエース、高町なのはに重傷を負わせたガジェットであり戦闘に特化している機体詰めが甘かった、もうヴィータにはこれを壊せる力は残っていない

そして無常にも、その刃は振り下ろされた

第３６話　二人の大将補佐

「はぁ……はぁ……」

管理局のエースオブエースと言われればほとんどの局員が口を揃えて言うだろう。

「高町なのは一等空尉」だと、

優しく、美しく、そして強い

なのは、ヴィータ、クオンがゆりかごに突入し、かなりの時間がたつ、彼女、高町なのははゆりかご中の［玉座の間］に突入した。

だが……

「ヴィヴィオ！私だよ！なのはママだよ！」

「五月蠅い！貴方なんか、ママなんかじゃない！！」

彼女の目の前にいるのはあの弱々しく、自分に甘えてくるような娘ではなく、自分と同じぐらいの体に良く似たバリアジャケットを纏う女性、そして向けられているのは［敵意］の目……

だが、金髪でオッドアイという特徴から、同一人物であるということがはっきりと確認できる。

なのはがヴィヴィオ相手に戦闘を始めてから数分……その間に彼女は切り札とも言える［ブラスターシステム］を二段階まで発動させていた。

もちろん消費はかなり激しくなる、それにいくら自身を強化させたからと言って実の娘に攻撃するなどもってのほかだ。

その為防戦一方、なのはの体力は限界に近い
しかし、その状況もこの時をもって崩れる
「見つ……けた！！」
自身が玉座の間に突入前に放った三つのサーチャーの一つがこの［ゆりかご］を操っている張本人、クアットロを見つけ出す。
クアットロは見つけられたことに驚いたような表情を見せる
「くっ！」
何度も破られたバインドを隙をついてヴィヴィオに発動させる
ヴィヴィオはもがいているがなのはにとってはここが勝負どころであり破られないように今まで以上に硬い
「レイジングハート……いくよ！！」
彼女のデバイスからいくつかのカードリッジが排出され魔力が集まり出す
その様子をモニターごしで見ているクアットロの表情が徐々に変わっていく、彼女がやろうとしている事がわかったのだろう。
［壁抜き］
通常の魔導師ならば絶対に不可能だろう、
だが実際に彼女は４年前、スバルを助け出すときに成し遂げている
なのはの表情が歪む、だが彼女は止まらない……いや、止まれない！！
「ブラスター３！！」

ブラスターシステムの最終段階、ブラスター3を発動させる……
そして……

「ディバイン・バスタァァァァァ！！」

桃色の奔流がゆりかご中の壁を一枚、二枚と突き破り、進む、クアットロが必死に逃げようとするが……間に合わない、そして……

「はぁ…はぁ……やった……」

砲撃はクアットロのいた部屋を撃ち抜いた

筈だった

『ざ～んね～んで～した～』

「えっ？」

玉座の間に響き渡る声、それは紛れもなく今さっき撃ち抜いたクアットロのもの

「どう……して？」

なのはの表情からみるみるうちに光が消えていく

『どうして？ですか～、わ・た・しがその程度の対策を取らないとでも？』

「どういうこと！！」

『んふふ～、特別に教えて差し上げましょうか～、簡単ですよ、私の立体ホログラムをいたるところに設置してあるだけでございますぅ～』

「えっ？」

『貴方が撃ち抜いたのはその一つで～、まだまだたくさん残ってますぅ～、さ～て、エースオブエースは見事私を撃ち抜いて陛下を助けることができるんでしょうか～』

完全になのはから光が消える

当たり前だろう、ＡＭＦ状況下の中、ブラスター３まで使って砲撃したのだ。

もう彼女に残された魔力は少なく、聖王となったヴィヴィオと戦いながら本体を見つけ出し、撃ち抜くなど不可能に近い

『うふふ～せいぜい頑張って下さいな～』

なのはは必死にこぼれ落ちそうになる涙を堪える、この状況は、なのはの不屈の心までをも砕こうとしていた……だが……

『全く、多くの人は戦っているというのに、貴方は高みの見物ですか……ため息がでますよ』

『「！！！」』

クアットロと同じ様に流れてくる久しぶりの声が響く

『な、なんで貴方がここに！！』

『ゆりかごに少しだけハッキングをかけたら出てきました、このゆりかごは、聖王を倒しす、駆動炉を止めるの二つだけでは止まりません、この船を操っている貴方も倒さなければいけない……本当はこのゆりかごの制御を奪いたかったのですが難しいですね、流石は古代ベルカの遺産、そのせいで貴方の居場所ぐらいしか特定出来ませんでした』

「クオンさん！」

希望が出来たからか、なのはの声に若干明るさが戻っている

『その声は……なのはさんでしたね、この人の相手は私がするのでわがままな聖王は任せましたよ』

「うん！！」

そう言ってなのははヴィヴィオに向き直る、心に光を照らしながら

「ゆりかごにハッキング……ですかぁ～、これまた大将補佐というのは、すごいですねぇ～」

ため息混じりにそう、クアットロがつぶやく、クオンはお構いなしというような感じで言い放つ

「我がマスター、ケント・スカイの命令により、貴方を逮捕します」

「これを見てもですかぁ～」

二人がいる部屋の壁という壁が開く、そこには無数のガジェット……

「うふふ、このガジェットの大群にたった一人で勝てるとでも～」

クアットロは自信ありげに話すがクオンは一度目を閉じ、そして……

「時空管理局本局所属、戦闘技術者大将補佐クオン、参ります」

無数のガジェットに突っ込んで行った……

ガシャン！！

「えっ？」

思わず素っ頓狂な声をあげてしまう、自分はガシャン？型に殺されそうになって……

ヴィータは恐る恐る顔を上げる、そこにはガジェットではなく女性の姿、先程のガジェットは彼女に吹っ飛ばされたのだろう、数十メートル先でスクラップになっている

（応援か……）

恐らくは突入部隊だろうと半分安心、パンフ遅かった事へのイライラを持ちながらアイゼンを杖の様にしてフラフラと立ち上がる

「おせーんだよ、来んのが……」

目の前の女性は腰まである緑色の髪をストレートに垂らし、紅い瞳をした女性、背の高さはヴィータより少し高いぐらいか？
見た感じでいうと［おしとやかそう］友人でいうと月村すずかの様なイメージを連想させる、だが……

「本局の魔導師っつーのは礼の一つぐらい言えねーのかぁ？」

「はっ？」

見た目とは裏腹な言葉遣いにヴィータは驚いた様な声を上げる
よくよく見てみると突入部隊ではないらしい、彼女一人しかいない
さらに彼女は肩に二メートルはゆうに越す大刀を片手で振り回している

「礼は？」

「はっ？」

「礼はねぇーのかって聞いてんだよ！」

「あっ、えっと……ありがとう」

「ッチ」

そう言って目の前の女性、いや、少女は巨大なプリズムに向かって歩き出す

「おい！お前、誰だよ！」

一人で突入する局員なんていない筈だ、率直に感じた疑問を彼女に投げかける

「人に名前を聞くときは自分から名乗りやがれ！！」

「あ、あたしはヴィータだ」

「所属は！！」

「本局だ」

「階級は！！」

「さ、三等空尉だ」

はぁ、と一つため息をついてから少女はヴィータに向き直る

そして、

「私は地上本部大将補佐、カイリ・マーベルだ。
独断でこの駆動炉を破壊しに来た、わかったか？」

そう、大将補佐カイリは告げた

第37話　スマホでポチポチ文章書いてるんですけど……もうすぐラストと

Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏが面白すぎる……神ですよねあのクオリティは

……

第37話　スマホでポチポチ文章書いてるんですけど……もうすぐラストと

「君は、誰に［造られた］？」

スカリエッティの静かな一言にフェイトはより一層目を見開く
信じたくない、彼もまた、［プロジェクトF］の被害者などと……

「本当はこんな事考えたくはないのだがね、なんせ私は飛天王のクローンを作るのに失敗している」

「だがこれしか思いつかないのだよ、遥かなる歴史の中で飛天王が生きていた？ククク、それはそれで面白いのだがほぼゼロだろう。しかもそのデバイス［シーザー］はさっきも言った様に明らかに何者かによって作られた神月の模造品（コピー）。こうなってしまうとその科学者に君とセットでシーザーも作られたというのが妥当なのだよ。初代飛天王のデバイス、神月のコピーを作り飛天王のクローンを作り出す、こんな事ができる科学者、私は知らな……いや、一人だけいるかな、もう死んでしまっているが…」

またもクククとスカリエッティは肩を小刻みに動かしながら笑う

「まあ私が話したい事は以上だ、すまなかったね。時間をとらせて」

「たくっ、別に構わねぇーよ、さて……と！！」

ガキィン！！

ケントがスカリエッティに放たれた［何者かの］レーザーを弾く
この場にいる誰もが口を開けて呆気になっている中、ケントは静かに刀を構える

「スカリエッティさん、迷惑なお客さんがご到着らしいぜ」

「じゃあこれを壊しゃーいいのか」

「ぐっ……ああ」

ヴィータはアイゼンを杖の様にしながらフラフラとカイリと言った少女に近づくカイリは顎に手をつけ何かを考えている

「簡単に壊す方法は……なさそうだな、じゃっ！真っ正面からやりますか！！」

「おっ、おい！」

「なんだぁ？」

「本当に出来んのかよ、これ、想像以上にかてぇぞ！！　それに……」

ヴィータは身をもって体験している、このプリズムの想像以上の硬さと、正規の歴史とは違う防御プログラム……このプリズムは一度攻撃するごとに防御プログラムが発動する。したがって一度失敗すればかなりの痛でとなるのだ、今のヴィータには……それを止めるすべはない

「はぁ？ナニイッテンダヨ」

だがカイリはやれやれと手と首をふり呆れた様な仕草をし始め、ヴィータはその動作に一瞬カチンときたがそれを必死にとどめる

「これぐらい出来なきゃ大将補佐なんて出来ねーつーの！それにあのジジイにも笑われちまうだろーが！！」

いきなり怒鳴られたのでヴィータは少し驚くがカイリはそんな事は

気にせずにカードリッジを三つ排出する

「いくぜ、［瀑嵐（ばくらん）］」

カイリがデバイスの名前を叫ぶと同時に巨大なプリズムに向かって飛ぶ……そして……

「灰燼・破閃！！」

大刀を叩きつけた

「なかなか……やりますわね……」

声の主、クアットロはそうつぶやく

たった一人、たった一人だけなのだ……それなのに……

「捕縛魔法輪・爆破」

ドドドドドとまた何機ものガジェットが破壊される、目の前の彼女、クオンにはかすり傷一つ付いていない、

「くっ、」

クアットロが操作し、ガジェット?型がクオンに襲いかかる、だが……

「あーもう、じれったいですわねその盾!!」

クオンの周りを動き回る5つのシールド、これがガジェット達の攻撃を全て防いでいる、シールドなのに意思を持った様に……

「それは全自動です。どんな攻撃からも自動で私を守る」

「そんなの……ありですの」

クアットロは何度か彼女の事を調べていたのだがクオンは根っからの後方支援型、つまりは陣形でいうフルバックに値する。

彼女単体での戦闘力は小さいものだと思っていた、だが現実はどうだ？ガジェットは次々とシールドやバインドの爆破によって破壊されクオン自身にも完璧な防御、これをどうやって突破すればよいのか……

「くっ、ですが！！」

だがクアットロの目的はあくまでもゆりかごを軌道線上まで持っていく事、それができればゆりかご内の防御プログラムが全回復し、クオンてもなかなか手を出せなくなる
ようするにクアットロは時間を稼げば勝ちというわけだ

「……一気に決めましょうか……」

蟻の様にいるガジェットの群れ、流石に一つ一つ破壊するのは効率が悪いと考えたのか、クオンは一旦攻撃を止める、そして……

「四重魔法柱」

部屋の隅に四本の魔力で出来た柱が現れる
だがこんなもの、ミッド式でもベルカ式でもない……違う魔力形成

「これは！！」

クアットロが声をあげる、恐らくは知っているのだろう。
クオンはそんな声には目も向けず、そして

「迦楼羅（カルラ）」

その瞬間、全てのガジェットが巨大な爆発により消し飛んだ

第３８話　漆黒のガジェット（前書き）

もうテストだというのに……俺は何をやっているのだろうｏｒｚ

第３８話　漆黒のガジェット

「ったく、こんなわらわらと……１、２、３、４……２０体ぐらいか？」

ケントが呆れたようにやれやれといった感じでため息をつく

影の中で動く物体、それは少しづつ近づき、正体を現した……

「スカリエッティ！！」

フェイトが声を荒げる、まあ当然だろう、現れたのは［ガジェット］なのだから……

だがこれまでとは違う、いままでのガジェットは球体で全体的に青かったのに対し現れたのは漆黒に光る装甲の様なもので身を包んだ［人型］のガジェット、それぞれの手には剣やら斧やら銃を構えている

「お前！」

フェイトがスカリエッティを思いっ切り睨むがスカリエッティ自身、表情には出さないものの驚いていた

「信じてもらえないかもしれないがこんなもの、作った記憶がないね。

それに今まで私が何かを操っている様に見えたかい？もしあるとすれば全体に指示を出しているウーノぐらいなのだが……」

「そのウーノって奴ならお前が話してる間にプライバシーなんてくそくらえみたいな能力持ってる査察官が捕縛したと連絡がきたぜ、

まあお前の仕業じゃないってわかってるからいいよ。
それよりもう抵抗する気がないんだったらＡＭＦ消してくんないかな、こいつらの殲滅対象、お前も入ってるみたいだしさ」

「わかった、少し待ってくれ」

スカリエッティは空間ディスプレイを表示して作業を始めるが、

ガッ！！

剣を持った一体のガジェットがスカリエッティ向けて斬りかかる、そのスピードはこれまでのガジェットとは一線をこえていた、だがそれをケントは［閃光］を使い一瞬で移動して魔力を使わずに受け止める

「邪魔なんだよ！」

ケントが相手の剣を弾き相手の顎に肘打ちを決め、シーザーで胸の部分にあるコア？の様な物を貫く、それを見ていた？斧を持ったガジェットがまたも高速でケントめがけて斬りかかるが、

「おらよ！！」

胸を貫かれたガジェットを盾にして相手の攻撃を防いでしまう、斧というのは一撃の威力は高いがどうしても次の行動にはタイムラグが生じる、その隙をケントが見逃す筈がなくまたもシーザーでコアを貫く
まだ魔力を使っていない

「ふむ、ラボ内のＡＭＦ全て解除した」

フェイトはバルディッシュを構える、相変わらずケントは魔力を使わずに自身の技量だけで戦っているがそんな中刀を持つガジェットがフェイトに襲いかかる、だがＡＭＦが解かれたとなればフェイトは全力を出す事ができる

「はっ！」

ガジェットをも上回るスピードで後ろを取り一刀両断してしまう
恐らく、ガジェット一体一体の戦闘力はＢ～Ｃランクぐらいだろう、
前のガジェットとそこまで変わりがない、
そんな事を考えていると後ろから斧を振り落とされる、フェイトがとっさにバルディッシュでガードするが……

「えっ？」

違和感

フェイトはその場から飛び退く、バルディッシュを再び構えるがその形をみて驚く

バルディッシュの刀身が縮んでいる

徐々に元には戻っているがそれは自分の魔力を使い再構成しているからだ

ＡＭＦ？いや、そんなものではない、もっと強力な力

「これは……」

ガッ！

「っ！！」

今度は槍、それを避けきれずにバルディッシュでガードするが……

「また！！」

再び違和感、なにかこう、ゴッソリ魔力を持っていかれる様な……

「……今は考えてもしょうがない」

今はこのガジェット達を殲滅するのが先、誰の仕業かはわからないがこの事件が終わったら調査する、と、頭を切り換える

「あと八体！！」

隣からケントの声が聞こえる、一瞬だけ見てみるとまだケントは魔力を使っていない

ガッ！

「ハアッ！」

またも斧のガジェットが攻撃してくる、それをフェイトは避け、バルディッシュで横から斬りかかる、
だがそれを槍のガジェットが黙っている訳でもなく、阻止せんと突き出す

＞プロテクション＜

バルディッシュによる防御、それにより斧の方は破壊、槍のガジェットと向かい合う、
しかしフェイトはここである事に気付く

（さっきより……重い？）

バルディッシュによるプロテクション、それは真っ正面から攻撃を受け止めた、またも魔力が減ったがそれが問題ではない、問題はさっきより攻撃が重くなった事だ

（もしかして……魔力を吸収してる！？）

フェイトの考えは……正解だ

現にガジェット達は［相対している敵の魔力を吸収し続けている］立っているだけでは感じられないが着実に、魔力によって出来た物質ならそれが顕著に現れる

ガッ！

槍による突き、だがそれよりも早くフェイトはコアを破壊した
隣では……

「ラストォォォォ！！」

最後のコアをケントが破壊する、恐らく、もういないだろう

フェイトは自分なりに納得する

だから魔力を使わなかったんだと

だがそれと同時に［ケントがこのガジェット達を知っている］という事になる

だったらやるべき事は一つだ

「ケント、ちょっといい？」

「お疲れ様ですフェイトさん、まずはスカリエッティを引き渡してから地上の方と合流しましょう」

「うん、それはそうなんだけど……」

笑顔というのはいいものだ、特に美人の笑顔など最高だろう、だけど……

「ちゃーんと今回の一件、包み隠さずにおしえてね」

なんで、体が震えるのか？

「思ってた以上に硬かったな」

ヴィータは目の前の景色に只々某然としていた、なんせ自分がいくら叩いても壊せなかった代物をたった一撃で目の前彼女は粉砕機してしまったのだ。驚くなという方が無理だろう

「さてと、防御プログラムも作動しない様だし、帰るか」

「えっ？うわ！」

カイリはそう言うとデバイスと同じ様にヴィータを肩に担ぐ

「ちょっ、おまっ、もうちょっとマシな運び方はねーのかよ！」

「は？贅沢言うんじゃねぇーよ、文句言うんなら降りろ、その体で歩けるんだったらな」

ヴィータは押し黙る、今の自分は歩くなんて到底出来ない様な怪我をおっている、少々荒くてもここから出るには彼女に従うしかない

「じゃ、帰るぞ「ちょっとまってくれ！」なんだよ」

だけど戻れない、なぜなら……

「なのはが、なのはがまだ玉座の間にいるんだよ。あいつと約束したんだ、すぐに合流だって」

「あのなぁ、お前その体でどうするっつーんだよ、今お前が玉座の間に行っても足で纏い、簡単に言えば邪魔、わかるか？それにクオンの野郎だっているんだ。心配する事ねーよ」

「でも「クオンは私も気にいらねーが実力も確かだしケントに頼まれた事はどんな事があってもやり通す奴だ、怪我人は怪我人でベットで寝てりぁいいんだよ」……」

ヴィータは言い返せない、もしなのはが敵と戦闘中だったら確実に自分は足で纏い、最悪なのはを危険にさらしてしまうかもしれない、クオンの事はヴィータ自身あまり信用していないが実力は確かだろう。

「ちく……しょー」

「てめぇが弱いんじゃねえ、敵が大き過ぎたんだよ、よくやったと思うぜ」

そうして二人はその場を後にした

「う……そ……」

これが夢だったらどれ程いいだろうか、

蟻の様にいたガジェットが一瞬、一瞬で全滅したのだ。

自分の目を疑いたくなる

「終わり……ですね」

クアットロの目の前にクオンが降り立つ、あれだけのガジェットから攻撃されながらもその体には傷一つ入っていない

「諦めて投降しなさい、どう足掻いても無駄です」

クアットロとクオン、二人は後方支援型のエキスパートだ、だが戦闘面では圧倒的、クアットロには相手を倒すための能力などなく、自身を守るガジェット達も全て焼き払われた、もうクアットロが勝利出来る可能性は残されていない

「フフフフフ」

乾いた笑い
まだ作品があるのか、それとも自暴自棄になったのかはわからない
ひとしきり笑い続けた後、クアットロは話し出す
「流石は［天照式魔法］の使い手、と言ったところですかねぇ」
今までほとんど無表情だったクオンの表情が若干崩れる
「貴方の最後の魔法、あれを見なければ私でもわかりませんでしたねぇ～、流石、巧妙に隠されてますねぇ～、ミッド式の様に」
「無駄話しなど無用でｓ「獣人」……」
「人間でもなく獣でもない、そのせいで大量に捕縛され実験動物扱いでしたっけ～」
「お前……」
「ですから人間から逃れる為に獣人が作り出したのが　［天照式魔法］　後方支援に特化していて逃げるのには最適だったとかぁ～まあそれでも絶滅してしまったらしいですけど、たしかぁ～、その実験で作り出されたのが［使い魔］契約の魔法でしたっけ？」
またクアットロはフフフフと小さく笑う
「はぁ、私ももうちょっと早くに作られていれば、もっと［有効的な実験］に使ってあげましたのにぃ～」

バンッ！

「ハァハァ……」

「フフ、また随分と取り乱して、どうしたのですかぁ？」

殴った

あのクオンが……だ……

「今すぐゆりかごを停止させなさい、そうしなければ命の保証は出来ません」

冷たい声、射抜くようにクアットロにあびせる

だが聞こえてきたのはまた笑い声

空中モニターではなのはが何時の間にかヴィヴィオを助け出している

もうクアットロに笑う余裕などない筈だ

「なぜ笑う」

その問いかけに今度は盛大に笑い出し、そして……

「どうせ今のゆりかごではアランカンシェルで墜とされるのは目に見えてます。
なので……

今から約三十分後、宇宙からゆりかごの全エネルギーを使ってミッドを火の海にしますぅ～、そのあとはエネルギーの失ったゆりかごを中心部にむかってドッカーン、面白そうだとは思いませんか～？」

それを聞いた瞬間、クオンはクアットロを気絶させなのはの元へと飛んだ

第３９話　カウントダウン！！（前書き）

前半シリアスです……

ん？全部か？

第３９話　カウントダウン！！

「くっ、プログラムが複雑すぎる……妨害ができない」

クオンが悔しそうにつぶやく、今、この場にはなのは、なのはに抱えられたヴィヴィオ、クオンと気絶したクアットロがいる

［ゆりかごによるミッドチルダ上空からの一斉攻撃］

それを止めようとクオンが必死になって空中ディスプレイを操作しているが動力源が全て破壊されてしまった事によりゆりかご内の防御プログラムが作動、外部と通信する事すら不可能であり魔法も全く使えない状況にある

今こうして空中ディスプレイを展開する事もクオンにとってはかなり過酷だ。

だがそれでも必死に外との連絡をとろうとクオンがゆりかご内のサーバーにハッキングをかける

「せめて、外にこの事を伝えられれば……」

なのはも悔しそうに嘆くが現状は悪化するばかり……

実質、スカリエッティがミッド中心部で何かしらやらかすと予想はしていたので関係の無い一般市民は殆ど避難している。

これまで避難していなかった人達もゆりかごが上空に上がった事でこの数時間の間に避難は完了しているだろう。

危険なのは、局員……

なのはは悔しそうに顔を歪める

ヴィヴィオはそんなママが心配なのか、じっと顔を見つめていた

そのとき……

ズガガガガン！！

盛大な音をたてて崩れ落ちる壁、そしてそこにはなのはの教え子達、

そしてクオンは……

「外との連絡、可能になりました」

一息ついてそう答えた

「ゆりかごを使っての一斉攻撃か……」

ケントがクオンから送られてきた通信に一度舌打ちする

後ろから驚愕の声が上がるが直ぐにそれぞれの部隊の隊長達が部下に指示をだしてミッドから避難するように命じる

「内側からどうにかなんねーのか」

『無理ですね、時間があればなんとかできると思いますがあと十五分弱、すみませんマスター……』

「お前が謝る事じゃない、お前となのはは救助に来たスバルとティアナ、二人を連れてより遠くに避難しろ」

『了解しました』

そう言って通信を切る、周りを見れば各部署の局員達が我先にとばかりに避難を始めていた、中には悔しそうに空を見上げたままの地上の局員が大勢いたが隊長の一喝でその場を後にしている

「ケント……」

後ろを振り向く、心配する様にこちらを見つめるエリオとキャロ、二人を抱く様にして慰めるフェイト、そして気を失っているルーテシア……

「どうするの？」

フェイトが心配そうに語りかけてくる……当たり前だ、たった十五分、それだけの時間で全局員がミッドをはなれるなどとうてい不可能……はっきり言ってしまえば恐らく……半数以上が死ぬ非戦闘員など……生き残る事は出来ない

次元航空船がミッド上空の宇宙に着くまでまだ約一時間弱ある、もうこれは……免れない……

「俺達も……ここを離れよう……俺達の技量なら……生き残れる」

「でも「ごめん」……」

「ホントに…ごめん……」

いくら［大将］といえど……いくら［最強］といえど不可能な事など山ほど存在する

あの巨大なゆりかごの破壊など……彼には到底できることではない。出来るならとっくにやっている

「フェイトさん、エリオ、キャロ、フリード……行こう……」

ケントは後ろを向いて歩き出す……もう周りには局員など数えられる程度の人数しかいない

地上本部には沢山の人がまだ残っている

ミッド中心部にはガジェットとの戦いで動けない局員も大勢いる

スカリエッティのラボには、まだ生きている人もいる

だけど……もしここで立ち止まってしまったらエリオやキャロも巻き込んでしまう

そんな感情がフェイトの心に渦を巻く

「フェイトさん……」

エリオが心配そうに覗き込む……そして…

「エリオ、キャロ……行こう」

フェイトはその場を後にした

「八神部隊長！！もう、時間が……」

「はやてちゃん！！」

ロングアーチとリインから声をかけられる、ゆりかごによる攻撃まであと約十分……その中ではやては出来るだけ多くの局員を逃がそうと必死に誘導していたが……時間が少な過ぎた……

「もうちょっと……もうちょっとやねん！」

［もうちょっと］と言っているがまだまだ地上本部には沢山の局員が中にいて……さらにミッドからも逃げないといけないのだ……地上本部から逃げ出せたとしても恐らくは逃げる途中で……

ブンブンと頭を震わしてネガティブな思考から逃れる、なんて事を考えているんだと……絶対全員助けるんだ……と……

「主！！」

「っ！シグナムか！！」

やって来たのはシグナム、だが背中から炎の翼をはやせ、バリアジャケットの色も変わっている

「主はやて、もう時間がありません、直ぐにここから避難を！」

シグナムは必死にはやてを説得にかかるが…

「ごめんなぁシグナム……もう少し……もう少しなんや……」

はやてはもう無駄だと分かっていながらその場を離れようとはしない、その答えにシグナムは一旦目を閉じ

「お許し下さい、主」

手刀……それははやてに綺麗に直撃し、彼女は気を失う
シグナムははやてを抱きかかえながら、その場を後にした……

「ここまで来れば……大丈夫だろ」
周りには沢山の局員がいる
あるものは地上本部をじっと見つめ
あるものは地面に伏して
あるものは自身の隊長の命令に対して怒鳴り散らし
あるものは引き返そうとして仲間に止められている
「攻撃が終わったら……救助しに行きましょう……そして全員……
助け出しましょう」
ケントがつぶやく、フェイトはそれに頷く事しか出来ない

遠くに見えるゆりかごはここまでかなりの距離だというのにはっきりと確認出来る
あと……約三分……
「さて…と！！」

ガキィン！！

「えっ！ちょっ！」

ケントが背伸びをしたと思ったらいきなりフェイトにバインドをしかける

「ケント！どういう事！！」

フェイトが叫ぶが同様に隣にいるエリオとキャロにもバインドがされていて身動きが取れない

「フェイトさん、ゆりかごからの攻撃が終わった後……［俺の救助］、お願いします」

「えっ？」

ケントは彼女に少し苦笑いして答える

「俺が無茶しようとすれば必ずみんな追っかけて来ちゃうと思うん

ですよ。なので此処まで来て貰いました。」

「無茶って……」

ケントは一度目を閉じる

「恐らくはゆりかごの攻撃を止める事はまず無理でしょう。なので……

ゆりかごからの攻撃を……全て撃ち落とす！！」

そう言って、彼はその場から消えた

ｓｉｄｅ　　ケント

＞全くうちのダメマスターは……無茶しかしないわね～＜

「悪かったな無茶ばっかで！！」

＞その前に体、いかれるわよ？抵抗とかで＜

「わかってる！！」

［閃光］は確かに強い能力だけど連続での使用は出来ない、いくら身体強化していても空気抵抗やらその他もろもろは真っ正面から受ける事になるからな～、まあそれを解消する為に使うのが……

バサッ！！

飛天王の［翼］、これを使えば閃光によるダメージをほぼ０にする事が出来る、後からくる激痛はきついけどもとより使うつもりだ、本気で止めるにはこれでも足りないかもしんねぇ

ゆりかごからの攻撃まであと約二分……いけるか？

＞死なないようにね＜

「誰に向かって言ってんだ？俺がそう簡単に死ぬわけがねーだろ！！」

まあ死にはしない様に頑張るけど大怪我は確実だな～　ハハハハハ～　↑乾いた笑い

＞はぁ、まっ、最後まで付き合うわよ。［あそこ］から逃げた時だってそうだった……＜

「ありがとよ」

ミッド中心部にたどり着く、目の前に見えるのが……地上本部……下を見てみるとガジェットとの戦いのせいで倒れている局員、必至で逃げている非戦闘員とかもかなりの数がいる

俺が飛んでいるのは見てない、いや、早過ぎて見えないんだろう

＞あと一分ないわよ＜

「了解！！」

全速力、そして……

＞来た！！＜

俺は空を見上げる、空は真っ赤、小さなレーザー的なものや白い魔王様の砲撃、さらには質量兵器のオンパレードが雨の様に降り注いでくる、もしこれが中心部に直撃したら塵一つ残らないだろうな、……

「さあて」

シーザーに魔力を溜める、
これだけの攻撃だ、動力源が全て破壊されてもやはり古代ベルカの遺産というわけか……うう、勝てる気がしない……だけど…

俺がここで止めないと誰が一体この破壊の雨を止める？
何人の人間が死ぬ？
そんなこんなで、こっちも譲れない訳だ
フェイトさんにも救助、お願いしてしまったしな

「いくぜ……シーザー……」

＞了解！マスター！！＜

「あ～大丈夫かな～、死なないかな～」

ミッド中心部、とあるビルの屋上、そこに金髪の青年はタバコを吹かしながらケントを眺めている、その顔はどこか愉快そうで、楽しそうだ

「報告します」

「ん？どした？」

青年の後ろに現れたのは［カナ］ケント曰く［姉］

「スカリエッティを殺す為に送り込んだガジェットは全て破壊されていました。映像データを解析しましたところケント、それからフ

エイトTハラオウンが破壊したのかと、スカリエッティは生存しているのですがどうしますか？指示を下されば新たにガジェットを送り込みますが」

「その必要はないよ～ん、それよりもさあ、ゆりかごがここに落ちてくるんだって、［あれ］を使ってケントをびっくりさせたいから準備してって連絡いれて～」

「了解しました」

そう言ってカナはその場から離れる、青年はニコニコしながらケントを見続ける

「むふふ～、楽しみだ、

俺の［最高傑作］がどれ程のものか、しかと拝見させて貰おう」

第３９話　カウントダウン！！（後書き）

シリアスだし終わり方微妙、次どうやって始めようか……

第４０話　一つの終わりと一つの始まり（前書き）

み、短い……ｏｒｚ

第４０話　一つの終わりと一つの始まり

ｓｉｄｅ　ケント

「ここ……は？」

目が覚める、まだはっきりとは起きていないようで視界が少し霞むが大丈夫だと思う。
どうやらベッドの上、どこだここ？

「っ！！いて～！」

なんだよなんだよ！体中が痛ぇぞ！

「ん、起きたか」

「目が覚めたら見舞いに男が来てたとか萎える、こういう時は美女じゃないと」

「フェイトが三十分前までいたさ、その時に起きていなかった君が悪い」

目の前の男、シスコｎ……ゴホンゴホン、クロノがいた、なんでいんだよ

「まあお前がなぜここにいるのかは置いといて……ここどこだ？」

「聖王病院だよ、君が血まみれで発見されてから十日、十時間の手術が終わってから八日、一人でゆりかごからの集中攻撃を止めよう

とするなんてね。相変わらず無茶ばかりするな君は」

……そういえば俺はゆりかごからの攻撃を止めようとして死に物狂いで攻撃を防ぎきって……エネルギーを無くしたゆりかごが落ちて来て破壊しようとしたら……意識を失った……って！！

「地上は！ゆりかごによる被害者は！！あの後どうなった！！」

「おっ、落ち着いてくれ、順番に話す」

落ち着いてなんかいられるか！！ゆりかごみたいなデカブツがミッド中心部に落ちたのなら被害は計り知れないだろ！！

「だったら早k……がはっ！」

口から生温かい液体が流れ出す、これは……血？

「あれだけの時間翼を使ったんだ。誰にもばれないようにしておくから……君は耐えろ」

「まじかよ……何度なっても、これはかんべんだ、よ！」

その後俺は盛大に吐いた、そこから先は……意識が飛んだ

s i d e　　3人称

「大丈夫か？」

意識を失ってるだろうケントにクロノは言葉をかける

ケントが叫び、もだえ、苦しみの声をあげ始めてから三十分……地面には血の池が出来ており何処かの殺人現場の様になっている

「ハァ……ハァ……もう、大丈夫だ。」

荒い息をしながらゆっくりと目を開ける、クロノは一度軽い溜息をつくと部屋にある椅子にかける

「ゆりかごだったな」

「ああ」

「公式には［ギリギリたどり着いた次元航空船によるアランカンシエルによって破壊］とされてるよ、君の活躍もあって地上への被害はほぼ0だ。そのせいでケント、君はヒーローなんて呼ばれてるよ」

「よかった、だがヒーローなんて御免だな、俺は偽善の正義を振りかざすただのバケモンだ」

「それでも君がいなければ今頃ミッドは跡形も無く生滅していただろう？胸をはってもいい」

ケントは苦笑してから立ち上がる。

「だけどあの時俺にゆりかごを破壊出来る用な力は無かったし、その前に力尽きたぞ？」

そう、ケントにはゆりかごに攻撃した記憶が無い、その前に意識を失ってしまっている。

ケントの問いを聞いたクロノは一度目を閉じると重々しく口を開いた

「ゆりかごは……消えたよ」

「消えた？」

「ああ、ゆりかごの下にあった空間が捻れるようにしてね、そのままゆりかごは姿を消した」

「どういう事だよ……それ」

あの巨大なゆりかごが消えた？空間が捻れた？そんな事はあり得ない

「そして、これ」

クロノはポケットに入っていた何かを取り出す

「それは？」

「携帯端末だ、君が見つかった時に握りしめていたよ」

「俺が？」

「一つ、音声が登録されている、さて、僕は仕事に戻るとするか」
そう言って部屋から出て行く、ケントは少しベッドに横になった後、
端末に保存されている音声を流す
そこから聞こえてくるのは若い男の声、その声はカレンを従えてい
た金髪の男の声だ
ケントは音声を聞き終わったあと、もう一度ベッドに横になり、

端末を握り潰した

side　？

「ついに……この時がついに来た」

機動六課前、そこになぜかは知らないが喜びに身を震わせている青年がいる

なびくような銀髪にスラリとした背丈、さらにはオッドアイというイケメン君だ

「この世界に生まれてから二十年、生まれた世界は辺境の管理外世界、此処まで来るのに俺がどれ程の苦労をしたか……」

拳はプルプルと震えさせ、自身の過去を回想し始める

「ここから、ここから俺の物語が始まるんだ、これまで我慢に我慢を続けた俺の物語が、この［オリ主］の物語が、待ってろよ、なのは、フェイト、はやて！！」

男は勢いよく走り始め、思いっきり地面を蹴って叫ぶ

「原作介入だーーーーー」

第４１話　銀髪オッドアイ厨二病全開君（自称オリ主）

ｓｉｄｅ　ケント

「酷い目にあった……」

目が覚めてから半日か？

クロノが帰った後がものすごく大変だった…

フェイトさんには抱きつかれるし

はやてさんには説教されるし

なのはさんにはＯ☆ＨＡ★ＮＡ☆ＳＩ★させられるし

クロノはもう一度来て「フェイトに手を出したか」とか言って問答無用で永久凍結魔法使ってくるし……あっ、発動する瞬間にピンク色の光によって星になったけどね！！

まあそんなこんなで疲れた、シーザーはメンテの途中らしい、フレームがところどころ破損したんだと、ちゃんと謝んないとな……

前置きはその辺にして……

「新しいメンバーね～」

何でも六課に新メンバーが来るとはやてさんが伝えてきた、何でも辺境の管理外世界で生まれ、一年前ぐらいにそこで起こった小規模なロストロギアの事件に関わってこっち（ミッド）に来たんだと、

魔力量はＡＡＡランク、ただ実戦経験が余り無くこの一年はずっと訓練、階級は二等空士で本人が強く六課を希望してるんだとてか銀髪にオッドアイって……

「その前に所属は何処になるんだ？」

見た感じ丁度二十歳だが実戦経験が少ないとなるとスターズやライトニングに［新人］として入る事になるどちらかと言うとスターズかな？ライトニングには俺がいるから副隊長が一人多い訳だしＡＡＡランク相当の魔力の持ち主だ、管理局としては、なのはさんに付けて使える人材にしたいところだろう。

「俺も一目見たいんだけど、無理だろうな～」

一様もう体的には殆ど回復しているんだけどもやっぱ手術した事もあって一ヶ月は入院してくれだと……はぁ……

「暇だ……」

ｓｉｄｅ　六課

「やっぱりスターズなんだよね」

「そやで～、将来期待できる人材や、しっかり教えたってよ～、なのはちゃん！」

ケントの予想通りかの自称［オリ主］君はスターズになるらしい、はっきり言ってしまうとなのはもはやてもその新人と会った事が無い、何故彼が六課に来たいのかは知らないが、なのは自身、［強くなりたい］ならば一人の教導官として全力でサポートするつもりでいる。

「けど一先ず一見落着やで～、事件が終わってから十日、ずっと書類書類書類やったもん、しばらくはやてさんはお休みや～」

「ですぅ～」

はやてがぐだぁ～と机にもたれかかると隣でフヨフヨしていたリインも同じくぐだぁ～と寝転がる、彼女が言う通りこの十日間は猫の手を借りたいほど大変だった。

なのはやヴィータは入院、それによって残った六課メンバーの仕事が一段と増えてしまったのだ。はやて自身殆ど寝れていないのだろうか……

スカリエッティの逮捕に率先して行動していたのは六課だ、その分後片づけも多くなる。

そんな机でぐだっているはやてを見てなのははお疲れ様と苦笑しながら声をかける

ちなみに今フェイトはこの場にいない、なんでもスカリエッティに「聞きたい事がある」と言って今日は六課に帰って来ないらしい

「それよりもクオンちゃんは何処行ったんやろ～な」

「そうだね、気づいたらいなくなってたし」

クオンはなのは達を避難させた後さっさと何処かに行ってしまった、ヴィータの話によるとカイリと言う少女もまた、ヴィータを病院に連れて行った後消えてしまったらしい

部隊長としてお礼の一つは言いたいのだろうがいなくなってしまってはしょうがないだろう

そして……

「失礼します」

「入ってええよ～」

そう言って、あの銀髪オッドアイ厨二病全開君が入って来た

ｓｉｄｅ　　銀髪オッドアイ厨二病全開君

俺の名前はクラウス・Ｄ・ドレアー

初めに言っておこう、俺は

転生者だ！！！

初めはビックリしたさ、いきなり世界が暗転したがと思うと目の前に自称神（笑）がいてね～、なんでも間違って俺を殺したらしい、まあ心の広い俺だ、神（笑）に「リリなのの世界に転生させてくれたら許す」と軽～い条件で許してやったさ、そしたら［似た様な平行世界］に転生させてくれると、俺は飛び上がって喜んださ、なんだってテンプレだぜ！二次創作だぜ！こんな事が現実にあるなんて夢にも思わなかったさ！

まあその時にちょくちょく特典を貰ったがね。

だがあの人神（笑）……こんな心の広い俺に何をしたと思う……確かにリリなのの世界に転生と、言ったさ……だが俺が生まれたのは魔法もクソもない管理外世界……地球でもないんだせ！？主人公達と一年違いだから十才までには！と思ってたけど介入出来ず。…だが俺は諦めなかったね、十八の時に俺の星で小規模だがロストロギアの事件が起こったんだよ！

俺はデバイス無しで必死に練習した魔法と特典を使って見事解決してやったんだ！

だったら俺の魔力量を見た管理局がスカウトして来たって訳だ！

本当はなのは達が俺を六課にスカウトしてくれたら嬉しかったんだが原作通りＦＷは四人、だったらと思って必死に自分の部隊長に志願したよ
そして俺は今此処にいる……何でも六課の試験期間が二年になったらしい、これが原作と似た平行世界と言う事か？ＪＳ事件が終わってしまったのは残念だが六課にいれる時間が長くなったのは嬉しい限りだ
残り一年、この完璧な容姿でハーレムを作ってやる！！
っと、その前にはやててての挨拶だな
部隊長室は……ここか

「失礼します」

「入ってええよ～」

な、生はやて声！！
感動だ、この二十年間会いたかった人がこの扉の奥に！！

扉が開く、な、なのはだと！！主人公キャラと初めに巡り合わせるなんてなんたる幸運！これが俺、［オリ主］の力というのか！！

「今日から配属されましたクラウス・Ｄ・ドレアーです。一年という短い間ですがよろしくお願いします！」

やっべ！むっちゃ緊張してるし！やっぱり可愛いな～二人とも……だが焦っちゃいけねぇ、ゆっくり、ゆっくりハーレムを作るんだ。慎重に丁寧にな！この一年が終わる頃には原作メンバー全員を性奴隷に……

「う、うん、よろしく頼むよ～、期待……してるからな～」

「はい」
お？緊張してるのか？やっぱりイケメンを目の前にするとはやてでも緊張感するよな～、早くもフラグゲットか？
「じゃ、じゃあ、今日は荷物を整理して休んでな、明日からデスクワークと訓練頑張ってもらうから」
「はい」
なのはは一言も喋らなかったけど緊張していたのかな？いずれ俺のものになるんだから緊張しなくていいのにな
ふふふ、明日からハーレム作りの為に頑張りますか！

「なあなのはちゃん」
「何かなはやてちゃん」
「初対面の相手には失礼やと思うんやけど……」
「大丈夫だよ、私も思ったから」
「うん、なんか……」

「「気持ち悪かった」」

side　3人称

「おやおや、仕事はいいのかい？テスタロッサ執務官殿？」

「お前に聞きたい事がある……スカリエッティ」

次元拘留所内、魔力で遮られた窓を挟んで話している人影が二人……一人はフェイトで一人はスカリエッティ

「お前の研究所内で話していた事……あれは本当か？」
「うむ、多すぎて何を聞きたいのか分からないのだが、もう少し絞って質問してくれないか？」
「全部だ！！ケントはプロジェクトFによって作り出されたのか！？彼に心が無いとはどういう事だ！？飛天王とは何だ！？何処の研究者が彼を造り出した！？」
あらん限りの声を出して怒鳴りつける、スカリエッティは「ふむ」と一つ呟いた後腕を組む
「まあケント君が人造魔導師だと言う事は間違い無いね、デバイスが物語ってるよ」
「そん……な……」
フェイトの声から落胆の言葉が漏れる、それ程までに今の言葉は彼女の傷をえぐった
「誰だ」
「む？」
「誰が彼を造り出した」
「そんな事を聞いてどうするんだい？」
「私が……ぜったいに捕まえる」

決意の言葉、フェイト自身プロジェクトFによって造り出された身だ。
その傷は自分が一番理解している
だからもう、この悲劇を繰り返さないためにも、どんな事があっても彼女は戦う事を選ぶ

「君に彼を捕まえる事が出来るとは到底無理だとはおもうがね」

「それでもだ！！」

さっき以上の怒鳴り声をあげる
それを見てスカリエッティは引きつった笑みを浮かべると

「ククク、だったら教えよう、ケント君を造り出したのは「それ以上言えば首が飛びますよ、ジェイルスカリエッティ」……」

スカリエッティの首元に短剣を押し当てているのはクオン、これ以上スカリエッティが口を動かせば容赦無く彼女はスカリエッティを殺すだろう

「どうして！？」

「貴方方には関係の無い事です。余りですぎた真似をしますと、貴方も殺しますよ？フェイトさん」

キッ、とクオンはフェイトを睨みつける。
フェイトは睨まれた事によってこれ以上言葉が続かない

「スカリエッティ、貴方は部屋に戻りなさい」

「人使いが荒いね、君は、せっかく

彼女に［絶望］を見せる事ができたというのに」

スカリエッティはそう最後に言い残し、部屋を後にした

オリキャラ設定2（前書き）

コロコロ変わってすみません。
少しばかりネタバレ含むかもしれません

※カイリとクラウスの名前がごっちゃになってましたので修正しました。Σ（・□・；）

オリキャラ設定２

ケント・スカイ

魔導師ランク　ＳＳ＋

魔力量　Ｓ相当　（飛天王状態時ＳＳ）

魔力光　白と黒の混色

階級　四代目本局大将

出身　？？？

魔法形態　ミッド主体ベルカ混合

年齢　１９歳

身長　１６４ｃｍ

体重　５１ｋｇ

希少能力１　閃光

希少能力２　飛天王状態　（未覚醒）

好きな事（物）　甘い物・読書・空を眺める・ラーメン　ｅｔｃ

嫌いな事（物）　　心霊系全般・デスクワークｅｔｃ

黒髪に青い目をした青年、顔は整っており背が高いと［かっこいい］なのだろうが残念ながら低いため［かわいい］と認識される事が多い。
ケントの過去を知っているのは親友である　［クロノ・ハラオウン］　聖王教会騎士で少将である［カリム・グラシア］　そしてかの三提督　［レオーネ・フィルス］　［ラルゴ・キール］　［ミゼット・クローベル］など
アグスタの時に対峙した女性［カナ］とは面識があるがその仲間である［ボルス］や［ファンタジア］とは面識がない
フェイトの好意には薄々気づいているが自分にはそんな資格はないと言って距離をとる。
また、自分を［化物］や［怪物］と言う時もしばしば……
基本的に優しい性格であり誰からでも好かれるが、女性陣などからの目が身長の事があって、子供を見る目になって来ている事が最近の悩み
プロジェクトＦの応用によって造り出された人造魔導師であり、初代飛天王メビウスの血を引き継いでいる。
過去にあった出来事により［心］が壊れてしまっていてシーザーの力により［擬似的な心］によって自分を保てている。

クオン

魔導師ランク　ＡＡＡ＋

魔力量　ＡＡＡ

魔力光　純白

階級　四代目本局大将補佐

魔法形態　天照式

出身　本人にも分からない

年齢　本人にも分からない

好きなもの（事）　油揚げ　きつねうどん　きつねそば　いなり寿司　ケントの役に立つ事

嫌いなもの（事）　違法研究者　マッドサイエンティスト　ケントの敵

容姿は森羅万象チョコの四代絶影クオン　（作者が好きだから）

ケントの使い魔

冷静な性格で大人しい、ケントを尊敬、敬愛しており彼の右手となって働く

バインドやシールド、幻術など、補助系のスペシャリスト、シールドは耐久ランクＳＳとかなりの実力者だがその分、砲撃や斬撃など

の攻撃魔法のランクはCである
クオンが使う遠距離で発動するプロテクションはクオンにしか出来ない、彼女曰く「なんか出来た」らしい……
またシールドを他の場所に何個も展開させたり、バインドを瞬時に発動させたりといろいろと常識外れ
昔、尻尾が九本であり［獣人］と珍しい狐という事から違法研究所で捕まり、毎日地獄の様な日々をおくっていた
ケントがその違法研究所を破壊しクオンを発見、衰弱して死んでしまったところをケントが使い魔にした

カレン・マーベル

魔導師ランク　S＋

魔力量　S＋

魔力光　緑

階級　三代目地上本部大将補佐

魔法形態　近代ベルカ式

出身　第12管理世界フェディキア

年齢　18歳

身長　　１５９ｃｍ

好きな事（物）　　熱く燃えあがれる様な戦い・料理・武器・風呂・ぬいぐるみ　　ｅｔｃ

嫌いな事（物）　　弱々しいやつ・デブいやつ　ｅｔｃ

性格はハンドル持ったら性格変わるあれ……カイリは武器を持ったらシグナム以上の超戦闘狂になる
二～三メートルにもなる大刀を片手で振り回したりとかなりの力持ち武器を持っていないときは逆に弱々しくすぐに謝ったりする引っ込み思案な女性であり、戦闘時の彼女とは正反対の女性になる

クラウス・Ｄ・ドレアー

魔導師ランク　　Ａ－

魔力量　　ＡＡＡ

魔力光　　銀

階級　　二等空士

魔法形態　　ミッド式　（カードリッジシステム有り）

出身　第１４７管理外世界トルディア
年齢　二十歳
身長　１８５ｃｍ
体重　７６ｋｇ
好きな事（物）　エロい事・原作キャラ・妄想　ｅｔｃ
嫌いな事（物）　男キャラ・ケント・運動　ｅｔｃ

特典１　銀髪オッドアイのイケメン
特典２　ニコポ・ナデポ
特典３　幻想殺し　（自分の魔力には不干渉）

転生者であり前世はデブのきもオタ、死ぬときは白昼堂々エロ本読みながら歩いていてトラックに跳ねられ死亡
まっくらな場所で神？に出会いこの世界に転生したが生まれた場所が管理外世界……
十八年間原作に関わろうと努力し、小規模のロストロギア事件を解決した事により管理局の目に留まった
三つまで貰える特典の内二つ目のニコポ・ナデポによって本局でかなりの数の女性を惚れさせたが原作キャラには通用しない。ちなみに本人はそれを知らない

右手にやどる幻想殺しは自分の魔力には無感情な為魔力を使いながら戦う事が出来る。
イレギュラーであり、自分の一番お気に入りであるフェイトが好意を寄せているケントを目の敵にしている。
自称オリ主

カナ・スカイ

魔導師ランク　ＳＳ＋相当

魔力量　ＳＳ相当

魔力光　漆黒

魔法形態　ミッド主体ベルカ混合

出身　？？？

年齢　２３歳

身長　１６７ｃｍ

希少能力１　先駆け

希少能力２　絶対破壊

希少能力３　飛天王状態［黒ノ王］

ケントの姉であり七代目飛天王［ガゼル］の血を引き継いでケント
と同じ様に造り出された人造魔導師
黒髪で青い目をし、胸の膨らみはシグナム達に劣らない
漆黒の槍をデバイスにして四代目大将であるケントに余裕勝ちする
実力を持つ
金髪の謎の青年を主とし、行動する。
基本的には弟思い
飛天王状態を黒ノ王にし、完全に覚醒させている

第４１．５話　　これから旅行らしい

「やはり、きつい……この…量は……」

「しっかりしなさいよ、ホントに体力ないわねあんた」

「あはははは」

六課訓練所、そこにｏｒｚしているクラウス、それを上から目線で見下げてるティアナと愛想笑いしているスバルの姿がある。
その隣にはエリオとキャロの姿もあり皆訓練服だ……

「最年長なんだからしっかりしなさい、足引っ張ったら容赦しないわよ」

「い、イエッサー……」

時間はもうお昼、丁度午前の訓練が終わった時間だろう。
エリキャロコンビは仲良くストレッチしているがクラウスは汗をダラダラ流し非常に暑苦しい、いくら転生したとはいえ以前は運動なんてからっきしの駄目人間なのだ、当然と言えば当然だろう。

一週間前、朝の自己紹介の時点では皆からの反応は悪くは無かった、むしろ良かった方だろう。
何しろヴィータ並の魔力を持つ人間だ。戦力アップには十分だろう。
だが魔力はあっても経験や体力はどうしよもない、朝のアップから疲労困憊で歩けない程にまでなっていたのだ。この訓練メニューに慣れてしまっている人間から見れば悪態の一つつきたくなるだろう。

このメニューに慣れてしまっているＦＷ陣が異常なだけだが……

「フッ、あと一週間……いや、三日で克服してみせるさ、な～に、俺はオリ主、出来ない事などない！！」

「はいはい期待しとく、それよりもスバル、エリオ、キャロ、ご飯食べに行きましょ」

「待ってくれティアナ、動けないだ、手を貸してくれ」

「オリ主なんでしょ、だったら自分で立ちなさい」

「ツンデレだな～、ティアナは……」

「ねぇスバル、殴っていいかしら、こいつ」

「てぃ、ティア！！少し落ち着こ？」

「我々の世界ではそれをご褒美という」

「永眠しろ！！」

今日の六課は平和である

「旅行？」

「うふふ、そうよ」

機動六課の部隊長室、そこにこの部屋の主でもあるはやてが空中に展開されたモニターを見ながら声をあげる
隣にはいつもの様にリインがフヨフヨと浮いていないのでどうやら仕事中らしい
そしてモニターに通して話し合っているのは聖王教会の騎士、カリムだ

「ちょっ、いきなりすぎへんか！？事件が終わってからまだ殆ど経ってへんねんで！！管理局が今休みくれるとは思えへんし」

「あら？休みなら取れてるわよ？」

「うそ！？」

またまたはやては驚きの声をあげる、このクソ忙しい時にいくら有休が溜まっている六課の隊長陣といえども休みなど取る事は不可能なはずだ

「彼は三提督を除いては本局のトップよ？それぐらい簡単だとおもうけど」

「は、発案者はケント君か！？」

彼、ケント・スカイは詳しくはまだ聞いていないが機動六課に二等空尉と名乗りこの六課にいたが本当は本局の大将である事が事件の内に発覚したのだ。彼の意見ならば少なからず上層部はその意見に賛成するだろう。

だが……

「なんでよりにもよって旅行？」

「言っていたわよ「あいつらは仕事が恋人のワーカーホリックかぁぁぁぁぁ！！」って、事件の後の処理のせいでろくに休めてないってわかったのでしょう」

「反論でけへん……」

「だから強制的に休ませるって」

「そうか～」

あはははと乾いた笑いをしてみる

「お手上げやわ、私はとにかくなのはちゃんやフェイトちゃんもかなり疲れたまっとうと思うしな、行き先は何処なん？」

「やっぱり都会より体を休めるには自然がたくさんあった方がいいかなって、だから行き先は……

第２３管理世界［ルヴェラ］よ」

「くーーー！！歩けるって最高！！」

オッスおらケント！！
いきなり声を上げたせいで道ゆく人が振り向いてるが気にしない、
そこのお母さん、子供を「見てはいけません」いうな……

それよりも聞いてくれ、やっと、やっと［歩くこと］が許可されたんだよ！！

確かに酷い怪我で［絶対安静］って言われてたさ、けど一日中ベッドの上、更にはシグナムさんが……

「これがお前の分の仕事だ、一日中寝ているのなど退屈だろう？」

と、紙の束を持ってきたときは断れなかった、だって目の下にくま作って恨めしそうにこっち睨んでくるんだぜ！？
更には顔は［断ったら叩き斬る］って表情してるし……
なんでも一週間前、終わったと思って脱力しきっていた六課に追加の仕事がきたんだと、そのせいで隊長陣はろくに寝れず……

そこで考えついたのが旅行！！
都市部ならあのワーカーホリック娘達は無理にだも仕事しそうだから自然保護区がある場所という考えだ！！
旅行中なら俺への仕事も無いと思うしな！！
その事をクロノに伝えたら凄く嫌な顔してたけど……大丈夫だろう

「大丈夫な筈がないだろう、よりにもよってこんな時期に……」

「いつからいたし、てかなんで俺の考えがわかる？」

何時の間にか後ろにはクロノ、ストーカーか？

「途中から口に出してたぞ」

マジか……

「上の許可取るの大変だったんだからな、まあフェイト達はやはり働きすぎだと思うから提案自体は悪くはないが」

「まあそこら辺は気にすんなって、数日抜けるぐらいたいしたことないだろ！」

クロノが一度マリアナ海溝より深いため息をつく、落ち込みすぎだよ……

するとクロノが大きく息を吸い込んで……

「だからと言ってなんでさりげなく僕の所に君の仕事が混ざってるんだ！！」

「えっと……気分？」

謝るから謝るから！！だから無言でデュランダル向けてくるのやめて！！目が殺る気だよ！！

「ったく、預かり物だ、返しとくよ」

「？、ってシーザーか？」

「彼女から伝言だ「定期的にメンテにくる事！デバイスに余り無茶はさせてはいけないです！！」だってさ」

＞クソ馬鹿マスター＜

「す、すみません」

第４２話　この頃びっくりするぐらい書けない……軽いスランプ状態だー！

間が長い上に短い……さらに駄文
ホントにやばいかも…（ー＿ー；）

第４２話　　この頃びっくりするぐらい書けない……軽いスランプ状態だー！

ミッドチルダ、とある首都空港
そこでは……

「サ、サイン下さい！！」

「ずりぃぞ！！俺も！！」

「何言ってんのよ！私が先よ」

「握手して下さーい！！」

そこには人人人人……　以下略

大勢の人の波が出来上がってしまっている。
そしてその中心にいるのが……

「えっと……にゃはは……」

「す、すごい人……」

「あちゃー、やってしもうたなー」

「幾らなんでもこりゃねーだろ」

そう、ケントを含めた六課隊長陣とＦＷ達だ。
スカリエッティによる大規模テロからはや一ヶ月ちょっと……ケ

ントも無事退院し、今日からケントが企画した旅行がスタートなのだ。
勿論六課全員で行って仕事が全く出来ないのもあれなので三グループに別れての旅行……そうして始めは前線メンバー達というわけだ。そして六課といえば事件を解決に導いた［奇跡の部隊］でありケントに至ってはミッドチルダが壊滅する様なゆりかごによる攻撃を［たった一人］で食い止めたある意味［英雄］だ。［大将］というのはうっかりスカさんが六課にのみ公開してしまっただけであって一様管理局の機密事項だ。まだ公には知られてはいないがやはりそんな英雄達の顔なんて当たり前の様に知られてしまっている状態で空港に来たならば当然、誰かが気付いて話しかける。それを周りの人間が聞いてまた集まってくる。それを繰り返し今この状況だ……

「これじゃあ前に進めませんね」

「エリオ、キャロ、ちゃんと手をつないどこうね。迷子になったら大変だしね」

「あ、はい！」

「ティアティア～、向こうのアイス屋さん美味しそうだよ！行こう行こう！！」

「この状況でどうやって行けってゆうのよ馬鹿スバル！」

と、警備員が目の前で食い止めてくれているとはいえこれでは前に進めない
ちなみに今いる場所は２１番ゲートで自分達が乗る次元航空船がある場所は４０番ゲートだ。実質まだまだある

「ん、じゃっお願い」

「？誰と話とったん？」

ケントが何時の間にか誰かと通信していた。それを見てはやてが首を傾げる

「ああ、パイロットですよ、船の。２１番ゲートまで持って来てくれるとは様に頼みましたからすぐ来ますよ」

「え？でも私ら以外にも沢山乗る人はおるやろ……そんな事してほんまにいいん？」

「大丈夫ですよ、俺らが乗る船は［貸切］ですから」

「「「「「は？」」」」」

全員の心が一つになったとは言うまでもない

「誰だよあいつ……」

［貸切］の次元航空船の中……椅子に座りながらクラウスは一人小さく呟く、その視線の先には彼が知らない人物、いや、一様自己紹介もしたしこの一ヶ月の間にちょこちょこ聞いていたので知らないわけでは無いのだがそこではない……

彼は転生者だ……

死んで神？のような人物に助けてもらい特典を持ってこの世界に生まれてきた。

当然この［リリカルなのは］の世界を希望したのも彼だ。

だが彼が遭遇しているのは原作では無かった設定。

完全なるイレギュラーの存在……

（俺がいる事によって生まれたイレギュラーか？それとも他の……）

頭の中で様々な可能性が渦巻く

彼が六課の副隊長並の力を持っている以上、今の実力でどうこうできる話ではない

（まずはしばらく様子見か……）

彼は知らない

ケントは転生者などでは無い事を

彼が、管理局の実質的トップだという事も

「ケント兄さん」

「ん？どうしたエリオ？」

自分の席で雑誌を読んでたらさっきまで遊んでいたエリオが声をかけてきた

この船は貸切だから多少騒いでも大丈夫だ。

なのでちびっ子達は探検やら鬼ごっこをしていたのだが今は疲れてぐったりしている

だけどエリオ、キャロ、ヴィヴィオはいいとしてなんでスバル、お前も混ざってんだ？

ちなみに［兄さん］というのはヴィヴィオが俺の事をそう呼ぶからエリオやキャロもそう呼び始めただけだ

「今から僕たちが行く所ってどんな所なんですか？」

「どんな所か～、まあ大自然っていうのが妥当かな……これ見てみろ」

自分が見ていた雑誌を見せる

そこには高くそびえ立つ山や遥か遠くの水平線と夕焼けが見えるエメラルドグリーンの海

「向こうは今夏だからな、海に入り放題だ」

「凄く、綺麗です」

雑誌を食い入る様に見ながら目をキラキラさせるエリオ、かわええ……

「あと一時間ぐらいだからなおりる準備しとけよ」

「あっ、はい！」

元気よく挨拶をして走って行くエリオ、雑誌……もっていくなよ……

「ありがとね」

「いきなりどうしたんですか？」

隣にいるフェイトさんがいきなり声をかけてくる

「エリオとキャロがこんなに喜んでるの久しぶりだからさ……」

「そんな事無いですよ、確かにあいつらははちょっと大人びてますけどフェイトさんと一緒にいる時、凄い嬉しそうな顔しますから」

「そうかな？」

「少なくとも俺にはそう見えますよ、少しは自信を持っていいんじゃないですか？」

そういうと一つ「うん」と頷いて二人の元へ駆け寄って行く

フェイトさんは事件が終わってからまだ一度も俺の事を追求しようとはしない
スカリエッティのラボでの出来事、聞きたい事は山ほどある筈なのに彼女は待っていてくれている。俺が自分から話出すのを……

＜間もなくルヴェラ空港に到着します。搭乗中のお客様は……＞
アナウンスが流れる、まあせっかくの旅行だ、辛気臭い事は出来るだけ無しにして楽しもう！！

これが……俺にとって最後の旅行になるかもしれないから……

第４３話　作者は熱でノックダウンです

「海だー！！」

「うみだぁーー！！」

快晴の空
まばゆいくらいに光り輝く海
気持ちの良い潮風

ルヴェラ旅行初日
予定よりも少し早く現地につく事ができ今は丁度お昼前
ホテルに大半の荷物をおいた後、ヴィヴィオやスバルがはしゃぎまくって速攻ホテルのビーチに来て見た訳だがいやはや……
ミッドチルダとはまた違う風と臭いがして気持ちがいい

周りの男性客が俺に恨みの視線を向けて来るが承知の上だ……気にしたらいけない……
分かり切った事だが六課の前線メンバー達はみんな美女ばかりだ
その美女達が今に至っては全員水着……俺も着替え終わって合流した時は少し見とれてしまったし……
エリオは子供だから良いとして俺は十九だ、身長の事を入れたら高校生ぐらいにも見えなくはないがそれでも子供とは違い［男性］だ
そんな男性の俺が水着美女達の真ん中にいるとすれば……こうなる事は必然だ……
男といえばクラウスもいるがあいつはいわゆる［逆ナン］と言うものをされて少し遠くの方で大量の女の子に囲まれている

どうやら男友達数人と来ていたらしく、人数的には同じぐらいなのだがその男子達は放ったらかしだ。可哀想に

「はぁ」

「ため息なんてどないしたん？美女ばかりの海がそんなに不満か」

俺が周りからの視線に耐えていると唐突に狸……もとい借金執事が声をかけてきた

「なんか今ものすごい失礼な事言われた気がすんねんけど」

「気のせいだと思いますよ？あと不満なんて全然ありませんよ、ただ世の中の男性の殆どを敵に回してる様な気がして」

「？、ようわからんけどほら、ビーチバレーしようや！！シグナムとフェイトちゃんもするそうやから」

ビーチバレーね～、よくよく見て見ると金髪美女のフェイトさんが元気よくこっちに手を振ってこれまた美女のシグナムさんが腕を組みながら待っている

てかフェイトさん……黒のビキニって大胆すぎません……道ゆく男性が全員チラ見してますよ……あっ、今一人の青年が彼女にひっぱたかれた…

「な～にガン見しとんや～、フェイトちゃんのナイスバディにやられたか？」

「な、なにを！！」

「だってずっとフェイトちゃん見とんやんか、胸か！胸がええんか！！」

「ビ、ビーチバレーでしたっけ！？頑張るぞ～、オー」

「あっ！逃げるな～！」

俺だって男の子なんです

「手な訳で、最初っから全力で行きますよ！」

「もとより負けるつもりは無いよ！！よろしくねケント！！」

組み分けは至って簡単で
ミッドＶＳベルカの戦い
向こうはシグナムさんとはやてさん、厄介なのはシグナムさんかな？
ああ、また男共からの恨みと嫉妬の目線が……

「ほないくで〜！」

はやてさんが掛け声とともにサーブをする、サーブする前に少しだけニヤリと笑った様に見えたのは気のせいだろうか？」

「フェイトさん！！」

「任せて！」

レシーブ、トスと上手い具合に繋げ強烈なスパイクをフェイトさんが放つ、てか早ぇ！弾丸かよ！！

「主！」

「任せた！シグナム！！」

だがそんな弾丸スパイクもシグナムさんによって防がれはやてさんがトスを放つ、そしてそのまま腕を振り上げ……

「紫電」

「は？」

「一閃！！」

ズバゴーン、というビーチバレーでは絶対聞かない、漫画の様な音をして、ギュルギュルギュルとボールが砂浜にめり込み回転した後静かに静止する、なっ、

「なんですか今の！！」

「ふふん、魔法の使用禁止なんて一言も言ってないで」

「卑怯な……」

「卑怯でも狸でもなんとでも言い！！この勝負、勝たせて貰うで！！」

ハッハッハッーと悪役に良くありそうな高笑いをしながら得意そうに笑うはやてさんとどや顔するシグナムさん

「フェイトさん……」

「分かってるよケント」

「この勝負貰ったーー」

甲高い声をあげてはやて……もとい狸がサーブをしてくる。少し痛い目にあってもらいますよ

そして……

ズバァァァン！！

「……え？」

ベルカ組が硬直している、まあ当たり前だろう、だってまだサーブをして相手コートにボールが入った直前にボールが跳ね返ってきた

んだから

「え～と……今のは？」

「閃光ですよはやてさん、ボールまでちょうこうそくで移動してはじき返させてもらいました」

「なっ！？レアルスキルなんてずるいで！！」

「勝負なんて勝てばいいと言ったのは何処の狸ですか！！全力で行きますよフェイトさん」

「徹底的に叩き潰すよケント！！」

「それで勝ったと思ったら大間違いやで！！」

「この勝負、負けられれん！！」

そこから始まったどこぞの超次元サッカー顔負けのビーチバレーてかバレーってよんでいいのか？

「ファイアトルネード！！」

「うぉぉぉぉぉ！！くらえ！ゴッ○ハンドォォォォ！！」

「なにお！響け！終焉の笛　ラグナロク　ボールバージョン！！」

「その程度じゃ私達には勝てないよ！はやて！！」

「ぐおぉぉぉ！紫電一閃！！」

「同じてが通用するかぁぁぁ！！」

結局試合は引き分け、今から昼ご飯らしいから終了だ。周りを見渡すと地形が変わっていたけど何時の間にかシャマルさん達によって結界が張られていたので大丈夫だろう

「次は負けへんで」

「それはこっちのセリフですよ」

取り合えず腹減ったんで飯にしよう

「こりゃまた……」

俺達が移動した後、そこにあったのは戦場だった

てかこれ一回なかったか？たしか……そう地球だ地球！！あのときもたしかバーベキュー、そして今回も……

「教官命令だ！！スバル、その肉あたしによこせ！！」

「職務乱用ですよヴィータさん！！これは私が育てた肉なのであげませ～んってああ！！シグナムさん！！」

「油断したなスバル、その一瞬が命取りになるぞ」

うん、まあ今回もバーベキューな訳であって前と同じ様に戦場と楽園で別れてある

戦場の方はスバルやヴィータさんや今来たシグナムさん達、ちなみに肉を焼いているのはなのはさんだ、はやt……狸はさっきの試合で体力を使い果たしベンチの上でぐたってる

スバル、お前の隣にある串の山はなんだ？もしかしてそれ全部お前が食べたのか？

クラウスはこの場にはいないどうやらまだ遊んでいるらしいな……

「ケント君ケント君」

「何ですかシャマル先生？」

「はいこれ」

シャマル先生が差し出したのは……何だよこれ……どうやったら肉が緑色に焼けるんだよ……てかこの野菜なに？なんかウネウネ動いてる様に見えるんだけど……

「食べて「遠慮しておきます」ど、どうして……」

そんな目をウルウルされても食べないものは食べません

「大体前回そのせいで俺、死の淵をさまよったんですからね！！」

「こ、今回は大丈夫よ！！［焼いただけ］だから」

「焼いただけならどうして肉が緑色になるんですか！！」

「こっちの方が目に良いわよ」

「……。」

駄目だこの人、早く何とかしないと……

「食べません！！」

「そんな事いわずに」

「その辺にしとけシャマル……お前の料理を食えば生きては帰れまい」

「おう、ケントを殺したく無いんだったらやめろ」

「二人とも酷い！！」

ヴィータさんとシグナムさんのおかげで何とか踏みとどまってくれた様子……

「それでも諦めなーーい！！」

「「なっ！」」

バ、バインド！！ちょっ、ちょっと！！

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

その瞬間、俺の意識はブラックアウトした

「はっ！？俺は……」

「気がついた？」

目が覚めると俺はレジャーシートに仰向けになって寝ており隣にはなのはさんがいた

空はもうオレンジ色になっていてもう夕方だ……

「お、俺はなんで気絶していたんだ？」

「覚えてないの？」

「えっと……」

何故だろう？思い出そうとすると体が全力で拒絶する

「無理に思い出さなくてもいいよ、むしろ忘れたほうが身のためだし」

「そ、そうですか？」

「にゃはは　（シャマル先生のフルコースを全て食べたなんて死んでもいえない）……」

まあ簡単だ。

シャマル先生の料理で気絶したのならシャマル先生の料理で復活させれば良いのではないかという考え

その考え通り気絶しているケント食べさせたのだが……結果、悪化した

そんな事をケントが知るはずも無い

「ん？もう夕方ですか、みんなは？」

「もうすぐ戻って来ると思うよ。ケント君はしばらく横になっておいた方がいいよ」

「お言葉に甘えさせてもらいます」

なのはさんはクスッと笑うと周りの荷物などを整理し始める

手伝いたいが何故だか体が上手く動かない

ホントに何があったんだ？

まあそれからみんなが帰って来てからホテルに戻った。
しきりに体調の事を心配してくれたのだけど……ホントに何があったんだ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6481u/

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～天駆ける翼～

2011年11月29日01時49分発行